



313
731



始



特220
604



友納友次郎著

高等小學讀本の眞使命

男女用
卷三

東京 明治圖書株式會社



序

讀本も卷を重ねるに随つて、文學的色彩がいよゝゝ濃厚となつて來ました。

特に最終學年の此の卷は、文學的趣味の濃厚な點から云つても、讀本内容の充實してゐる點から云つても、殆んど間然する所なき出來映で、眞に昭和維新の教育に適應あはしい讀本として、推頌かほにあまりあるものでありませう。

今試みに讀本に就いて之を見ますと、先づ古いところでは、駿臺雜話の「阿閉掃部」、東遊記の「甲冑堂」、吾妻鏡の「由利八郎の意氣」、雲萍雜志の

「中古の誠實」、平治物語の「待賢門の戦」、新しいところでは、巻頭第一にある大和田建樹氏の「春晴千里」を始めとし、藤岡作太郎氏の「五百羅漢の書幅」、阿部次郎氏の「月見草」、虚子の「鳥の聲」、楚人冠の「噴油」、蘆花の「夕立雲」、蘇峯の「返子だより」、さては柳樽の「川柳」、ツルゲエネフの散文詩「雀」など、眞に送迎に暇ない程で、古文今代文取まぜて、各種各様、千紫萬紅の趣を呈してゐるのは、従來の讀本に嘗て見ない偉觀でありませう。

讀本の内容が斯く充實して來ますと、これが取扱にも一段の工夫を要しませう。古文には古文の作法があり、現代文には現代文の呼吸があります。この作法を會得し、この呼吸を飲込むことによつて、初めて古文を味ひ、現代文の趣に接することが出来るのであります。

殊に現代文の取扱に於ては、其の筆者の趣味思想信仰の一般を明かにして、それを背景にして味つて見るでなければ、其の文の生命とする趣味も思想も、乃至文の光澤も潤ひも、全然感知し得ないばかりでなく、折角の教材も何等意義をなさないことになるのであります。つまりそれらが現代文の現代文たる特色で、魂と魂の接觸、靈と靈との交渉——それはよし淺く、よく小さくとも、——そこらに所謂讀書人としての大きな意義が存してゐるのであります。

本書は斯うした見地に立脚して、原據を有するものには其の原據を擧げ、参考資料を必要とするものには其の参考資料を提供し、どこまでも讀本運用の自由を讀者に與へようと試みたところに、本書の大なる使命

序

が存してゐるのであります。

淺學非才の私、尙十分に讀者の満足を買ひ得なかつたことを遺憾とするのでありますが、これによつて幾分にも讀本教育の一生面を開拓することが出来ましたら、望外の仕合とするところであります。

終に臨んで衆議院の速記技手杉山直喜氏と清水武次氏とが、本書の爲に親しく速記の勞をとり、且つ原稿整理の一切を御負擔下さつたことを附記して感謝の意を表します。

昭和二年四月

著 者 識

目 次

第一課	春晴千里	(一)
第二課	五百羅漢の畫幅	(一七)
第三課	文字	(三)
第四課	鳥の聲	(三)
第五課	感情	(七)
第六課	ベスタロツチ	(八三)
第七課	川柳	(六)
第八課	噴油	(二六)

目 次

目次

第九課 旅行先より先輩へ……………(一九)

第十課 ナボレオン……………(二〇)

第十一課 空の景色……………(二四)

第十二課 望遠鏡と顕微鏡……………(三五)

第十三課 バクテリア……………(三六)

第十四課 阿閉掃部……………(三四)

第十五課 租税……………(二七)

第十六課 水と風景……………(二七)

第十七課 天然記念物……………(二七)

第十八課 由利八郎の意気……………(四四)

第十九課 夏の曉……………(四三)

第二十課 中吉の誠實……………(二二)

第二十一課 夕立雲……………(四五)

第二十二課 會社……………(四九)

第二十三課 逗子だより……………(四五)

第二十四課 地震……………(五二)

第二十五課 日本の風土……………(五〇)

第二十六課 ビクトリヤ女帝……………(五四)

第二十七課 罐詰……………(五六)

第二十八課 落日……………(五七)

第二十九課 待賢門の戦……………(六一)

第三十課 興國の民……………(六〇)

女子用 第八課 雀……………(六〇)

女子用 第九課 歸宅の日取を聞合はす……………(六〇)

目次

目次

女子用 第十課 小野寺十内の妻……………(六四)
 女子用 第十一課 西洋の家庭……………(六三六)
 女子用 第十四課 甲冑堂……………(六四六)
 女子用 第十八課 慈善家キャサリン……………(六六七)
 女子用 第二十課 鏡……………(六七〇)
 女子用 第二十一課 温泉を問合はす……………(六八二)
 女子用 第二十四課 月見草……………(六八五)

高等小學讀本の眞使命

卷三 男女用

友納友次郎 著

第一課 春晴千里

原文は「雪月花」に據つて人口に膾炙した大和田建樹氏の名篇「千里の春」です。

大和田建樹氏は宇和島の藩士、大和田水雲氏の長子で、安政四年四月宇和島に生れました。

幼より學に志し和歌を好み、宍戸千建、穂積重樹に學び、漢學及び國學を藩校に修め、夙に

秀才を以て聞えてゐました。其の後廣島外國語學校に入つて英語を修め、十八歳の時之を卒

へ、明治十二年上京して獨學を以て國文學を専攻し造詣甚だ深く、職を東京大學の編輯所に

奉じ、次いで古典講師に擧げられ、又男女高等師範學校に教授しましたが、後悉く之を辭し、

第一課 春晴千里

海内を漫遊し専ら著述に親しみました。三十七年跡見女學校及び雙葉高等女學校の講師となり再び教鞭を執りました。

氏は容貌肥満、稟性恬淡、門下生の欽慕する所となりました。晩年脊髄病にかゝり横臥起つことを得ず、偶々海軍省の囑に應じ海軍々歌を作り、孜孜勉勵筆を止めず、爲に一層病勢を加へました。其の遂に起つべからざるを知るや、急に家人をして親戚知己門弟を病床に招かしめ、永訣を告げ、平生得意の謠曲を朗吟し、曲了つて嘆しました。時に十二月一日、年五十四、著書甚だ多く、古文讀本、日本辭典、應用歌學、和文學史、新體詩學、雪月花、歌謠類聚、日本大文學史、和文典等があります。又謠曲に關するものには謠曲通解、謠曲文粹などがあり、唱歌に關するものには明治唱歌、帝國唱歌、鐵道唱歌等があり、就中鐵道唱歌は一時天下に傳唱されて三歳の童子も尙之を口吟するに至りました。

原文「千里の春」は「雪月花」の卷頭第一に置かれた名篇で、その艶麗花の如き優雅な筆致は細時讀書子の血を沸かせ愛讀措く能はざらしめたものでした。参考のために先づ其の原文を擧げて置きませう。

千里の春

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の緑を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を引行くものは何ぞ。一列の汽車、今や、東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫しいだすは、歌か、詩か、抑々畫か。

七砲臺の邊、波穩にして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。帆を半ば張りて出で行く舟あり。櫓を操りて横ざる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、探れども見えず。松青き處、彩り添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は此の美を送りて旅客を慰め、詩人は彼の美を詠じて春に謝せんとす。

藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。

三保の松原廻りわたりて、春は畫の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造化の妙技に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆は動かんともせず。杳として認められたるは、伊豆なるべし。富士山は水彩畫の如くにして、窓の右に立ち、又、左に見はる。

平原十里、麥は綠に、菜花は黄なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。田夫は金の鯨を指して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して、我が好

第一課 春晴千里

む方へと人を勸む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡今は何れの處ぞ、問へども答へず。霞に疊まる、遠近の山、或は淡く、或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、栗津の松風獨り昔に似たり。東寺の塔は睦まじく我を迎へて立ち、鴨川の水はなつかしく我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ひ、懐かしき友と語るに似たるは、我が京都に著きしときのいつもの心地なり。而して、年一年、其の感情の深きを加へゆくを覺ゆ。

山紫に水明らかなる處、唯夢の如く、現の如く、三條を渡り四條を渡ること、日に幾たびぞ。露闌を柴に折添へて戴きつれたる大原女も、いつしか我が友となれるが如し。如意嶽より吹き來る春風は軽く我が袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。

類なき晴天は日々老若男女を誘ひて、西へ東へと群れゆかしむ。さしつゞきたる日傘は橋の欄干とともに水に影を落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿せり。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、恰も一幅の四條畫を展べたるが如きに、姥は此の間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。暫し休みて、眺めわたせば、淺黄に、藍に、霞みわたれる八幡・山崎のあたりも面白きに、東寺の塔を松の木の間で曇がきにせる筆こそは殊に巧なれ。西山の花みる人は多く先づ御室を指す。松青く、樓門赤く、茶煙絶えなくに揚がりて、花極めて

白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の聲長へに高き梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて生立つ松、其の間を點綴して咲きほこれる花、嵐山の春こそは今閑なれ。小舟に乗りて漕ぎゆく人あり。岸の此方にて眺むる人あり。一條の渡月橋は錦の袂を載せて、此の大堰川を横ぎれり。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下に展げらるゝ一幅の園、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出だせる如く、又、友禪を染めなせるが如し。

途に、太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客來らず。小女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山を籠め、叡山を繋りて、やう／＼鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ、紫に、紅に、藍に、墨に、見る／＼いろどられゆく山影、うすく、青く、黒く消されゆく人影、いづれ詩中の者ならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、かへりみれば西山もなく北山もあらず。

教材は殆ど原文と同一ですが、取扱の便宜上文字や語句の一部分に僅かな修正を加へてあります。文は原文同様に一と二とに分かれ、一は東京から京都までの主とした東海道の紀行、

第一課 春晴千里

二は京都の景勝を主とした遊覽紀行の形になつてゐます。

「春晴千里、山又山、水又水。近き水は澄みて山の緑を浮べ、云々」

流石に詩人、まるで長詩でも讀んでゐる様な氣がします。春晴千里、山又山、水又水云々と疊みかけた語句配置の味は何とも言へません。一篇無韻の詩、朗々吟じ來り誦し去つて、興趣更に盡くすることを知りません。

「七砲臺邊波穩やかにして、高く低く群飛ぶ鷗、落花の風にひるがへるに似たり。云々」

此の段は品川から横濱邊りまでの景色で、波靜かな東京灣の風光が見る様です。七砲臺は幕末海防の爲に築造されたもので、點々海上に浮ぶ光景はまるで繪を見るやうで、最近其中の一つは東京海上公園の豫定地となつてゐます。

「松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は是等の美を贈りて旅客を慰め、詩人は其の美を詠じて春に謝せんとす。云々」

此の段は大船藤澤邊りから沼津邊りまでの風光で、箱根足柄の峠を越えて御殿場沼津附近の風光をまるで詩のやうな麗筆で美しく描き出してゐます。全文殆ど對句によつて成り、句

を重ね文を疊んで明媚な風光を宛がらに描き出したあたり、眞に光景目睹です。

「三保の松原けむりわたりて、春は繪の如し。碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造化の妙筆に漏れん。云々」

此の段は興津蒲原邊りから静岡を過ぎて焼津藤枝の邊り、波白く松青き海の景色や、靈峯富士の右に左に見えつ隠れつする繪さながらの風光です。三保の松原の遠望、畫けるが如き富士の玉容、日本の春を此處ばかりに集めたかと思はれる様な景色です。

「平原十里、麥は綠に、菜の花は黄なり。熱田の社を左に見て春風に吹かれ行けば、云々」

此の段は名古屋附近の景色で、綠麥黄菜果しもない尾張平野の風光を叙してゐます。ひろひろとした平野の間を縫ふて、左に熱田の森を迎へ、右に名古屋の城を眺めた氣持はまた一段です。

「彦根去り、草津來り、瀬田川を渡れば、京都も早近くなりぬ。云々」

此の段は湖畔の風光です。彦根去り草津來りと、ブツ／＼切つて汽車の進行を想はせたあたりは何とも言へません。汽車が關ヶ原の附近を過ぎて近江平野に出ると目の前に琵琶湖の景色が展開されます。今まで山ばかりに倦いてゐた旅客は、思合せたやうに車窓遙かに此の廣

廣とした琵琶湖の景色に快哉を叫ばないでは居られません。彦根、安土、近江八幡、石山、大津と湖畔を傳つて走る は真に送迎遠なきの感があります。「彦根去り草津來り」の句法が其の氣持を能く表現してゐます。

朝日將軍は木曾義仲のことで、義仲は粟津の原で戦死してゐます。汽車は其の古戰場を通過してゐますので、其の遺蹟は指顧の間に在ります。義仲の墳墓の地たる義仲寺も、刀を御へて悲壯な最期を遂げた今井兼平の墓も、鐵道線路の間近に在ります。「粟津の松原獨り昔に似たり」はそれを物語つてゐます。

鳩の海は琵琶湖の異名です。

『東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌ふ。云々』

逢坂山の壁道を ぎて京都に入つた氣持です。京都に入つて先づ第一に目に着くのは東寺の塔で、一番感じの深いのは賀茂川の流です。此の文は京都の春の眺めが中心になつてゐます。「慕はしき母に會ひ、懐しき妹と語るに似たるは云々」に筆者の感興の程が窺はれませう。

東寺は元眞言宗の總本山で、今は眞言宗東寺派の大本山、本名を金光明四天王教王護國寺

といひ、略して單に教王護國寺ともいふ。西寺に對して東寺といひ、西寺を右寺といふに對し左寺ともいひます。京都市下京區九條町に在つて、僧空海の開基です。

二

『山紫に水明かなる處、唯夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること日に幾度ぞ。云云』

二は京都に對する感興です。此の段は其の冒頭とも看做すべきもので、京都に對する筆者の愛著の念が文の總てに盛上つてゐます。「山紫に水明かなる處」は山陽の「山紫水明處」に出たもので、京都の景觀は此の一語に盡きてゐます。

大原女は「オハラメ」と讀み、柴・薪・花・梯子などを頭に載せて京都の市街に出て商ふ京近郷の婦女の稱で、愛宕郡八背大原の里から出るのが最も古く且つ多いところから、概して之を大原女と稱してゐます。併し、實際はこれらの里の外に、高尾、中川郷若くは白川、賀茂などから出るものも尠くありません。これらの村里のものには、それら特有の風俗、禮儀作法などがあつて、明かにそれを區別することが出来るさうです。ですから京では八背大原女、高尾女、中川郷女などと區別してゐます。八背大原女は高尾女よりも頭に戴くもの

が軽く、姿も優美です。八背から京の端までは三里ばかり、大原からは四里餘で、此の間は品物を牛馬に負はせて出て來ます。高尾女は醜い方で、言葉遣ひも荒く、中には二十四貫程の重荷を戴く者もあると云ひます。其の特徴としては煙草をくゆすらのを誇りとしてゐることです。京まで三里餘の路を往復し、夜は十二時に至るも賣つてしまはなければ歸りません。中川郷女は材木類の外は他の品物を商ひません。多く材木商の妻女姉妹でありまして概して美貌の者が多いさうですが、言葉は頗る卑しいさうです。中川郷女は短袴を穿ち頗る異様です。すべて大原女の風俗は、足に脚半を穿き手に甲掛を着けてゐます。その村々によつて少少の違ひはあります。白河・下鴨などから出る者には花賣が多いさうです。通常菖蒲、五月躑躅など野生のまゝを折り來つて商ひます。概して大原女の出る村々は、男子は餘り町に出ないで、家に在つて梯子や蓆などを造り、又農業を主とし、其の間に山へ行つて木を樵りなどして、それを妻女に鬻がせるのが風習となつてゐます。

如意嶽は東山の主峯で、海拔千五百五十尺、又大文字山とも云ひます。毎年八月十六日に施火を行ひ、大の字形に火を焚くので有名です。

「打續く晴天に、都の人々は春にあかされて西へ東へと群行く。云々」

此の段は主として清水觀音の風光を叙してゐます。清水寺は「キヨミヅテラ」で、京都市下京區清水一丁目に在つて、法曹宗・西國巡禮札所の第六十番に當り、音羽山とも稱します。本尊は十一面千手千顔觀世音の立像であります。開山は延鎮、本願は阪上田村磨です。

「西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く、樓門赤く、茶を煮る煙絶えなく、あがりて、花極めて白し。云々」

此の段は西山の花、特に御室の風光を叙してゐます。御室は山城國葛野郡にある地名ですが、今は洛北仁和寺の別名のように用ゐられ、又同寺所在地方の名稱として、花園村大字御室とも稱してゐます。宇多法皇落飾の後御室を此處に營まれてから此の名があります。

仁和寺は眞言宗御室派の大本山で、大内山と號し、古くは「ニワジ」とも云ひ、俗に御室「オムロ」と稱してゐます。

此の地方は一帶に櫻の名所で、古來御室の花と稱して遊覽地となつてゐます。京都では三月二十一日を期して此の寺に參詣するのを御室詣と稱へてゐます。

「重る岩根を踏みしめて生ひ立つ松、其の間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。云々」

此の段は名高い嵐山の眺めです。嵐山は京都の西方葛野郡の南西隅に聳え、海拔約一千尺、西は丹波の山地に連互し、北東の麓に大堰川を帯びてゐます。嶺上、松、楓、櫻などの樹木に富み、春色秋景兩つながら佳麗す。櫻樹は龜山上皇が大和の吉野から移植せしめられたものだと傳へられてゐます。大悲閣は西方の山腹に在ります。恵心僧都の作千手観音を本尊としてゐます。山麓から對岸の地に架する一長橋を渡月橋又は御幸橋といひ、長虹一帯山水の風致を添えるばかりでなく、北岸の三軒家と共に嵐山眺望の一勝區として著はれてゐます。「途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。云々」

廣隆寺畔夕陽の景趣です。太秦は葛野郡にある地名で、古の葛野郡葛野郷の地域、今の太秦村の大部です。應仁、仁徳兩朝に歸化した秦始皇帝の後裔融通王の子孫秦氏の住地として古來史上に知られてゐます。廣隆寺は又太秦寺「ウヅマサテラ」ともいひ太秦村に在ります。推古天皇の十一年秦河勝が聖德太子から佛像を賜はつて此の寺を建て、安置したと傳へられてゐます。境内風致に富み櫻花の名所として知られてゐます。

「暮色は東山をこめ、叡山を廻り、漸う賀茂川におそひ來れり。云々」

此の段は夕暮の景色です。暮色は靄然として東山を罩め、叡山を廻り、次第に賀茂川に襲

ひ來つたあたり、眞に詩的です。「清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ云々」のあたり、讀者もおのづから詩中の人たるの感があります。

補充文には同じ「雪月花」の中から、次の「鎌倉の海」を擧げておきませう。

鎌倉の海

ことしもかまくらに遊ぶ事二十日になりぬ。明暮友となりたる波の聲、山の姿、砂の色、貝の光、わすれんとしてもわすれられず。

宿りするところは材木座光明寺の前、ゐながらにして鎌倉の海を一目に望むべく、向には靈山崎につゞきて江の島の浮べるあり、少し右にはなれて雲まに富士の聳ゆるあり。それより長谷の村里、由井の松原、ただ手にとる如く波をへだて、打ちむかはるゝもおもしろきに、南の方には伊豆の大島さへ、晴れたる日には鯨のしほふく心地して向ひたてるよ。左の方に隣してつきいでし浦里は飯島とぞよぶなり。

朝とくおきて渚にいづれば、貝は打ちよせられて砂の上であり、薄紅にて花の如きもの、眞白にして鳥の如きもの、帆立貝めきたるもの、月日貝らしきもの、ぬれたる色のうつくしきよ。子供は走りよりて拾はんとするに、波は來りて拾はせじとすまふ。

磯にひるがへる赤旗は海のあるを告げ、青旗はなぎたるを知らするなり、今日も青旗なりとてよるこぶ子供は、潮あびんとて勇むなるべし。朝けの煙こゝかしこのぼりて、日影はやうく我もとに來りぬ。白布の筒袖、麥はらの帽子、ものゝぐはよし。いざ波とけふも戦はん、戦ひつかれては、磯にあがりて砂に臥し砂に坐す、又たのし。子供は工兵となりて山を築けば、波また大舉し來りて一打に奪ひ去るもにくからず。

板を浮べて双の手に持てるは、およがんとする人、手を引きつれて舞踏しつゝあるは、波を飛びこす人、世にものおもひなしとはかゝる境界にやあらん。見る人も見らるゝ人も罪なく慙なく又憂なし。

おのが生活は家をこぞりて六人、みづから炊きみづから煮るをもてたのしみとす、平生魚のあたひしらざる主人も、濱にいで、はいさきべらなどいふもの提げかへり、みづから庖刀とりてまないたに向ふ。鱗は逆にとび鱗は半ばちぎれたり、笑ふなよ是も社會の一進歩なるを。

沖の片帆にのこりたる夕日も、いつしか影ををさめて雲を染めたり。染められて立てる富士、忽ち紅に、忽ち紫に、忽ち黒く、忽ち薄く、遂に姿をかくして止みぬ。天女の額か造化の影か、抑も美の神の弄びけん筆か。

うしろの山は月になりぬ、數へ出ださるゝ松のひまより、黄金の盃はきらめきのぼりぬ。波とこ

ろくく白く光りて、やうく銀をちらし、又黄をちりばめゆく。

夜もふけぬ、月をふみて遠くあるけば、我かけあざやかに砂にあり、輿に乗じてあくがるゝ人、我と影とのみならず、詩を吟ずる聲はかしの岩の上にも起れり。

時としては朝霧を分けて山路にあそぶをりもあり、姉なる子は妹の手を引きて従ひ來りぬ、末の弟は父の肩を輿にしてにこくといさむ。いざ花のあらんかぎり集めてみんといへば、姉と妹ははやおくれじと摘みはじめたり。螢草、野菊、蚊屋草などを始とし、名も知らぬ花さへ小さき手にあまりぬ。肩なる子のあれよくと指さすを見れば、岸のひたひに咲きほこる姫百合、のぞみは高けれど、とどかぬをいかにせん。

畑にいづれば、赤き毛を重ねたる玉蜀黍あり。絲の弓を掛けたる十六大角豆あり。此中道を急ぐとなしにうねりゆけば、穗にいでたる粟は頭うちたれて送り迎へす。

けふは叔母さま東京よりをはずとて、子供ら朝はやくより起きてさわぐ。午後の汽車は待ちつる人をのせて停車場につきぬ。やがてうちつれ鶴が岡にのぼる。今を盛の池の蓮は、かうばしき風を送りて、銀杏のもとにたゞずむ人を吹くもきよし、子供はあるじぶりして、こゝかしこをしへめぐりつゝ口々にいふ、叔母さま明日もおはせ、明後日までもおはせと。

一日小坪より山越して逗子に遊びし事もあり。坂つきて松の間より弓の如き入海を見おろしたる

第一課 春晴千里

けしきは、又たぐふべきものを知らず。砂白く波きよく濤に添ひたる家のさまもおもしろきに、之を境として蓮の如き青田のうしろに廣がるあり、港の方には貝ひろふ人蟻の如く、潮あむ人水馬の如し。かなたの山のそがれたるやうなるは鑑摺なるべし。それより右につづきては葉山の村里より、森戸明神の松林までまがふべくもあらず。子供よあの松の右なるが、をとどし休みて茶をのみたる處なるぞ。

磯におりては我もまた蟻になりて貝あさりゆくを、山より見る人ありやなしや、後よりさくら貝見えたりと呼び、帆立貝ひろへりと呼ぶ。

辨當はおのゝ結びつけて腰にあり、あの岩蔭やよからん、此木蔭はいかにとて、つひに森戸の明神まで來にけり。はじめ江の島の右に見つるふじ、今ははるかにわかれて江の島の左に立てり。鎌倉の海はわがすむ光明寺のあたりをのこして、親しくわれと相對す。木のもとに茶店あり、田舎娘ゐて茶をすむ。此磯には酔貝多しとて子供は渚に下りぬ、父は頼朝の遊びしといふ菜鳥ながめつゝ、茶碗を取りぬ。歌いまだ成らざるに、貝は手にくはこばれて前にあり。あはれ足をいためてかまくらにのこれる母上に、早くこれをみせばやと、かれもこれもいふ。

光明寺はものしづかなる大寺なれば、朝飯まつともあそび、夕飯をはるともまづあそびしところ、山門高く松の木の間に見えて、日ぐらしの聲遠く、苔むす石佛の前には風のもてこし落葉か

さなりて、夏秋しらぬ世界にも似たり、さはいへど本堂は陸軍幼年學校生徒にかりとられて、今は誦經の聲よりも喇叭の響く處となりぬ。夕日かげれば、いで、相撲取るもあり、擊劍つかふもあり、これを見るとき集まり來る女子供は、鐘樓のあたりをみたしぬ。夜に入れば濱涼し、兵士は多く砂ふみに出で、佛前の燈ひとり寺を守る。

第一課 五百羅漢の畫幅

新教材の中で一番光つた教材です。原文は藤岡作太郎氏の名著「國文學史講話」の序文の一節で、氏は同書を愛兒の形見の積りで心を籠めて物したのであります。氏が特に本誓寺の什物五百羅漢の畫幅の由來を序文に引用したのは、彼が亡見に對する切なる至情の發露だったのであります。教材の出來た前後の事情を忖度して見ますと、眞に一掬同情の涙に讀者は思はずホ、リとさせられませう。

自序

早くも三四年を過ぎぬ、深川の本誓寺に詣で、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき。畫は菊

第二課 五百羅漢の畫幅

池容齋が經營慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸け列ねて供養し、普く有縁の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。容齋が執筆の因縁については、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實はこの歴史畫家が畢生の心血を絞りに描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、また和氣清磨に神號を追贈あらせられしも或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初はこの十年苦心の作も發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく篋底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしかば、この事あまりに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誠に向ひて堪へがたき遺憾の情を漏したりき。時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり、手の中の珠とかしづきし一人の女年頃にもなりしかば、或る方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持參の衣服調度今はこなたにおきても詮なし、唯歎きの種ぞとて、婿の方より里方に返す、里方には受け取らず、一旦遣はし、女の遺具は即ちそなたの物、それを返さるゝは死したるものを離縁するやうにて、草葉の陰にもいかばかり悲しからん、これはそなたへ、いやこなたへと押問答の果、金兵衛は腕拱ぬきて、さらば吾に思案あり、今深川におはす行誠上人は淨土宗の大徳、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の縁ともなりぬべしといふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾を合せて一千兩の金を

行誠を捧ぐ。さてこそ行誠は容齋を招きて、喜ばれよ、御身の志は成りぬ、印刷の料は調へ得たりとあるに、容齋は涙ぐむまで難有く、脱稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかかりしなりけれ。年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべきと尋ぬるに、行誠は、善い哉、さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはゞ、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん、御身の満足より引いては世間の満足も、ひとへに世を早うせし乙女の爲、それを悲む父母の爲なるをと示す。それこそ吾にはふさはしき業、いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりと、沐浴齋戒して書き上げたが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折も、くさくさの供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍らしく面白き取集めたるがあり。これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたり哀れと見たるばかりにて、さして心にも留らず、畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかかりなど思ふまゝの事を言ひ散らして、さて過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな、昨日は人の身の上、今日はわが身の上など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひしひしと心の底に染みぬれ。吾も一昨年夏長女を失ひぬ、長女名は光、時に七歳、笑ひさゞめき遊び戯れしもの、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奥も計り知られたり、唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死

の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝ事か、かくても過ぎば過ぎるゝことか。ある時はありのすさびに過してし、なくてぞまことの哀れきは知りぬる。よくもあしくも咲き出でたる花の、手折らるゝはさてありぬべし、固き蒼の人の目にとまるともなく、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり。年長けて少しにても世にある甲斐の務をなしたらば知らず、やう／＼物のあやめも覺ゆる程に早くもとの闇路に歸りなば、かゝるものありしと知るは家の内の人ばかり、世にも知られで空しく來りまた往くこと、いかに悲しきことぞ。愚かなる親は、せめても亡き兒のわが心にまた人の心に忘れられずば、それをしもなほ生きたりと喜ばん。固よりわが家のものの生涯忘るべき管もなし、たと忘れじとはあらず、幼き罪なき兒はさま／＼の教訓をその親、その祖母に教へたり、もしや吾等の將來に得るところあらば、そは即ちわが兒の賜ともち齎きてん。さりとても現なの心や、過ぎ去りし面影と、残しゆきしこの教へとを身にしめて、いまだ足らず、願はくは忘れんとするわが友の一人にても、わが兒を思ひ出でんことを、知らで止みなん世の人の一人にても、かゝるものもありしよと慰まんことを、これのみぞ望なき後のわが望なりける。

豊太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やう／＼淀君の腹に生ませしみどり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてかその悲を忘れんが爲なりと、傳ふることのあるを、歴史家はそは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻ごとなりといはん。されど凡人に

もせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものを、當時の秀吉が胸の内を思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず。華山天皇は愛妃を先だて、御悲みに堪へたまはざりし、その機に乗じて、藤原道兼がその、かしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせたまひき、後にぞ道兼が欺けるなりと知りて、悔しく覺し召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔みたまひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善智識、亡き人の爲にはよくこそ朕を誘ひけれと、逃れ去る道兼を見送りて、満足して御髮は下したまひけんかし。おほけなき例を引くにはあらねど、今わが身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を顧みるなり。健かなるものは日々の務に勵みて、その悲を忘るべし、悟あるものはせん方なき世の習と、衛なき思に沈まざるべし、あはれ身も心も弱きものの、奮ひ立ちて働き勞るゝことも得せず、さりとして一節に思ひ諦らむることならず、つく／＼と日毎に同じ歎きを繰返すかな。永祿四年毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す、家臣等父君の恸傷いかばかり甚しかるべきと、心配一方ならざりしに、案のほか元就は悲痛の色なく、その子吉川元春、小早川隆景、及び家臣等呼びて、隆元の死亡は偏へに尼子滅亡の基なり、わが子の弔合戦と思ひて、皆々心一つにして向はゞ、強敵もいかでか挫かざるべき、勝利は掌の中なり、隆元の爲ぞ、位牌の見であるぞと、勢こんで言ひしかば、上下愁眉を開いて勇み立つ。これをしほに進めやとて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を抜き

たりといふ。論ずるものは、いふまでもなく、これ軍氣の沮喪するを憂へて、人心を鼓舞せしなりといふれど、そのみにては物足らず、夭折せし愛子を悼みて、一勝一功もその手に成りしと知らせばやとの、親心ならじやは。勇ましき世のことは思ひもよらず、吾にははかなき筆のあるのみ、南海の任に下りし時伴ひし人の、歸り上る時は一人足らずと、歎きて書きし貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひめぐる人の心ばかりは同じかりけり。されどわが日記は同じ事を繰返し、人に示すほどのものならず、何をがな世に公けにして愛兒の記念とせんと思ひ成りぬるも、筆執ることさへも懶くて、はかしくも心を定めず。

脇本十九郎君は家弟幸二の親友なり、最も亡兒を愛して、わが家に來る毎に、これと戯れ遊びたりき。君また文を能くす。されば吾一人にては事の成否も疑はしきに、君にこそとて、意中を述べたるに、君快くこれを諾す。これより暇ある毎に、吾口授し、君筆記す。されどなほもどかしからぬにあらず、吾のこゝちわるしとて、休むことも少からねば、君また他に務あるに、うち任せては身を委ねがたし。かくて一箇年の後にはと思ひしことも、あだに過ぎ、更に月日は過ぎて、早くも三年めになりぬ。今更飛び立つやうに覺え、われ人ともに急ぎて、やう／＼に稿を了へたるがこの文學史なり。此方はたゞ思ひ立ちたる儘にて、成案もなく、組織も立たず、ましてや拙き口より、とりとめもなくつゞ／＼と呻き出づるを、書き取りてこれだけに順序も立て、文章にも綴り成せし

は、ひとへに脇本君の功なり。これにて一わたりわが語りし事を世に示し得べく、否、わが語りしよりも以上に君は仕上げたりといへども、元來がよからぬ素地なり、仕立師の術もせん方なきところあるべし。われも新たに工夫して機を立てたるものにもあらず、わけて現代の文學の如き、概略をのみ申し譯に添へたれば、食ひたらぬことの多かるべし。かくて誇らはしく世に示さんこと、江湖に對して、また亡兒に對して、耻かしくは思へど、今はたそれもすべなし。なほ緒言としてさまざまの懷をも述べばやなど、初は思ひしかど、畏友西田君が眞心こめたる序文もあるを、既にこの三四枚の繰言さへ蛇足に似たりとやいはまし。さらばこゝに筆を擱く、同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。

序の終にある西田博士の序文といふのは次の通りで、これも亦頗る名文で、眞情の流露したところは遺がです。

東園學兄が其著國文學史講話を亡兒の記念として
出版せらるゝに當りて、余の感想を述べ

三十七年の夏、東園君が家族を携へて歸郷せられた時、君には光子といふ女の兒があつた。愛ら

しい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此子を失はれたので、余は前年 順に於て戦死せる弟のことなど思ひ浮べて、力を盡して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになりたる己が次女を死なせて、反つて君より慰めらるゝ身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を見たことのない余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた、着くや否や東園君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲を抱きながら、久し振りにて相見たのである、單にいつもの舊友に逢ふといふ心得のみではなかつた。然るに手紙にては互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向うては何の語も出ず、唯軽く弔辭を交換したまでであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探りて一束の草稿を持ち來りて、亡兒の終焉記なればと余に示された、かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたとのこと、及び余にも何か書き添へてくれよといふことをも話された。君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難き悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものでない、言語に表はし得べきものは凡て淺薄である、虚偽である、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對

して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも現はすことのできない深き同情の流が心の底から底へと洩うて居たのである。

余も我子を亡くした時に深き悲哀の念に堪へなかつた、特に此悲が年と共に消えゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死にし子の面影を書き残した、而して直に之を東園君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思つたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別に臨んで君の送られたその兒の終焉記を行季の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに、取り出して詳かに讀んだ、讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じきものとつくづく感じた。誰か人心に定法なしといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路をたどる如くに、余の心は君の心の如くに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた余の姉を失うたことがある、余は其時生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到りて、思ふ儘に泣いた。稚心に若し余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思つたことを今も記憶して居る。近くは三十七年の夏、悲慘なる順の戦に、唯一人の弟は敵機深く屍を委して、遺骨をも收め得ざりし有様、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸

の思未だ全く消え失せないのに、又己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は格別である。余は此度生來未だ曾て知らなかつた沈痛なる經驗を得たのである。余は此心より推して一々君の心を讀むことができると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた。初子は親の愛を專にするのが世の常である、特に幼き女の子はたまらぬ位に可愛いのことである。情濃やかなる君にして此子を失はれた時の感情はいかゞであつたであらう。亡き我兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯わけもなく可愛いのである、甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。これまでにして亡くしたのは惜しからうといつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない。女の子でよかつたとか、外に子供もあるからなどいつて、慰めてくれる人もある。併しこういふことで慰められやうもない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、又子供ができるだらうといつて慰めた人があつた。氏は之に答へて How can I love another child? What is Sonia. といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である、其間一毫も利害得失の念を挟む餘地はない、唯亡兒の佛を思ひ出づるにつれて、無限に懐かしく可愛さうで、どうにかして生きて居てくれ、ばよかつたと思ふのみである。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である、死んだのは我子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲むべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。

人は死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよといふ、併しこれが親に取つては堪へ難き苦痛である。時は凡ての傷を癒やすといふのは自然の恵であつて、一方より見れば大切なこととも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を残してやりたい、せめて我一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔君と机を並べてアーピングのスケッチ、ブックを讀んだ時、他の心の疵や、苦みは之を忘れ、之を治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は人目をさけても之を温め、之を抱かんことを欲すといふやうな語があつた、今まことに此語が思ひ合されるのである。折にふれ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である、死者に對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子顔よかりき、をんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である、冷静に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。併し余は今度この人間の愚痴といふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其物 (End in itself) である。いかに貴重なる物でもそれは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど尙い者はない、物は之を償ふことができるが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことはできぬ。而

してこの人間の絶對的價值といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテが其子を失つた時、*Over the dead* といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なるものがあつたであらう。併し人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、たとへ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なる者はなからう。徒らに高く構へて人情自然の美を忘るゝ者は反つて其性情の卑しきを示すに過ぎない。金州城外馬不前の一句ありて愈々乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我子の果敢なき死といふことに因りて、多大の教訓を得た。名利を思つて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴せかけられた様な心持がして、一種の涼味を感じると共に、心の奥より秋の日の様な清く温き光が照して、凡ての人の上に純潔なる愛を感じることができた。特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此處には深き意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である、死の事實の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることが出来る。

物窮すれば轉ず、親が子の死を悲むといふ如きやる瀬なき悲哀悔恨は、おのづから人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀れ果敢なき一生を送つた我子の身の上を思へば、いかに断腸の思がする。併し翻つて考へて見ると、子の死を悲む余も遠からず同じ運命に服従せねばならぬ。悲むものも悲まれるものも同じ青山の土塊と化して、唯松風蟲鳴のあるあり、いづれを先、いづれ後とも見分け難いのが人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば、何だか滑稽にも見える。生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も残さず、死んだとて悲んでくれる人だにないと思へば、哀れといへばまことに哀である。併しいかなる英雄も赤子の死に對しては何等の意味も有たない、神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作といひ傳へて居る畫に、死の神が老若男女、あらゆる種類の人を捕へ來りて、帝王も乞食もみな一堆の上に積み重ねて居るのがある、榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點より見ても、生きのびたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか、生きて居たらば幸であつたらうといふのは親の欲望である、運命の祕密は我々には分らない。特に高潔なる精神的要求より離れて、單に幸福といふ事から考へて見たなら、凡て人生はさほど慕ふべきものかどうかも疑問である。一方より見れば、生れて何等の人生の罪惡にも汚れず、何等の人生の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝、枕として死んでいつたと思へば、非常に美しい感じがす

る。花束を散らした様な詩的一生であつたとも思はれる。たとへ多くの人に記せられ、惜まれずとも、懐かしつた親が心に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき死をも慰め得て餘あると思ふ。

最後に、いかなる人も我子の死といふ如きことに對しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたならばよかつた、これをしたならばよかつたなど思うて返らぬ事ながら徒らなる後悔の念に心を悩ますのである。併し何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く、我々の過失の背後には不可思議の力が支配して居る様である、後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、深く自己の無力なるを知り、己を棄て、絶大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救ひ、又死者に詫びることが出来る。歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することができる。

尙卷頭の藤井紫影博士の序も得難き名文で、教材研究者としては看逃し難いものゝ一つであります。

序

むかし貫之任國にありて愛子を失ひ、惆悵の念に堪へず、婦人の筆に託して、哀慕の情を漏らしつ、一篇歸京の日記は、國文の上乗として、今なほ世にもてはやさる、文人の不幸が名篇佳作を出すの所縁となること、東西その例に乏しからず。昨夏、東圃家を舉げて、暑を小田原に避くるや、余も亦東上の歸途、その僑居を訪ひ、君が家庭の一員となりて、松青沙白の間に、君が子女と優遊嬉戯すること數日、偶々君が最愛の長女光子嬢、この春より學校に通ひそめたりとて、極めて活潑なるが、ひと目心地すぐれずとて、打臥せしに、病俄に漸みて、只三四日の間にはかなくなりき。假初のわづらひとのみ思ひけることの一大事となりけるに、君が歎き、余の驚き、今更に言ふべくもあらず、夢路をたどるゝ後の事ども行ひて、今は箱根の山の白雲も、相模の海の清き渚も、なき人のありし朝な夕なの思出とのみなりて、見るに物憂く、家をたゝみて君は東、我は西、言葉すくなくに露けき袂を分ちしも、只昨日の如く、眼大きく黒き瞳に人を見つむる光子嬢の面影、まながひにかゝれるを、早くも一周忌めぐり來て、これが記念のためとて、心こめて物せる君が國文學史は成れり。白金も黄金も玉も何せむに、寶の子を失へる悲しみには、天地をあげても換へ難きは、人の親の心なるめれど、大方の世の人は、君が光子嬢を失ひたるを悲むよりも、此好著を得たるを

第二編 五百羅漢の畫幅

喜ぶなるべし。こは君にとりては快からぬことならんも、生涯短き光子嬢が、此書によりて永く世に生くるを得ば、亦以て慰むるに足らんか。

繪圖扇のその朝顔や露じめり。

藤岡作太郎氏は國文學者で金澤の人、明治二十七年東京文科大学を卒業し、東京帝國大學文科大學助教授として國文學を教授しました。國文學の造詣頗る深く爲に文學博士を授けられました。著はす所 國文學全史の中平安朝編、異本山家集、國文學講話、近世繪畫史、松雲公小傳等があります。天性虛弱、善く病む、只讀書著作を以て娛樂としました。常に人に語つて曰く、「余若し強健ならば或は採花賞月に時を消せん、然るに蒲柳の質なるを以て漫遊散策に便ならず、却つて書卷に親しむの益あり」と。明治四十三年二月三日没、年四十一。

「深川の本誓寺に五百羅漢の畫幅あり。畫は歴史畫家として有名なる菊地容齋が苦心慘憺の筆に成りし大作にて、云々」

冒頭です。斯うして此の畫幅の出來た由來を物語らうと云ふのであります。

菊地容齋は江戸の人で、有名な歴史畫家であります。名は武保、通稱は量平、容齋は其の

號です。人となり道義の念に厚く、背徳ある者は之を假藉せず、遂に交を絶つに至つたので、人皆其の狹量に過るゝを誡めてゐました。號の由來も亦こゝらに淵源したもので、容齋と號して自ら誠としたのであります。十八歳にして高田圓乘の門に入つて畫を學びました。圓乘は加藤々麗の門下で狩野派の畫家です。當時徳川幕府の末葉に際し、海内事多く、外人近海に出没し、物情恟々、容齋は尊王攘夷の念厚く、忠臣節婦の像をゑがき世教を益せんと志し、多くの歴史畫を作り、特に南朝の事蹟を畫くを専らとしました。されば心を有職故實に潜めて、博く先人の遺蹟を研究し、前賢故實十卷を著はして歴史上の名君、義士、忠臣、烈婦の像五百餘人を圖し、之に小傳を附しました。星霜を経ること前後十有七年、書成るに及んで、之を孝明天皇に獻じて頗る嘉賞せられました。和氣清麿に神號追贈の事があつたのは、其の畫幅が與つて力あつたのであります。明治天皇も亦其の畫技を賞し給ひて、日本畫士の號を賜ひました。

容齋は少時貧にして自ら給する能はず、仍て畫を廢して醫たらんとしました。幕臣久貝因幡守其の畫技あるを知つて、資を給して其の志を遂けしめました。後、因幡守の委囑を受け、阿房宮圖其の他三幅を畫いて與へました。明治十一年六月十六日に齡九十一を以て歿し

ました。著すところ前賢故實の外に枕斜七卷、詩集、歌集、各一卷がありました。松本楓湖、渡邊省亭などは其の門下の逸足です。

本誓寺は東京の深川に在る眞言宗の巨刹で、彼岸會に參詣者頗る多く、參詣の子供達に物を施すので今尙有名です。

「抑々今日廣く世に行はるゝ「前賢故實」は、容齋が畢生の心血をいぼりてゑがきない、以て風教を補はんといはるもの、云々」

此の段は此の文の主體となつてゐる五百羅漢の畫幅を成した動機とも謂ふべきもので、彼が十有餘年苦心慘憺の結果書き上げた前賢故實の大著を空しく筐底に藏しなければならなかつた所以を叙してゐます。「前賢故實」は二十卷の大部で、神武天皇から後村上天皇に至る歴代の古賢者數百人の畫像をゑがいて其の一つ／＼に小傳を附したものです。畫像は勿論衣服弓箭等に至るまで、正確な考證に基いて、各時代の風俗を畫いてゐるので有名です。其の出來た由來や其の他については、前節の小傳に述べた通りです。

副主人公となつてゐる福田行誠は、淨土宗近世の名僧で、芝増上寺第十七代の管長であります。晋阿と號し、又建運社立譽と號しました。俗姓は福田氏で、武藏豊島の人です。幼少

の頃小石川傳通院で剃髮し、長じて京都に遊び嵯峨の立道に謁して教を受け、後小石川に還つて鸞洲に師事し宋學を受け、又東叡山慧澄に參じて天台教を學びました。一山の大眾が講授を乞ふのをうるさがつて、小石川處靜院に隠れ、其の後又清淨心院に通れました。しかし大眾が追從して講義を乞ふて止まないで、連日講席に立ちました。偶々兩國回向院の首席が缺けましたので、其の檀越の懇請によつて同寺の首席となりました。明治維新の後大教院に出て教務に力を盡し、同十二年傳通院を経て増上寺に進み大教正となつて、十九年三月に病に罹り深川の本誓寺に退隱しました。此の教材にある菊地容齋を助けて前賢故實を出版させたのは此の間の事です。二十三年三月に再び出て總本山智恩院の門主となり、同年の二月再び病に罹つて翌二十四年四月二十五日に入寂しました。齡八十三歳。著作頗る多く、行誠上人集として世に行はれてゐます。

「其の頃、江戸牛込に加藤金兵衛と云ふ商人あり、手の中の珠と慈みし一人の娘年頃になりしかば、或方に嫁入らせしに、幾程もなくして身まかりぬ、云々」

此の段は此の文の山です。婚禮の衣服調度を嫁入先へ返さうとした實家方も義理堅かつたし、それを押返さうとした相手方も亦律義一遍です。この律義と律義が、遂に容齋の大著前

實故實の出版となつて、後世に偉大な功績を遺したのも頗る奇縁です。實家方と嫁入先との律義、行誼上人の義氣、容齋の苦心、それらが融け合つて此の涙ぐましいばかりの物語を産み出したところに、言ふに言へない味があります。原文の筆者藤岡作太郎博士が特に此の話を引用して、亡兒の思出としたのも亦偶然でなかつたのであります。此の文を成した當時の心境を忖度して、此の一篇を読んで見ましたら、文も一段と嚴肅味を帯びて來ませう。

補充文にはやはり藤岡作太郎氏の「我が國の繪畫」を擧げておきませう。

我が國の繪畫

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區別も明瞭ならざるに至るが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。竊に絹紙と彩具との相違のみならずや。其の用意、筆法等に於てみな然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の衝となりて、遠近、明暗つとめて自然に背かざらん事を期し、此にあつては文化の精神的方面獨り先づ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏すこと無く、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、

一は輪奐なる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其の初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚味なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは、聖德太子の佛教興隆に始り、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良時代に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だこれに伴はず。平安時代に、巨勢金岡を出してより、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良時代の彫塑がなべて佛像なるがごとく、平安時代の繪畫も概して佛畫の外に出ず。按ふに平安時代のごとく形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛敎もまた形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺、法勝寺のごとき、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡し、状態は、歴史の傳ふるところ、今に存する風風堂を見ても、其の一端を窺ふべし。香煙徐に薫じて帷幃を掠め、蓮華類りに散つて轉經にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に冴え、彌伽の袖は庭前に翻りて舞客風に堪へず。恰もこれ坐らなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくのごとき場に用ふる畫像なれば、彩華炫燿、丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分

に濃く、あくまで鮮に、精を窺め微を闡きて、浮世の乾枯酒脱なるものとは全く選を殊にしたるごと、想見するに足る。

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫も精華なり。平治物語の繪卷は源平鬭争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛敎勃興の機雲に従ふ。何れも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟其の代表たり。此の革新は禪宗の提擲によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く差ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑々平安時代の佛寺を去つて禪刹の門を潜るや、彼此別天地の感なくんばあらず。結伽趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。敎外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲烟萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄て、筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益々味うて益々趣あり、恍惚として我吾を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もや、移りて雄大穠麗ちようれいの風を喜べども、未だ東山の根據を

衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴きに誇れる狩野、住吉も、先人の精粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫し、山水花鳥以外に題目を求めたるは最も注意すべしといへども、鄙俗に流れて、遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とする所は即ち相似たり。應舉等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡酒脱の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し此は彼の如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるもの無く、かゝるうちに明治の昭代は來れり。——(近世繪畫史)——

第三課 文字

舊讀本の卷二に出てるた「文字」を修正改作したもので、大體の筋は殆ど同一です。

文字は文明の要具なり。文字無ければ、廣く思想を世間に通じ、永く之を後世に傳ふること能は

ず。我等が前代の事蹟を究め、現時の世態を悟り、又更に之を後人に傳ふるは、一に文字の賜なり。文明の時代を逐うて進歩するは文字の功其の半に過ぐといふべし。

太古人は繩を結びて約束のしるしとせしことあり。今も野蠻人の中には樹枝を切りて種々の長さとし、通信・備忘の用に供するものあり。此の時未だ文字なし。思想を書記する符號にして、多数の人の承認を経るに及びて、始めてこゝに文字あり。最も早く發明せられたるは漢字・埃及文字にして、何れも物に象どりて作れり。現今世界に行はるゝ諸種の文字は皆此の二種の文字の發達變化したるものとす。

漢字には日・月・山・水・魚・鳥の如く、物に象どりて作りたるあり。木の上下に一點を附して、本末の意義を寓せるものあり。木を二つ合せて林とし、三つ合せて森とし、日を木に懸けて東とせるが如きものあり、其の構造種々なり。

青の字に三水・日・米・金・魚の扁を加ふれば、清・晴・精・鯖となり、曼の字に三水扁・立心扁・草冠・魚扁・金扁を加ふれば、漫・慢・蔓・曼・饅・饅となる。是等の文字は扁・冠を附加して各特殊の意義を示せども、元の音の失はるゝことなし。漢字の數は時代と共に増加し、今は五萬以上あり。其の字書は扁・冠・旁等によりて漢字を分類し、尙之を字畫の數によりて排列せり。

我が國早くより支那と交通し、古くは漢字のみを以て一切の事を記せしが、後假名文字を製作し

て漢字と併せ用ふるに至れり。片假名は漢字の一部分を割きて作れるもの、平假名は漢字の草體より發達せるものなり。今日我等の用ふる漢字は其の形次第に變化して、其の象どれる物體の何物なるかを辨知し難きもの多し。埃及文字は其の後甚だしき發達を見ざりしを以て、終に繪畫の域を脱せずしてやめり。現今歐米諸國に用ふる羅馬字は埃及文字より變化したるものなり。

漢字・埃及文字の如きは物の形を象どりたる文字なれば象形文字といひ、又一字一義を表すを以て意字ともいふ。我が國の假名及び羅馬字の如きは音を表す文字なるを以て、音標文字又は音字ともいふ。

原文は文語體になつてゐたので、可なり固苦しい氣持もしましたが、新教材は口語體になつてゐて内容も出来るだけ整理されてゐますから、一讀如何にも平易「フツクラ」とした好い氣持を與へます。第一段は文字の價值、第二段は文字の沿革、第三段は漢字の構造、第四段は假名文字の製作、第五段は文字の發達進化、第六段は文字の種類となつてゐます。

「我等が前代の事を知り、現時の世態を覺り、又廣く思想を社會に通じ、更に之を後人に傳へることの出来るのは、一に文字の賜物である、云々」

此の段は文字の價值に付て述べてゐます。文字は言語を目に訴へて見るべく、空間的に現

す。一定特種の符號であります。元來言語は音聲から成り、時間的進行の上に現るゝものですが、音聲は其の到達する距離極めて限りあり。殊に口を出づるに従つて刻々消失して行くのですから、之を遠人に傳へ、之を後人に残すことが出来ないばかりでなく、一旦之を知覺するも若し記憶に存するでなければ、其の儘永久に失はれるものなのです。文字は即ち言語の此の短所を補はんが爲に生じ來つたもので、實に言語は文字を得て始めて人文史上に於て其偉功を全うするものと言へませう。此の段は此の趣旨を平易に説明して居るものであります。

「文字とは、思想を書記する符號であつて、然も多數の人の間に認められ、共通に用ひられるものである、云々」

此の段は文字の沿革に付て述べたもので、先づ文字の定義を挙げ、然る後に、各國各時代に於ける文字の沿革をズツト説明してあります。

世界諸國の人種一として言語を有しないものはありません。併し尙ほ、發達の後れた人種は、文字を使用する程度に達しない者も少くありません。アイヌ、ギリアツク、オロツコ、又は臺灣の生蕃の如きはそれです。文字發達の過程は、先づ其の端を記憶に便せんとする工

夫に發して居るやうです、所謂記憶的の時代がそれです。例へば結繩文字の如き、或は北米土人の貝殻帶の如き、或はアイヌのトクツバ即ち刻印のやうなものです。是から稍々進んだものを繪畫文字の時代とします。北米土蠻、其の他未開種族の間に現に行はるゝ文書繪畫が即ちそれです、是まで行けば始めて書く方法となつて行きますが、未だ思想其のものゝ表現を目的としての言語の表記ではありません。第三に來る所の階段は、其の繪畫が漸く略繪體となつて記號化する、所謂意義文字の時代です。支那、エジプトの象形文字の起源などがそれです。茲に至つて、書かれた形象が始めて言語の符號となります。真正なる意味に於ける文字の起源は此に始めて萌芽します。さうして其の次には一度符號化した意義文字が假借せられ、諧聲的用法を變じて漸く表音時代に入ります。表音期も亦自ら三小段があります。漢字の中の諧聲文字の如く一字一語の表音なるもの、我國の假名の如く一字一音節の表音なるもの、ローマ字の如く一字一音の表音なるものゝ如きがそれです。尤も是には國字の性質に依つて生ずる相違があり、必ずしも何れの場合に於ても文字が三小段に進むものではありません。殊に漢字は一字一語でありますが、同時に其の語は毎語一音節をなすところからして、事實は一字一音節であるとも言へませう。現今世に行はれる文字はローマ字最も範圍廣

く、之に次ぐものはアラビヤ文字、支那文字等約五十餘種の文字があります。由來人類の使用せる文字は、總數二百五十餘種の多きに上つてゐます。併し其の淵源を究めますと、亞細亞の南部から南洋に蔓延せる印度系の諸文字も、蒙古へブライ、アラビヤの各アラム系の諸文字も、ローマ字露西亞文字の如き希臘系の文字と、同じくフェニキヤ起源に出づる如く、世界に傳播せる一見全く異なる諸多の文字も、多くは同源に歸し、現時の知識ではエウフラテス、チグリスの間に起つた楔形文字及び西にしてはニール河畔のエジプトの象形文字、東にしては江河の間に發達せる支那文字、是等が世界文字の三大源流となつて居ります。

楔形文字は又矢筈文字とも言ひます、其の字劃が楔の如き形を成して居るから、此の稱があります。バビロニアの僧名 Chaldaïor の語根なる "kal" は矢の義を有し、シリア語の "kalat" は「刻む」の意となり、アラビヤ語の "Kasad" も亦「刻む」の義なれば、此の名稱の生れた由來も頗る遠いものだと謂はなければなりません。楔形文字發達の有様は我が假名文字の由來と頗る相似たる所があります。而もカルデアのアッカチャ人は膠着語を用ひてゐましたが、此の時一種の繪畫文字が發明せられ、之を我國の書寫の法の如く豎行右起として列ねてゐました。又當時既に記號的用法も行はれてゐました、是は漢字初期の状態に酷似してゐます、

此の時代の字形を線畫體と言ひます。此の象形文字は西曆紀元前、十八九世紀の頃アッカジヤ人がバビロニア人及びアッシリヤ人に征服せられてから、是がセム族の所有に歸しました。處がバビロニアには粘土を産すること多く、従つて之に文字を刻記するに就いて、其の用筆が硬質のものであつたところからして、其の字體は舊體を持することが出来ません。で自らが楔形の畫を有することゝなつた上、幾分の發達をしましたがため、線畫體の如く容易に所表の物象を想起せしめることが出来なうことになつたのであります。十二頁の上欄の挿繪は即ち其の楔形文字を示したものです。

エジプト文字は太古のエジプト人が用ひた文字で、世界最古の文字だと言はれて居ります。現今英吉利のオックス・フォード博物館にあるエジプト文字はセンド王時代のもので、王は紀元前四千七百年頃に當つてゐますから、エジプト文字は確に今から約五千年前に存在してゐるものだと言はれませう。此の文字は久しく廢れて讀み得る者もありませんでしたが、紀元一千七百九十九年、ニール河附近のロゼッタでエジプトの僧用文字・族用文字及び其の對譯なる希臘文を刻せる石を發見しました。是が有名なるロゼッタ石です。此の對譯を研究するに及んで初めてエジプト文字の構成を知り、今は其の文法さへも作られるに至つてゐます。

此の文字は漢字の象形文字よりも、更に露骨なる原形文字で、殆ど物の象を其まゝ使用してゐます。併し大體、其の文字に一定の組織があつて、それで當時の性質を表現してゐたと云ふことは、現に各地から發見される當時の遺物に依つても想像することが出来るのであります。

『漢字には日、月、山、水、魚、鳥、木のやうに物の形に象つて作つたものもあり、云々』此の段は漢字の構造を説明してゐます。支那に於ける漢字の製作はいつ行はれたものか、諸説紛々として定りません。或は黃帝の時、倉頡が之を拵へたとも言ひ傳へてゐます。黃帝の時は悠遠茫昧にして、正確なる年代を知ることは出来ませんが、今を去ること大略四千年前のことでありませう。蓋し倉頡が文字を作つたとはいへ、それより以前に於ても不完全ながら文字を作つて、繩を結んで記號としたものに代へたと云ふことは色々な方面から想像されるのであります。畢竟倉頡が之を取捨選擇して、其の足りないものは之を補正して文字を定めた所からして、其の名が後世に傳つたものであらうと思はれます。文字を作成する緒は鳥獸の足跡を見て之に倣つたものだと言はれてゐます。併し各種の字體に則る所は、大凡目に觸れ耳に達する百般の事物に在つて、決して一二の鳥獸に止まるものではありません。

其の文字たるや、初めは極めて簡單で、字數も亦至つて僅少でありましたが、思想や言語が發達し、尙事物が次第に複雑に趨くに隨つて、文字の數をもいよく増加したものと思はれます。凡そ世界の文字を大別しますと、義字、音字の二種類があります。漢字は即ち義字の部類に屬します。古來漢字の構造及使用を分けて六書としてゐます。六書の名は蓋し般末、若くは周初から創つたもので、倉頡が製作の當時に於ては、必ずしも此の區別があつたものとは思はれません。併ながら、後世に至つて文字はいよく増加して、其の數に於て數萬を算へるに至りましたが、併し尙ほ依然此の六書の範圍を出づるものは一字もありません。ですから此の六書は漢字の類別法としては、動かすべからざる法則と看做されてゐます。六書とは象形、指事、會意、諧聲、轉注、假借の六つです。象形から諧聲に至るまでは結構法で、轉注と假借は使用法です。参考の資として「漢字要覽」に依つて六書の一般を紹介して置きます。

象形 象形ハ、物ノ形體ニ象ドルモノニシテ、圖畫トソノ性質ヲ同ジクス。サレバ日月、山川、草木、鳥獸、身體、器具等、凡テ目前ニ見ハルル物體ノ名ハ、象形ニヨリシモノ多シ。

例 (日) (月) (山) (水)

木(木) 魚(魚) 馬(馬) 壺(壺)

象形ハ、製字ノ基本ナレドモ、今日ノ漢字全體ノ上ヨリ見レバ、ソノ字數ハ甚ダ多カラズ。蓋シ一
タビ象形ノ字ヲ作レバ、之ヲ本トシテ他ノ指事、會意、諧聲等ノ法ニヨリテ、無數ノ文字ヲ作ルコ
トヲ得ルヲ以テナリ。

指事 指事ハ、事物ノ性質ヲ指示スルモノナリ。有形ノ物體ニシテソノ形ノ象ドルコトヲ得ルモノ
ハ、之ニヨリテ文字ヲ作レリト雖モ、ソノ形ノ象ドルベカラザルモノハ或ハ直チニソノ事物
ノ性質ヲ指示シ、或ハ象形ニヨリ點畫ヲ増減シテ、ソノ性質ヲ指示セシモノナリ。

例 一 一ナルモノニハ、ソノ形ノ方ナルモノアリ、圓ナルモノアリ、曲ナルモノアリ、直ナル
モノアリ、又ソノ形ナクシテ方圓曲直ノ言フベカラザルモノアリ。是ニ於テ横ノ一線ヲ
畫シテ、有形無形ニ拘ラズ、總ベテ一ナルモノノ性質ヲ指示セシナリ。二三モ亦之ニ同
ジ。

末 一ヲ上ニ加ヘテ本末ノ末トス。
未 象形ノ木ノ字ニヨリテ 一ヲ中ニ加ヘテ未來ノ未トス。
本 一ヲ下ニ加ヘテ根本ノ本トス。

反 又ノ古文ハヨニテ手ノ象形ナリ、一ハ物ヲ反覆スルニ象ドル、手ヲ以テ物ヲ反覆スルナ
リ。

夕 月ノ一畫ヲ減ジテ半月トナシ、ゆらべノ意ヲ示ス。

會意 會意ハ、文字ノ既ニ形ヲ成セルモノニ就キテ、二字若シクハ二字以上ヲ連ネ、ソノ意ヲ會合

シテ義ヲ取ルモノナリ、又或ハソノ畫ヲ省クコトアリ。

例 炎

火ノカサ
ナルモノ。

赫

火ノカガ
ヤクコト。

林

木ノ並ビ
立ツモノ。

轟

多クノ
車ノ聲。

磊

石ノ多
キコト。

晶

光リテキラ
スルコト。

右ハ同體ノ字二箇、若シクハ二箇以上ヲ連合セシモノナリ。

信

人ノ言ハマコト
ナルベキモノ。

位

人ノ立
ツ所。

訥

言ノ内ナ
ルモノ。

古

十人ノ口ニテ
傳ヘタルコト。

苗

田ノ中ニ
アル草。

味

口ノ未ダ出
デザルトキ。

東

木ノ中ニ日
ノアル方角。

鳴

鳥ノ口ニ
テナク。

解

牛ノ角ヲ刀
ニテトク。

盥

白ハ手ノ指ヲ兩方ヨリ向ハシメタル形ニテ、
皿ノ上ニ手ヲ出シ、水ヲ注ギテ洗フノ義ナリ。

右ハ異體ノ字二箇、若シクハ二箇以上ヲ連合セシモノナリ。

孝

老人ノ下ニ子アリテ事フルノ義ニ
シテ、老ノ字ノヒヲ省キタルナリ。

義

我ヲ美クシクスルノ義ニシテ、
美ノ字ノ大ヲ省キタルナリ。

勞

經營シテ力ヲ用キルノ義ニシテ、營ノ字ノ呂ヲ省キタルナリ。

寤

寤ネテ悟ルノ義ニシテ、寤ノ字ノ小ヲ省キタルナリ。

右ハ異體ノ字ニ箇ヲ連合シテ、ソノ畫ヲ省キタルモノナリ。

諧聲

諧聲ハ、兩字ヲ合シテ半バハ義ヲ主トシ、半バハ聲ヲ主トスルモノナリ、ソノ諧聲ト云フハ、

聲ニ諧フルノ義ニテ、聲ヲ主トスルヨリ名ヅケタルナリ。會意ト諧聲トノ異ナル所以ハ、會

意ニ兩字ノ意ヲ合シテ始メテ一義ヲナシ、諧聲ハソノ義ヲナスモノハ一半ニシテ、一半ハ聲

ヲ取ルニ過ギズ、コレソノ同ジカラザル所ナリ、サレドモ諧聲ニシテ會意ヲ兼ネタルモノモ

亦妙カラズ。諧聲ノ中、凡ソ左ノ六類アリ。

例 江河猫銅

右ノ工、可、苗、同ハ物ノ聲ニ諧ヘタルニテ、

雞鶴鳩鴿

左ノ水、夕、金ハソノ意義ヲ取リシナリ。

鷺齒璽忿

左ノ奚、雀、九、合ハ物ノ聲ニ諧ヘタルニテ、

蓮箭鼻自ハはな

上ノ我、止、爾、分ハ物ノ聲ニ諧ヘタルニテ、

圃囿匣閭

下ノ鳥、岡、玉、心ハソノ意義ヲ取リシナリ。

問聞悶輿

上ノ連、前、界、介ハ物ノ聲ニ諧ヘタルニテ、

又、恣ハ心ノ義ヲ取リ、凶ノ聲ニ諧ヘタルモノナレドモ、亦、矢ノ義アリ。諫ハ言ノ義ヲ取リ、臬

外ノ門、與、略ハ物ノ聲ニ諧ヘタルニテ、

内ノ口、耳、心、車ハソノ意義ヲ取リシナリ。

ノ聲ニ諧ヘタルモノナレドモ、ハ鳥ノ木上ニ羣リ鳴クニ象ドリタルモノナレバさはぐノ義アリ。

コレ等ハ皆諧聲ニテ會意ヲ兼ネタルモノナリ。

蓋シ諧聲ハ六書ノ主要ナルモノニシテ、文字増殖ノ法ニ於テ尤モ便利ナルモノナレバ、漢字ノ總數

中ニ於テ、十ノ八九ハコノ法ニヨリテ構造セラレタルモノナリ。

以上ノ象形、指事、會意、諧聲ノ四法ニヨリテ、文字ヲ作りシト雖モ、限リアルノ文字ヲ以テ、限

リナキノ事物ヲ記スルコト能ハズ、是ニ於テ、更ニ轉注、假借ノ二法ニヨリテ、文字ノ運用ヲ廣ム

ルコトアリ。

轉注 轉注トハ、其ノ義ヲ引伸展轉シテ、他ノ近似セル意味ニ注ギテ流用スルモノナリ。ソノ中ニ

於テソノ義ヲ轉ズルニ從ヒテ、ソノ音ヲ異ニスルモノアリ、ソノ義ヲ轉ジテ、ソノ音ヲ異ニ

セザルモノアリ。

例 樂ハ、音樂ノ樂ナリ、音樂ハ人ノ心ヲ樂シマムルモノナルガ故ニ、ソノ義ヲ轉ジテたのし

むノ意トナシ、ソノ音ヲらくトス。

惡ハ、善惡ノ惡ナリ、惡ハ人ノ惡ムモノナルガ故ニ、ソノ義ヲ轉ジテにくむノ意トナシ、ソ

ノ音ヲをトス。

度ハ、尺度ノ度ナリ、尺度ハ物ヲ測ルモノナルガ故ニ、ソノ義ヲ轉ジテはかるノ意トナシ、

第三課 文字

ソノ音ヲたくトス。

數ハ、數量ノ數ナリ、數量アルモノハ繁密ナルガ故ニ、ソノ義ヲ轉ジテしばくノ意トナシ、ソノ音ヲさくトス。

右ハソノ義ヲ轉ズルニ從ヒテ、ソノ音ヲ異ニスルモノナリ。

好ハ、女子二字ノ會意ニテ、美ナリ、善ナリ、善美ハ人ノ好ムモノナルガ故ニ、ソノ義ヲ轉ジテこのむノ意トス。

妻ハ、夫妻ノ妻ナリ、ソノ義ヲ轉ジテめあはずノ意トス。

令ハ、號令ノ令ナリ、ソノ義ヲ轉ジテ縣令ノ令トス。

長ハ、長幼ノ長ナリ、ソノ義ヲ轉ジテ官長、君長ノ長トス。

右ハソノ義ヲ轉ジテソノ音ヲ異ニセザルモノナリ。

但シ是等ノ文字ニテモ、支那ニテモ意義ノ異ナルニ從ヒ、四聲變化シテ音節ヲ異ニスルコトアレドモ、本邦ニテハソノ區別ナシ。

假借 假借ハ、文字ノ本義ニ拘ラズ、ソノ音ヲ借りテ他ノ意義ニ用キルモノナリ。ソノ中ニ於テ本字アリテ他ノ字ヲ假借スルモノアリ、本字ナクシテ他ノ字ヲ假借スルモノアリ。

例 壹 一本字

貳 二同

參 三同

肆 四同

豆ハ。俎豆ノ豆ナリ、假借シテ菽ノ義トス。

革ハ、皮革ノ革ナリ、假借シテ更ムノ義トス。

鞠ハ、まりナリ、假借シテ鞠養ノ鞠トス。

余ハ、われナリ、假借シテ餘分ノ余トス。

右ハ本字アリテ他ノ字ヲ假借スルモノナリ。

焉(焉)ハ、焉ノ象形ナリ、假借シテ助辭トス。

矣(矣)ハ、箭鏃ノ象形ナリ、假借シテ助辭トス。

耳(耳)ハ、みみノ象形ナリ、假借シテのみノ義トス。

而(而)ハ、口邊ノ鬚ノ象形ナリ、假借シテしからしてノ義トス。

右ハ本字ナクシテ他ノ字ヲ假借スルモノナリ。

蓋シ助辭ノ類ハ、形ノ象ドルベキモノナク、事ノ指スベキモノナケレバ、多クハ他ノ文字ヲ假借スルコトトナレリ、而シテソノ假借ノ義ノミ廣ク行ハレテ、本義ハ殆ド消滅セシモ

第三課 文字

第三課 文字

妙カラズ。抑々假借ハ聲音ヲ寫スニハ關クベカラザルモノニテ、外國語ノ音譯ニ於ケル比
丘、菩薩及ビ成吉思汗、鐵木眞ノ類ハ、皆コノ法ニ依ルモノナリ。

以上六種ノ構造及ビ使用ノ法ニヨリテ、數萬ノ漢字ハ成立セリ、コレ六書ノ大略ナリ。

漢字ノ數ハ、世ヲ逐ウテ次第ニ増益シ、歴代字書ノ主ナルモノニ就キテ之ヲ算スルニ、漢ノ説文ニ
ハ、九千三百五十三字アリ、梁ノ玉篇ニハ、二萬二千七百二十六字アリ、明ノ字彙ニハ、三萬三千
一百七十九字アリ、清ノ康熙字典ニハ、四萬二千七百七十四字アリ、康熙字典ニ至リテソノ數尤モ多
ク、補遺備考ニ收メタルモノヲ合スレバ、四萬八千六百四十一字アリテ、ナホ全ク遺漏ナシトイフ
ベカラズ。サレドモコノ中ニハ、同一ノ文字ニシテソノ體ノ異ナルモノアリ、音アリテ義ナキモノ
アリ、音義共ニ詳ナラザルモノアリ、書籍上ニ於テハ殆ド使用セラレタル例ナキモノモアレバ、コ
ノ數萬ノ文字ハ、盡ク世間ニ通行セシニハ非ザルナリ。云々

「我國は、支那の漢字を輸入し、之を用ひて物事を記してゐたが、後、假名文字を製作し
て、漢字とあはせ用ふるやうになつた、云々」

此の段は假名文字の製作に付て説明してあります。假名は我國で創作した綴音文字の一種
です。主として漢字の全部、若くは一部を採つて作つてゐます、學者に依つて異説はありま

すが、古來片假名の發明者は吉備眞備と云ふことに決められてゐます、併し是は臆説ださう
で、何時誰が拵へたかハッキリした所は今尙、判然してゐないさうです。蓋し眞備の時代か
ら、此の種の文字が盛に簇出して世に行はれたので、斯うした臆説が産まれたものだと思は
れます。片假名の文字の原形に付ても異説は種々ありますが、大體次のやうに信じられてゐ
ます。

阿	伊	宇	江	於
加	幾	久	氣	己
散	之	須	世	曾
多	千	鬮	天	止
奈	仁	奴	禰	乃
八	比	不	部	保
末	三	牟	女	毛
也	以	勇	江	與
良	利	流	禮	呂

第三課 文字

和 草 字 惠 乎

片假名は書體が楷書體に出來て居ますので、多く男子の間に行はれ、女用の平假名が「いろは」歌を形成してから、遙か後、漸く悉曇學者に依つて五十音圖を形成するに至りました。假名文字の如き綴音文字は、アフリカ土人ファイの發明せるものと、北亞米利加之土人チエロキーの發明したものと二つがあるばかりです、然も其の何れもがローマ字の脱化した不完全なもので取るに足りませんが、我國の假名文字は實に綴音文字としては世界中最上乘のものとして稱されてゐます。

平假名は漢字の草體から發達して一體を成したものです。平假名と云ふ名稱は何時の頃から用ひ初めたものか判然しません。古くは草假名とも言ひました。平假名と云ふのは漢字を屈し和はけた假名と云ふ意味でありませう。草假名と云ふのは漢字の草體から出た義でありませう、平安朝の物語などには、平假名をば單に「かな」とも「かなな」とも云ひ、或は亦「をみなて」(女手)とも言つてゐます。蓋し漢字を男文字と稱してゐたのに對して斯く名けたものでありませう。平假名の原字は大體次のやうに信ぜられてゐます。

い(以) ろ(呂) は(波) に(仁) ほ(保) へ(邊) と(止)

ち(知) り(利) ぬ(奴) る(留) を(遠) わ(和) か(加)
よ(與) た(太) れ(禮) そ(曾) つ(津) ね(禰) な(奈)
ら(良) む(武) う(宇) る(爲) の(乃) お(於) く(久)
や(也) ま(滿) け(計) ふ(不) こ(己) え(衣) て(天)
あ(安) さ(左) き(幾) ゆ(由) め(女) み(美) し(之)
ゑ(惠) ひ(比) も(毛) せ(世) す(壽)

「漢字はもと物の形に象つて作つたのであるが、其の後時代と共にいろいろに發達變化して、今では其の由來のわからないものが多く、字數も五萬を超えてゐる、云々」

此段は文字の發達進化に就いて述べたものであります。漢字は前に言つたやうな發達の經路を踏んで、漸次に其の數を増し、現在に於ては其の數實に五萬數千字の多きに達してゐます。併し文字は言語と相伴つて進歩發達すべき性質のものでありますから、日毎に新しい思想が産まれ、新しい言葉が出來て來るに従つて、それに伴つて漢字の數も次第に増加して行くのは當然のことなので、若しも我國が現状の儘、漢字を國字として依然使用することになりましたら、漢字の數も次第に増加して、日毎に新しい文字の創作に苦しまなければならぬ

ことになりませう。是が最近に於て漢字制限論や、漢字全廢論の起り來つた主なる理由なのであります。

ローマ字は歐米諸國の主として先進國民の使用する國民文字で、其の起源は遠くエジプトの象形文字に出で、之をローマ字と稱する所以は、主として羅馬人に依り使用されたからであります。ローマ字の出來たのは遠く西曆紀元前六世紀の頃でありますが、第十五世紀の頃に至り、伊太利人の印刷者がスピアゴ・ブエネチャがローマで此の字形と同じやうな活字を使用しましたので、此の稱が起きて來たのださうです。字體が頗る優美でどんな發音をも綴り得ると云ふので、現時世界の通用文字として廣く一般に行はれてゐます。我國に於ても曾て森有禮氏が此の字體を我が國字としようと言ふ議を起して、物議を醸したのは世人の知る所であります。

「楔形文字・漢字・エジプト文字の如きは、物の形に象つた文字であるから、象形文字といひ、又一字がそれ／＼意義を有するから、意字ともいふ。云々」

此の段は文字の種類に就いて述べてゐます。前にも述べたやうに、世界に行はれる文字の種類は多種多様であります。之を大別致しますと、音字と意字との二つに分つことが出來

るのであります。音字は音を表し、意字は意義を表すものであります。楔形文字や、漢字やエジプト文字は後者に屬し、假名文字や、ローマ字は前者に屬します。兩者の特質に就いては色々議論もあるのでありますが、思想と言語、言語と文字の關係に就いて考察しますと、音字の意字に優つて居るのは殆ど世界の定評となつてゐます。特に學習に要する能力經濟の上から考へますと、意字の多大な能力を消費するに比して、音字の運用自在で學習の容易なのは同日の論ではありません。此の段は單に音字と意字との區別を知らせ、文字の種類に就いて大體の知識を與へようと云ふに過ぎませんが、更に一步を進めて此の點まで突込んで考察させることに依つて、文字其ものに對する智識も一段と深刻味を帯びて來ませう。今日世論の中心となつて居る我が國字問題の如きは、此處等に基調を置いて初めて解決の妥當性を見出すことが出來るでありませう。

補充文には「漢字要覽」の中から次の「漢字の音訓」を擧げておきませう。

漢字の音訓

漢字の我が國に入りし時代は詳ならざれども、支那との交通は前漢の頃より開けたれば、その文

字も當時傳來せしなるべし。然れども、未だ廣く學習するには至らざりしもの如し。その後、新羅百濟等との往來頻繁となりしより、漢字も亦かの地方より傳來し、應神帝の時には、百濟の博士來りて、皇子に書を授くることとなりし程なれば、學習の道も當時漸く開け、流行も漸く廣がりしことと見えたり。されば、我が國にて、學者の始めて學習せし漢字音は百濟音なり。百濟音は、蓋し、支那南方の音の傳りて多少變化したるものなるべし。

又、我が國と支那との交通は、唐宋以後に至りて、次第に盛になりしかば、我が國人は支那南方に行はれし漢字音を讀習ひて之を傳へたり。されば、漢字傳來の初に於て、我が國人の學びたる漢字音は、百濟音と支那音との兩様なりしが、兩者とも大概相似たるものにて、均しく支那南方、即ち、所謂吳の地方の音なりしかば、等しく之を吳音と云へり。

推古帝以後、隋唐と交際を開くに及びて、遣唐使、留學生、率ね其の都長安に赴きて、その音を傳へたり。之を漢音と云ふ。長安は漢土の本部なるを以て此の名あるなり。

吳音・漢音は、字ごとに必ず異なるには非ざれども、同じからざるものも頗る多し。遣唐使・留學生の勢力を得るに従つて、漢音を獎勵すること盛になり、特に音博士といふを置きて、専ら彼の國本部の原音を學ぶことを獎勵したり。然れども、吳音は早く我が國に傳來し、久しく國人の口耳に慣れたれば、儒書は大概漢音を以て讀むこととなりたれども、佛書は多く吳音を以て讀み、その

他は漢音・吳音を雜へて讀むこととなりたり。されば、後世に至りても、普通の言葉には、吳音を用ふること極めて多し。

例 右は吳音
左は漢音

金剛	人本	強勉	名聞	木曜
金 剛	人 本	強 勉	名 聞	木 曜
物穀	家來	去過	武士	會釋
物 穀	家 來	去 過	武 士	會 釋

吳音・漢音既に行はれたる後に於て、宋より以來、彼我僧侶などの來往せしもの、更に彼の國の音を傳へたるものあり、之を唐音と云ふ。唐音といふは、我が國にては支那を唐代以後もなほ唐と稱せしを以てなり。唐音の使用はある少數の文字に止りて、一般に行はれたるには非ず。

例 行燈 甲板 胡亂 蒲團 亭鈴

近時支那との交通頻繁となるに従つて、又、支那現今の北京音を傳へたり。之を支那音と云ふ。これも支那の地名等に用ふるのみにて、多くは行はれず。

例 上海 芝罘 太沽 牛莊 哈爾濱

右の百濟音・吳音・漢音・唐音・支那音等を一括して字音と云ふ、但し、普通に字音といふは、主とし

第三課 文字

て吳音又は漢音のことなり。

漢字には音の外に訓有り。訓とは漢字に固有の國語を當て、讀みたるものなり。漢字の訓は、始めて漢字を讀み、その字義を譯せしより以來、數千人の手を借り、數百年を経て、漸次に定りしものにして、一人・一代に成りしものに非ざれば、是が創始の時を指示すること能はず。

訓には正訓あり。意訓あり。正訓とはその字の本義のまゝに國訓を附したるものにして、

日月山川草木鳥獸

の如きは一字に正訓を附したるもの、

從弟 伯父 海苔 刷毛 所以 私語 加之 牽牛花 燕子花

の如きは二字又は、二字以上に正訓を附したるものなり。近來漢字に西洋語の訓を附するものあり。

隧道 燐寸 唧筒 麵包

これ亦正訓に屬す。

意訓とは、漢字に、その字の本義にあらざる國語を、意を以て當てたるものにして、

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

の如きは、一字に意訓を附したるもの、

草臥 七夕 團扇 流石 五月蠅

の如きは二字又は、二字以上に意訓を附したるものなり。十二支の字は、もと動物の名に非ざれども、後に十二支に動物を配當せしによりて、此等の字をネ・ウシ・トラ・ウなどと呼ぶこととなりしなり。又、タナバタ(棚機)といふ國語と七夕といふ漢語とは全く同じきものに非ず、ウチハ(打羽)といふ國語と團扇といふ漢語とはもと異なれども、實物又は事からの大概相似たるより、意を以て之に當てたるものなり。

又、「飛鳥の明日香」といふいひつらねの有るより、いつしか飛鳥の字をアスカと讀みならはし、「春日の加須賀」といふいひつらねの有るより、春日の字を遂にカスガと讀むに至りたる如きも、亦意訓の類に入るべし。

第四課 鳥の聲

原文は高濱虛子の新寫生文中にある「比叡の鳥」と云ふのがそれです。

比叡の鳥

寢床を出て、齒磨楊枝を使ひながら、湖水の見える部屋に行つて見る。朝日が、部屋一面にはい

第四課 鳥の聲

第四課 鳥の聲

つて居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から、雲海を見下ろしたのと似た景色だ。部屋の下は、東谷になつて居るので、我が眼より、や、高く、や、低く、無数の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つて居る。左手には、北谷の向うに當る峰が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉のこもりも、新鮮な色をして居る。さうして、その間を、薄い霞が流れて居る。非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。

たゞ天地を、我がもの顔に啼嚇つて居るのは、小鳥の聲だ。なんといふ可愛い聲の小鳥があるものであらう。名がわからぬのが残念だ。その杉の梢で、一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で、他の一羽が答へて居る。又遙か向うの谷深く、他の一羽が應じて居る。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。また、その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲では無いが、また凛々しい處があつて、その音の、空山に響く趣が、なんともいへぬ。これも名のわからぬのが残念だ。それも一羽では無い。三羽、四羽と聞くうちに、だん／＼殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸のやうに、互に錯綜して、よく調和を保つところがおもしろい。突然けんけん、けた、ましい音が、谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも、や、急調だ。多分山鳥でもあらう

か。前の二つの小鳥で、織りなした美しい絹を、ただひと聲に引割いたかと疑はれる。

暫らくして、その聲は、谷の底の底、峰の奥の奥に浸込んでしまつて、その跡は、元の通り静かになる。眞先にその静かさを破るものは、鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて、前の小鳥が啼く。また横糸を織つて、次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹を、また山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは、麓の里の池で聞く蛙の聲に、よく似てゐて、谷の神社の鯉口が、口を開けてつぶやくのかとも疑はれる。他の鳥の聲々が、みな高調で、晴晴とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのがおもしろい。友は啄木鳥だらうといつた。二人の和尙は、山鳩だらうといつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うて居る。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だん／＼と谷が深く見えて来る。

虚子はほととぎす派の俳人で、正岡子規の始めた寫生文から出發して小説を書き出した人です。子規は俳句及び短歌の革新者として明治文壇の殊勳者であります。か章にも寫生文の一派を開き従來の文章が事實を疎かにして、唯々文字を弄ぶを主としてゐたのに對して、

文章の修飾などはどうでも宜い、見た儘を忠實に細に寫生せよと説いて、文章の方面から自然主義の機運を拓いた人であります。自然主義文學の一つの特色は、文章の上に修飾を退けたと云ふことで、田山花袋の自然主義を開くや、先づ「露骨なる描寫」を主張し、無技巧と云ふことを説きましたが、子規はそれ以前に於て既に無技巧の説を成してゐました。勿論無技巧と云つても全く技巧を無くすると云ふものではありません。從來の美しく修飾しようとする技巧に加ふるに、眞實に迫るが爲の技巧を以つてしたのであります。眞實を描け、ありの儘に、見た儘を描けと云ふことを先づ教へたのは實に子規で、子規が開いたホト、ギス派の寫生作家として、子規自身に次いで重きをなしたのは、虚子及び寒川鼠骨、坂本文泉等であります。眞實を寫す態度に於て、寫生文派は自然主義者と異りませんが、併し根本の精神に於て、自然主義者とは違つてゐました。矢張り低徊趣味で、此の低徊趣味と云ふのは、つまり一種の俳諧趣味であつたのであります。虚子には短篇集「鷄頭」の外、代表作と目すべき長篇「俳諧師」があります。是れは從來斷片的な事柄をのみ描いた寫生文を長篇小説に應用して、薄命なる一俳諧師の悲惨なる生涯を描いたもので、當時を動かしたものでした。此の「比叡の鳥」も自然主義文學の代表作として、所謂寫生文の好適例といつて然るべきも

のでありませう。教材は僅に一二箇所修正しただけで、殆ど原文其の儘です。

「寢床を出ると、琵琶湖の見える部屋に行つて見る、云々」

冒頭の一段には、時と場所とを描いてゐます。季節は春のなかば、所は比叡山の宿の一室、筆者は今起きたばかりで、朝日は部屋一杯に差込んでゐます。總てが晴れやかな山上の氣持ちで、靜寂の氣が至るところに盛り上つてゐます。

教材には琵琶湖だけが示されて、此の文で一番大切な比叡山の名が省かれてゐます。併し琵琶湖が見えると云つたあたりから考へましても、又原文に付て調べて見ましても、此の文の背景となつてゐる場所は比叡山です、ですから、此の文を玩味するには、どうしても先づ第一に、其の舞臺となつてゐる比叡山其のものを明にして置かなければなりません。比叡山は京都市の東方、山城近江の國境は峙つてゐる名山で、比叡山脈の主峯です、山嶺が二つの峯に分れて聳立してゐまして、其の最高峯たる四明嶽は海拔二千七百十六尺、東に琵琶湖を見下し、西南に京都市の紛壁を指し、淀川の清流、又囑目の中に集つてゐます。山の東側には古杉喬松鬱然として谷を埋め、山氣自ら爽快なるを覺えます。山中亦名所舊蹟に富み四明嶽の東北側には延曆寺及び之れに屬する天台の諸寺堂塔頗る多く、世に三院九院と稱し、

第四課 鳥の聲

又十六谷の稱もあります。此の文の筆者が琵琶湖を見下したと云ふのは、山の東側にある旅館の一室で東に琵琶湖を見下し、西南遙に京都の市街、眺める頗る景勝の地を占めてゐます。「湖水と思はるゝ邊は、雲ばかりで何も、えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのゝ似た景色だ、云々」

前半は山上の見晴しで、自然描寫が小氣味の好い位に冴えてゐます。「我が目よりやゝ高くやゝ低く、數知れぬ杉のこずゑがほこのやうに、云々」の邊りから「のこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖水の方に流れてゐる、云々」の邊りにかけて、煙波洋々たる雲界の中に、黒く浮き出した杉小立の有様が見るやうです。

斯うした背景の中に、高く低く囀りかはす鳥の聲を如實に描き出した筆致の巧妙さは何とも言へません。「前の小鳥の聲が縦絲なら、此の小鳥の聲は横絲だ、云々」のあたり、鳥の鳴聲の印象が鮮かに浮き出てゐます。是は聽て次に來る、「前の二つの小鳥が織成した美しい絹を、唯一聲に引割いたのかと疑はれる、云々」の伏線ともなるべきもので、鶯の聲を「絹に置かれるかすりのやうに美しい。一のかすが置かれると、又縦絲を織つて、云々」と具象化し、美化して遂には「縦絲が鳴く。横絲が鳴く」と押詰めた手法は、如何にも深山や幽

谷に住んでゐる諸鳥の錯綜した諧調としつくり合つてゐます。

「琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂うてゐる、云々」

冒頭の「寢床を出ると、云々」と相應じ、時間的經過を想像させたあたり、確に寫生文の要を得たものと云へませう。鳥の聲に聴き惚れて、うつとりしてゐた筆者は、聽て我に還つて邊りの景色に目を移したのであります。一面の雲界が次第、薄らいで、段々と眼界が開けて來る有様が、見るやうです。

「漠々」は廣々とした有様の形容です。

補充文には同じく虚子の「十五代將軍」から、次の「佛法僧」を擧げておきませう。

佛法僧

兩月物語を見た人は、高野山といへば一番に佛法僧鳥の事を思ひ浮べるであらう。此の鳥は日本

國中二三の名山のほか居らぬ鳥で、中にも高野の奥の院に啼くのが特に名高い。弘法大師の詩に

閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞二鳥

第四課 鳥の聲

第四課 鳥の聲

一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々

とあるやうに、其の啼聲がぶつ、ばふ、そう、と聞えるさうで、法の御山にふさはしい靈鳥として、特にもてはやされて居る。爰に於てか秀吉の歌といふに、

傳へにし鳥も御法を行ひの聲は高野に有明の月

とかいふのがある。公卿・僧侶の歌は固より深山ある。中にも上田秋成は此の鳥に豊臣秀次の幽霊を配して兩月物語の一章として居る。其の物語は趣味ある文字として嘗て愛誦した事があつた。

夕飯をすませて、「今夜奥の院に行つて佛法僧の啼聲を聞いて来るから提灯を借してくれ玉へ。」と給仕の小僧さんにいふと、「かしこまりました。」と小僧さんは、笑ひながら膳を運んで下りて行つたが、いくら待つても来ない。一時間も経つてから、「本當に行くのですか。」と聞きに来る。「勿論本當に行くさ。」と答へると、「途中で何か出ますよ」といふ。「何が出る、猿でも出るか。」と聞くと、「新墓から幽霊が出ますよ。」といふ。晝間通つて見た時は大名などの古い墓許りが目についたが、成程中には新墓もあらう。「新墓の幽霊位怖いものか。」と元氣なことをいうてやる。小僧さんは又薄氣味の悪い厭な笑ひやうをして降りて行つたが、暫くして二つ巴の紋のついて居る大きな提灯を持つて来る。さうして、「幽霊の外に野ぶすまも出るさうですから、氣をおつけない。若し二時も経つてお歸りが無かつたからお迎ひに行きます。」と仰山な事をいふ。

小僧さん自身で提灯をつけてくれて、「表門は締めてしまつたから裏口から御案内ませう。」と先に立つ。此の小僧さんは十六だといふに馬鹿に脊が低い。其が大きな提灯を提げてゐるので、少くとも芝居の土蜘蛛に出て来さうな恰好だ。下駄を穿いて臺所の横にまはる。廣い臺所には一つ灯がともつて居るばかりだ。暗やみの中に、二三人の小僧さんが笑ひながら我等を見送つて居る。其が提灯の光で僅かに見える。

がり／＼と音がしたのは、お城で見たことのあるやうな岩盤な裏門のくゞり戸を、小僧さんが先に立つて開けてくれた時、鐵の鎖が戸にきしる音であつた。小僧さんが突出す提灯を受取り乍ら、未央君と二人で表に出る。表は暗い。星はあるが僅かに寺の白い土塀と道との區別がつく位だ。提灯を便りに其の白い土塀に添うて表通りの奥の院道に出る。

門前の珠數屋ももう戸を下して居る。一の橋を渡ると眞暗な杉木立になる。亭々として天を摩すと云ふ様な大木が、襖の如く連なつて居る。其の左右の襖でたて切つた中に、帯のやうに幅の狭い空が見える。其の空には星が光つて居る。平生見る星よりは形が大きい。而も其の一帶の星の光では、我等の行手を照らすに足らぬ。われ等は提灯の光で僅かに足許を探つて歩く。晝間は氣が附かなかつたが、縦横に道を横ぎつて居る木の根の夥しいのに驚かれる。其の木の根は左右に延びるに従つて隆起して、終に杉の大木に集まつて居る。未央君は提灯をさし上げて、其の杉の幹に推しつける

第四課 鳥の聲

やうにして歩く。未央君が三間許り歩いてはまだ杉の半面を照らし盡くさぬ。夜の杉は大ききわからぬ巨人の如く突立つて居るのである。

寝鳥の立の音がする。見ると提灯の上から圓筒の如く丸い光が空中に射出されて、それが高い高い杉の梢を彷徨いて居る。寝鳥が泡を食ふのも尤もだ。

歩き乍ら未央君に雨月物語の話をする。墓原の中に裸火らしい火が三つともつて居る。何處やら心細くなる。斯ういふ時に野ぶすまが道をふさぐのだらうと考へる。裸火が見えなくなる。今度は杉木立のずつと奥にうすぼんやりと明るいものが見える。何であらうかと氣にしながら行くと、突然木の間に空が見えて其處に鎌のやうな三日月がかつて居る。

向うからふら／＼と提灯が一つ来る。急に見えなくなるのは杉の木に隠れるのであらう、すぐ又現はれる。近づいて見ると一人の老僧だ。すれ違ひ様によく見ると釣狐の狂言に出る白藏主に似て居る。

行手に燈籠らしい灯が三つ灯つて居る。近よつて見ると御廟の橋だ。未央君が橋の上から提灯をつり下げて水面を照らし居る。玉川の水は火を受けてちら／＼と流れて居る。燈籠堂はもうすぐ其處に在る筈だが眞暗で其らしいものは見えぬ。怪しみながら近よつて見るとすつかり四周の部を下して寂然として寝静まつてゐるやうだ。數百の燈籠のともに連なつてゐる夜の景色は、淋しくも

嚴かであらうと思つて楽しみにしてゐたのに、これでは唯眞黒な大きな建物を見る許りで物足らぬ。燈籠堂に沿つて御廟の前に出る。

御廟の前も眞暗だ。唯廟前に左右六個の小さい釣燈籠が灯つて居る。其の光で僅かに御廟の屋根と二三本の杉と線香立とが見える。此の線香立には晝間見たときは、煙が雲の如く渦巻いて居つた。其の煙の中に珠数をくすべたり鈴をくすべたりしてゐる信者が、今は一人も見當らぬ。人間が居らぬ許りで無く今は一條の煙も昇つて居らぬ。提灯を其の中に突込んで覗いて見ると、冷たくなつた灰の中に、線香の燃滓の赤い紙が、四五本残骸をとめて居るに過ぎぬ。晝間見た時も大きな線香立だと思つたが、寂然として静まりかへたところを見ると、愈々偉大な線香立である。

燈籠堂の裏側の縁に腰をかける。我等を少し離れて縁に置かれた提灯の灯が心細さうにまたゝて居る。遠方で鉦を叩くやうな音が聞える。法隆寺の境内でも聞えさうなよい音だ。方角は御廟の後に當る。そんな方に寺は無い筈だが不思議だと思ふ。其の鉦の音に聴きほれて居ると、忽ち近い木の梢でけた、ましい鳴聲が起る。何でも朽木を引裂くやうな殺氣を帯びた聲だ。襟元から手を突込んで背中ちうを掻きまはされたやうな氣持になる。鉦の音はまだ聞えて居る。鉦の音はよい音だが今の鳴聲は眞平だと思つてゐると、又前よりも一層激しいやつが起る。或は天狗のやうな嘴をした鬼のやうな手をした鳥で、忽ち空中から落下し來つて提灯をさらつて行くやうな事はあるまいか

第四課 鳥の聲

第四課 鳥の聲

と氣になる。氣のせいか提灯の灯は一層心細さうに瞬いて居る。

小さい咳拂ひが聞える。おやと思ふうち又一つ聞える。其の邊に目を配つて見ると、燈籠堂の片隅の障子に一寸した明りがある。こゝは晝間線香などを賣つてゐた處であるから、直ちに番人の部屋と想像がつく。試に其の傍に行つて、「もし〜。」と呼んで見る。「へい。」と返事をする。「一寸伺ひますがあの恐ろしい啼聲をする鳥は何といふ鳥ですか。」と聞く。「あれは鳥ぢやない歌です。」といふ。「へえ。何といふ歌です。」と聞くと、「野ぶすまというて、蝙蝠のやうな艶のやうな妙な恰好をした歌です。」といふ。あれが野ぶすまかと合點が行く。「それから遠方で鉦が鳴つて居るやうですが、あれは何處ですか。」と聞く。番人は一寸だまつてゐたが、「あれは鉦ぢやありません。鳥です。あれが名高い佛法僧といふ鳥です。」といふ。

鉦の音かと思つて居たのが、鳥の鳴聲であつたのは意外であつた。殊に其を聞かう爲に來た佛法僧であつたのは愈々意外であつた。「あれが佛法僧ですか。」といつたまゝ、暫く無言で二人とも耳を傾けた。矢張りかん〜〜と鉦の音のやうな響に聞える。唯さう思つて耳を澄ますとかんと響く前にぶつといふ低い音が聞える。ぶつと低く響いてからかんと高い冴えた聲が響く。詰りぶつかんかんと鳴いてゐるやうに聞える。多くの書物には文字通り佛法僧と鳴くとあるが、兩月物語には佛法といふ字に態々「ぶつばん」と假名が振つてあつて、ぶつばん〜と鳴くと書いてあつたや

うに記憶する。實際の鳴聲はぶつかん〜と聞えるが、先づ兩月物語のぶつばんに近い様だ。妙なもので、初めは鉦の音と信じてゐたのが、鳥の聲と聞いてからは正しく鳥の聲らしく聞えて來た。非常によい音だ。初め鉦の音と聞いた時も、嘗て法隆寺で聞いた金鈴の響を連想したが、これが生物の喉から出る聲だと知つてから、其の金鈴の響に濕ひのある事に氣がつく。番人が、「大概夜中の二時か三時頃にならんと鳴かんのに、今晚は背の口から頻りに鳴いて居た。」といふ。さういふ内も絶えずぶつかんかんと聞える。普通の鳥とは餘程違つて居る。法の御山の靈鳥として耻づかしからぬ不思議の鳥だ。古來幾多の詩歌が之を持囃したのも尤もだ。私は嘗て高野の山の靈山であることは奥の院道の杉の大木で證據立てられるといつたが、否々杉はものは、獨り此の佛法僧によつて證據立てられるといつてよい。見ると遙か彼方の縁に置かれた提灯の灯も今は靜かにともつて居る。番人は淋しい燈籠堂の夜陰に偶々話相手を得たので、問ひもせぬのにいろ〜話をする。どの話も耳新しく面白かつたが、中にも此の燈籠堂で焚く油はおびたゞしい事で、月に一石から二石の間を往來して居る。殊に三月二十一日の御影供ミケイコウの時は一日に一石の油を焚くといふ事と、貧女の一燈の灯は信者の所望によつて線香に移してやる、其を遙かに北海道や九州あたりまで持つて歸る、中には途中で消えたといふので、大阪あたりから又引返して來る人もあるといふ事などは面白かつた。ふと氣がつくと、佛法僧はいつの間にか鳴かぬやうになつてゐた。唯野ぶすまが時々荒躰をひ

第四課 鳥の聲

しぐやうな鳴聲をする。歸途につく。

御廟の橋にかゝつた時、未央君が、「また鳴く。」といふ。向ふの墓原を縫ふやうに提灯が一つ来る。女が三人に男が一人、「南無大師遍照金剛」と唱へつゝ、水向地藏の前を通る。

第五課 感情

舊讀本に出てる教材と殆んど同一と云つても宜しい、唯「暴虎憑河死して悔ゆるなきものは云々」とあつたのが、「血氣の勇に逸りて、死を顧みざるものは云々」と修正されて、幾分平易になつた位の違ひです。文理整然、起首あり、結尾あり、伏線あり、發展あり、一讀文章規範でも讀んで居るやうな氣がします。各段それ／＼手法を異にして記述の變化を保たせたあたり、可なり精練された筆致です。

文は五段に分れてゐて、第一段は感情の修練は人格修養の要件であること、第二段は憎悪怨恨の情を制すべきこと、第三段は憤怒の憤むべきこと、第四段は嫉妬の情を起さざること、第五段は憂懼に遠ざかり血氣の勇を慎むべきこととなつてゐます。

「人々の互に親愛するも、憎悪するも、尊敬するも、侮慢するも、主として感情の發動に

基づくものなれば、云々」

前半は感情修練の必要で、後半は其の心掛けです。人々が互に親愛し合ふのも、互に憎み合ふのも、互に尊敬し合ふのも、侮慢し合ふのも、皆是れ感情の發動に基づくものであるから、感情の修練は人格修養の第一要件である、仁愛慈惠の心は至善至美の感情であるからして、人は力めて此の感情を養ひ、常に他人の喜びを以て我が喜びとし、他人の憂ひを以て我が憂ひとするの精神がなければならぬと云つたやうな、感情の修練に必要な事柄を如何にも婉曲に而も理路整然と説き進めたあたり此の文の特色があります。

附説の資として柳澤淇園の「雲萍雜志」から、次の文を擧げて置きます。

ある人堪忍の二字を座右にしるしおきて、常にこれを見る時は、おのづから心に止りて日用の心がけよろしといへるものあれど、堪忍は修行せざれば身に感ぜざるゆゑに、堪へざることにもよく忍ぶことなり難し、予も堪忍を守れることをおもふに、乗合の舟ほど事になるに便よき事はなしと思へば、僕一人をつれて、京より夜舟にて浪華へあそび、また浪華よりも亦舟にて京へのぼりつゝ、ひたぶるに舟に泊れるを樂しみとして堪忍の稽古せり。人の世にあること、舟に乗合ひて泊りし折を思ひいづれば、いか程の不

自由たりとも忍ぶに堪へざることなかるべし、たとひ疊一枚の家に住むとも、乗合舟には優るべし。夜泊の切なき、膝を折りて足を縮め、人の足を枕として押合ひ、睡らんとすればゆり起され、少しまどろむとおもへば、駢に目さめて、起臥ともに心に任せざるはたとひ一夜といへども、生涯もなほひとしかるべし。

「憎悪怨恨は交情の離反する基なり。故に此の感情の抑制には、絶えず意を用ふべし。云云」

感情修練の用意を述べたもので、先づ憎悪怨恨の感情を抑制すべきことから、人が眞に我れを憎んでても、我れ之れに接するに仁愛慈愛の心を以てすべきことを述べ、恕の徳の特に大切なる所以に説き及ぼしてゐます。「子貢一言して終身行ふべきものを問ひしに、云々」は論語の「子貢問曰、有一言而可以終身行之有乎、子曰其恕乎、己所不欲、勿施於人」に出でゐます。

附説の資として三浦梅園の梅園叢書から、次の「恕の道の説」を擧げて置きませう。

恕の道の説

世話に、「身をつめりて人の痛さを知れ」とは、賤しき俚語ながらよく道にかなへり。身の痛き事をしらば、人も痛かるべしとしりて人に施さぬなり。よろづにつき、人の善悪は見えて、身の善悪は見えぬものなり。さるを、人の善を見ては是にしたがひ、悪を見ては身に懲りなば、何れか教の道にあらざらん。或は我子のわれに不孝なるを見ては、われこの道を以てわが父につかへざれ。我弟のほしいま、なるを見ては、我此道を以てわが兄につかへざれ。我身に骨の折る事は人の身にも骨折れ、我身に悲しき事は人の身にもかなし。一切みなしかなり。是を恕といふ。大學には絮矩の道といへり。宋の王且といひし人、寇準と云ひし人と同じくつかへて、王且は中書にあり、寇準は樞密院にありしが、中書より出しけるものに印を倒につきて遣しけり。寇準速かに人を遣して行讒しけり。その後樞密院より出しけるもの、亦あやまりて印を倒につきけり。時に中書の者ども右の如くにせんといひけるを、王且聞きて「さきの樞密院よりの仕方よしと思ふやあしとおもふや」といへば、「あしければこそ」といひけるを、「人の悪しきを知りてその悪しきを學ぶ事やある」とて、其事は止みにけりとぞ。陶淵明小者をおきて子を遣すとて、「是もまた人の子なり愛して使ふべし」となり。是等はみな道を見ることが明かなるが故に事に泥まず。或人、ひとの物を無體に所望しけるに、「貴殿のほしきほどわれも惜しきなり」といひしとかや。わが欲しきものは人も惜しきなり。此理をわきまへざるは理にくらければ也。崇峻天皇の御時、山猪を獻ずるものあり。時の大臣蘇我馬

子、奢恣なりしかば、天皇これをにくみ給ひ、「いつか我きらふ所の人をきる事、この山猪の如くならん」と宣ひしを、馬子に告ぐるものあり。馬子おそれて東漢直駒といふものをして天皇を弑せしむ。是より直駒、馬子が寵を得て、其第宅に出入して内外の隔なく、大臣の女可上姫に通ひけり。是はもと崇峻天皇の嬪御なりし人なり。馬子この事を聞きつけ大に怒り、直駒が髪を庭前の木の枝にかけて、弓を取りて是に向ひ、「汝わが言を用ひて天皇を弑す。汝愚にして我いかりを慮らず、我を諫めずして天皇を弑す」と、一つの罪を數ふる毎に箭一筋をはなつ。直駒いかりて敢て伏せず。「吾其時は大臣ある事を知りて、天皇の尊き事をしらざるのみ。餘事我辭謝せじ」と、さんくんに罵りけり。馬子腹をすゑかね、劍をぬき腹を潰し、其後首をきりけるとかや。其身正からず忠ならずして、人のよからん事を求むとも、人いかでか其罪に伏せん。たとへば火をたかずして湯の熱えむことをもとむるが如く、酒をすゑて酔ふなといふが如し。

「一時の憤怒を忍ぶ能はずして、一身一家を滅したるもの古今東西其の例に乏しからず、云云」

此の段は憤怒、忍ぶべきことを説いたもので、一時の憤怒を忍ぶことが出来ないで、一身一家を滅したものは古今東西に其の例が乏しくないと云ふことから、若し氣に入らぬことが

あつても、心を平靜にして徐に事を處置すべきことを教へ、顔回の例を擧げて怒を遷してはならないことを論じてゐます。「顔回怒を遷さず、云々」は論語の「哀公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回者、好學不遷怒、不貳過、不幸短命矣、今也則亡未聞好學者也」に出てゐます。附説の資として太田錦城の「梧窓漫筆」の中から、次の文を擧げて置きませう。

怒を懲すは周易なり。怒に難を思ふは論語なり。人の身を敗り家を覆すは、凶徳にして種々あり。其中に怒に出るは其殃最烈にして速なり。怒は本心火より發す。火の物を犯燎するは迅速なり。此道理にて推すに、一朝の忿にて身を亡ぼし親戚に及ぼす。其禍殃の迅速にして挽回すべからざるを怖れ思ふべきなり。兵家の説に、貪兵忿兵の二をば必敗の道とす。然れども、秦の六國を并呑する如きは、貪兵ながら一時天運の期會にや、呂政が才力の雄偉なるにや、宇内を奄有して、創めて郡縣の治を行ふ。此邦の武田勝頼が長篠の一戦の如きは、忿兵にて速に國を失ひ身を斃すに至りしなり。楚の懷王が秦に幽囚となりしも、忿兵の敗衄なり。忿怒の恐るべきことかくの如し。韓青老農が紀聞に、鷹鷂にて虎を取ることを載す。性の躁暴の戒となすに足る。忻代の神氏の兄弟あり、毎に武を講じて、奇勝を以て能を争ふ。曾て月夜に村莊に行しが、折から虎の夜來て麥場にて麥の軟葉に身を滾轉して遊嬉して杖を取るに遭ふ、一人いふ。一箭を以て射殺せん。一人云ふ、予一術あ

第五課 感情

り、膠竊にてこれを取ること飛雀の如くせんと。錢五千文を賭とす。彼一人莊中の戸口に募て、多く膠竊を得て、塗場の麥稈の上に塗り羊を繫で餌となす。其夜果して虎ありて、徐歩して來り、羊を得てこれを啖て飽を取り、麥場に就て身體を轉舒するに、數轉の後に、膠全身に粘して、耳目瞭噴し、懊惱憤怒に堪はずして、騰躍すること數丈に至り、已にして屹立して動かず。衆合噪してこれを視れば、早く立死せしなり。是れ猛獸其性の剛烈なるに由て、自ら震怒に斃る、なり。伯陽氏の柔を尙ぶも理あることなり。

「他人の成功利達を見て不快を感じるを、嫉妬と云ふ、無能なる弱者の有する感情なり。云々」

此の段は嫉妬の情を抑へなければならぬことを教へてゐます。嫉妬は無能なる弱者の有する感情で、此の情を抑壓しなければ他から排斥せられ、人と共に事を行ふことが出来ないことを、可なり深刻な語調で力説してゐます。嫉妬は女子にのみ限つた缺點のやうに考へられてゐますが、併し男子にも又此の嫉妬の爲に他の排斥を受け、人と事を共にすることが出来ない者は少くありません。此の段は嫉妬に對して強く諷めたもので、不幸にして我が心に此の感情の萌芽を認めたらば、直ちに根絶せしめるやう力を用ひなければならぬと云ふ

ことから、他人の美點長所は力めて之を推賞し、缺點短所は捨て、顧みないやうにしなければならぬことを教へてゐます。

「憂懼は危険に伴ふ感情なり。天變・地異・疾病・災厄は何時我が身邊に襲來せんも測り知るべからず。云々」

此の段には憂懼に遠かり血氣の勇を慎むべきことを教へてあります。憂懼は危険に伴ふ感情で、血氣に逸るは匹夫の常です。臆病と血氣の勇を諷めたあたり、所謂過ぎたるは及ばざるが如して、兩者の對照が一段の深刻味を添えてゐます。文理整然、冒頭の感情修練の必要から筆を起して、二段二段四段と段々説明の歩を進めたあたり、文章法から云つて頭括的説明文の好適例です。

第六課 ペスタロツチ

舊讀本の卷四に出てゐた教材を引下したもので、難澁な語句を其處此處書直して、旨く程度の調節を圖つてゐます。文は記傳體に出來てゐて、彼の生涯をざつと一通り略叙した形です。冒頭の「山水の美を以て鳴るスイスのチューリヒ市街頭に粗服をまとへる一人物の、貧

しけたる兒童を伴ひて立てる銅像あり、云々」は結尾の「チユーリヒ市街頭、行人旅客をして其の像下に低徊俯仰せしむるもの、眞に故なきにあらず、云々」と相呼應して丁度繪巻物を巻返へしたやうに、しつくりと一篇を引きしめたあたりは何とも言へません。各段毎に適宜附説を加へ、愛の權化たる彼が犠牲的の生涯を想像せしめなければなりません。

文は七段に分れてゐて、第一段は冒頭、第二段は生立ち、第三段はノイホフの貧兒教育。第四段はスタンツに於ける孤兒の教化、第五段は晩年、第六段は逸話の數々、第七段は結尾となつてゐます。

「山水の美を以て鳴るスイスのチユーリヒ市街頭、粗服をまとへる一人物あり、云々」

冒頭先づ彼が銅像に筆を起したあたり、全篇に一段の生彩を添えてゐます。斯うして教育者の典型として、可憐な孤兒貧兒の父として、將又愛の權化として、其の赫々たる不朽の功業と其の感化とを後代まで残して、今猶推賞嘆美の的となつてゐる我が教育界の偉人ベスタロッツチの、涙ぐましいばかりの生涯を紹介しようと思ふのです。

彼は極めて眞剣な全我的な至誠至情の人でした、穩健圓滿な人ではありませんでしたが、純眞な人らしい人でした、彼の生涯は唯々眞摯な態度と嚴肅な良心とに依つてのみ維持され

たのであります。彼は當時の虚偽な皮相的な因襲的生活を蛇蝎の如く嫌ひ、誠實な透徹した内的精神的眞生活を熱求しました、従つて彼は根柢の不安定な形式的強制的の教育を打破して、眞實な根本的自然的の教育策を樹立すべく勸告したのであります。是れが爲め不斷彼はあらゆる限りの努力を續け、渾身の力を傾倒して絶えず事業の爲に邁進しました。冒險的な革命的な態度は恐ろしい程彼の活動の上に現れてゐました。彼の全生涯は徹頭徹尾波瀾に満ちてゐました、外觀すれば彼の八十年の生涯は悲壯慘憺たるものであります。彼の目的とした教育事業の完成、貧民救済の理想は遂に實現しませんでした、そして失脚又失脚、蹉跌又蹉跌、若し彼の苦闘した経路を仔細に檢察しましたら、何人と雖も同情の熱涙を注がずにはゐられないであります。併乍ら是れは彼の外觀です、彼が内部精神には外部的生活の爲に毫釐も損傷せられない峻烈なる力がありました。内部には齷齪した俗衆の毀譽や品隋や判斷を超越した鐵石心と、不撓不屈の精神と、烈々たる理想とが聖壇の火の如く燃えさかつてゐました。彼の幸福と安心と立命とは、彼の眞生活たる彼の精神的生活中に常住してゐたのでした。此の意味に於て彼は轆轤不遇の人ではありませんでした。失意落魄の人ではありませんでした。彼は眞勇の人でありました。永遠に生きる偉大な人でした。此の教材は單に其の

一端を略説したに過ぎませんが、併し尙ほ彼が熱烈燃えるが如き至誠と、愛の權化としての神格を備えてゐたことは、僅々教員の此の教材の中にも尤ち溢れてゐることを感得しないではゐられないであらう。

『ベスタロツチは西暦一千七百四十六年を以て、チューリッヒ市に生まれ、六歳父を失ひ、母の手一つに育てらる、云々』

此の段は其の生立ちで、幼時父を失ひ、轉刺不遇の中に人となつて、而も品性純良にして人を愛するの熱情に富んでゐたことを略説してゐます。

ヨハン・ハインリッヒ・ベスタロツチは世に所謂啓蒙時代と稱する十八世紀の中葉、即ち紀元一千七百四十六年の一月十二日を以て、スイスのチューリッヒ市に呱呱の聲を擧げました。彼の社會民約論やエミールを以て歐洲の天地を震撼した同國人ジャン・ジャツクルソーに後るゝこと三十四年、獨逸の世界的大詩人たるウオルフファング・ゲーテに先立つこと僅に三年でありました。ベスタロツチの家は元伊太利人でした、其の一祖先が新教に歸依した咎に依つて、紀元一千五百六十七年に政府から追放せられました。それが爲に可憐な一族はアルプの嶮を越えてスイスに遁がれ、チューリッヒ市に其の居を定めたのであります。彼が

父はヨハン・バプテストと稱し、外科醫で、科醫を兼ねてゐました。性質が純良で諸事親切であつた所から、市民の信用も厚く生活も随つて豊かでした。其の母はスザン・ホツツと云ひ、チューリッヒ湖畔、油繪のやうな美しい、山水媚美の片田舎、リヒテルスワイルに生まれました、彼の有名な、ドクトル・ホツツの妹です、又一千七百九十九年シエーニツスに於て戦死して勇名を天下に轟かしたホツツ將軍は實に彼女の伯父でした、こゝら附説の資として拙著「ベスタロツチ」の中から左の數節を引用して置きませう。

貧民の友として

瑞西のチューリッヒ市に近いヘングいふ淋しい村の小路を、灼くやうな眞夏の陽に照りつけられて、老人と十歳許りの男の子が歩いて居りました。

ながい旱天の後で、道からは二人が足を動かす度に、白い埃が煙のやうに舞ひ上りました。

「ハインツヒヤ、お前少し草臥れはしないかい？」

老人が子供にたづねました。

「いゝえお祖父さん、僕ちつとも草臥れなんかしませんよ。だつて、今先き見て來たあの貧乏な人

達のことを思へば、少し位歩いて草臥れたなんて言つては神様の罰があたりますよ」

「お、よく言つて呉れた。さうだとも、この世の中には貧乏な人や不幸な人が澤山に居るんだから、その人達を救つてあげるのが人の務めだからな」

老人は満足さうに、子供の頭を撫でてゐます。

「お祖父さん、明日は何處へゆくんですか？」

暫くして子供がたづねました。

「明日はな、學校へ行つていつもの通りお説教をしようと思ふんだが、お前一緒に來ないかい？」

「何處へでも、お祖父さんと一緒に行きますよ」

子供は老人を見あげながら答へました。

この子供、それが後の大教育家ヨハン・ハイリツヒ・ペスタロッチでした。老人は彼の祖父アンドリユー・ペスタロッチでありました。

幼いペスタロッチは、夏になつて學校が休みになると、毎年チューリツヒ市から祖父の家に來るのが例になつてゐました。

祖父はヘング村の牧師でした。熱心に教區の人々を導くばかりでなく、毎日のやうに學校や貧家や病家等を見舞つて、力のかぎり慈善と救恤とに盡して居りました。

幼いペスタロッチはこの祖父の美しい心と、献身的な行爲とを見て、どれ程に感激したか知れませんでした。彼は、日々祖父に伴はれて教區の中を廻つては、薄命な人々のために同情の涙をこぼしました。

幼いペスタロッチはその時もう父親をもちませんでした。彼は五歳の時に父を失つてゐたので

繪のやうに美しい湖畔の町、チユリツヒ市の豊かな醫師の子として生れたペスタロッチも、父を失つてからは、母の手によつて貧しい日々を送らねばならぬのでした。しかし、慈愛に満ちた母に育てられた彼は、決して不幸な子供ではありませんでした。貧しくとも、家の中は何時も春の日のやうな暖い空氣に満たされて居りました。

しかし、彼は自分が幸福な身の上であることに氣づいては居りませんでした。が、祖父の家に來て初めて、彼は世の中といふものを知りました。

祖父に伴れて教區の中の貧しい人々や薄命な人々達を見て、世の中にはこんなに不幸な人達も居るのかと、彼は驚くと共に心の底に深い感動を受けました。

殊に、祖父が貧民に對する慈善の心は、彼をして終に一生を薄命に泣く貧民の救済に盡さうと固く決心させたのであります。

彼は貧民救済を一生の仕事としようと決心をすと共に、その志を達するには祖父と同じやうに牧師になるのが最も適當であると考へました。

十五歳で小學校を卒へると、西曆千七百六十年、彼はチューリツヒ大學の神學部へ入學しました。チューリツヒ市にはその頃、歐洲の大學者達が澤山に住んで居りました。従つて、大學にも有名な學者が多く、ペスタロツチはそれ等の學者達を師として懸命に勉學を続け、忽ち優秀な學生として全校にその名を轟かしました。

が、彼は或〇時に當時世間で持て囃されてゐたランスの學者ルツソアの「エミール」及び「社會民約論」といふ書物を讀むと、深く感動して遂に牧師となる志を捨てて政治家とならうと決心したのであります。

彼は政治家となつて貧民達を救はうと思つたからであります。

政治家となる決心をすると、彼は今まで修めてゐた神學を捨て、法律の研究に耽りました。

當時、彼の心を最も感動させたのは農夫達の生活でありました。

農夫達はチューリツヒ市の官吏から重税を課せられ、商業上の利益は奪はれ、その上民権までも得られないといふ有様でした。

この有様を見たペスタロツチは當局者の暴政を憤激すると共に、憐れな農夫達のために同情の涙

を流しました。

そして遂に、彼は友人達と相談して一つの團體を作り、新聞を發行したり演説したりして、チューリツヒ市の政治の改新を計りました。

開學事業に従ふ

瑞西の片田舎——バーフィールド平原の、草茫々と繁つた荒野の中に立つて、懸命に獄を動かしては土地を開いてゐる年若い一人の農夫がありました。

それは、姿こそ違つてゐますが先年までチューリツヒ大學に學んでゐたペスタロツチでありました。

朝は早くから、日が落ちるまで、汗を流して荒野を開墾しては、農場の傍の粗末な吾が家へと歸つてゆくのでした。

チューリツヒの大學で法律を修めてゐたペスタロツチは、憐れな農夫や市民達の味方となつて激しく市の政治を責めたてた爲めに、遂に獄に投ぜられるに至りました。そのため、折角の改新運動も出来なくなり、彼は政治によつて貧民達を救ふことの不可能であることを悟りました。そこで、彼は獄を出ると憤然として學校を退き、それまでに書いてゐた法律上の書物を悉く焼き捨てて、リ

ヒテルスワイルといふ處へ行つて疲れた體を休めました。
しかし、彼が貧民の友とならうといふ志は益々固く、遂に農夫となる決心を定めたのでありまし
た。

彼が農業に志したのは、自ら農業に従事して耕作の方法を改良し、それを農夫達に教へて收穫を
増さしめやうといふ考へでありました。そればかりでなく、更に進んで、農夫達の子弟に國民とし
て十分な教育を受けることが出来るだけの資産を作らせやうといふ考へでありました。そればかり
でなく、更に進んで、農夫達の子弟に國民として十分な教育を受けることが出来るだけの資産を作
らせやうといふ考へでありました。

その後間もなく、彼は二十二歳でアンナといふ婦人と結婚し、未墾地の開拓に力を盡して居りま
した。

翌年になると、彼は農場の傍に住宅を新築すると共に自分の居處を「新園」と名づけて、熱心に
農事を勵んで居りました。

ところが、彼が全力を注いで計畫した農業も、なか／＼思ふやうに成功はしませんでした。

作物の生育は思はしくなく、秋の收穫も満足な結果を見ることは出来ませんでした。これは、最
初ベスタロッチが土地の選擇を誤つた爲め、彼は苦心に苦心を重ねて肥沃の土地となさうと工夫

を凝しました。

が、もともと石原のやうな瘦地でしたので、彼の苦心は報いられませんでした。そのため、彼に
費本金を貸してゐた銀行家の一人は、遂に彼を助けることを斷念してしまひました。

これはベスタロッチにとつては、實に大きな打撃でした。然し、彼は少しも屈すること無く、何
とかして失敗を挽回しようと様々の工夫を試みました。

けれども、何しろ資本金が少いために、どうしても思ふやうな結果を収めることが出来ません
でした。

これを見て、他の資本主も次第に彼を助けなくなり、借財は一萬五千フロリンスに達して、破
産しようとなつてしまひました。が、幸ひに資本主達の同情によつて、やつとこのことに僅かばかりの
瘦地を手元に残して、破産だけは免れました。

ベスタロッチの最初の事業はかうして失敗に終りました。

彼は少なからず失望して、

「私が、自分の家を慈善事業の大中心となさうとする希望は、全く碎かれてしまつた」
かう言つて嘆きました。

——彼は自分の失敗したのを嘆いたのではなくて、貧民救済といふ大目的の果されなことを嘆

いたのでありました。

だが、彼はこんな失敗を重ねて嘆き悲しみながらも、なほ貧民の友となることを忘れてはみせませんでした。

たとへ農業によつて貧民達を救ふことは出来なくとも、何とかして彼等のために盡したいと考へて居りました。

そして、彼は自分の農場——即ち「新園」に貧民の子弟を集めて、教育を施さうと決心したのであります。

彼が教育家としての第一歩は、斯うして踏み出されたのであります。

『こゝに於いて、一種、学校を作り、貧民の子弟を集め、農業に従事せしむると共に教育を施し、いが、云々』

此の段は主としてノイホフに於ける貧兒の教育を叙してゐます。ペスタロッチはキルヒベルグに於て専心苦學すること一年にして、チューリッヒ市に歸りました。そして知人の補助を得て、バーフィールド平原の未墾地を十五エーカーだけ求めて、獨力で農業に従事することとなりました。此の時久しい月日相思の間柄であつたアンナとの結婚式が挙げられました。

始めアンナの両親は、ペスタロッチが世態人情に暗く性質が粗暴過激であることを知つて、愛娘の一生を託することを危んで、容易に兩人の請を許さなかつたのであります。併しラベーターや、フユツスリー等 斡旋に依つて漸くアンナの切なる願が許されました。アンナは母から「お前は水とパンとで満足しなければならぬやうになるだらう」と云ふ冷めたい饑の言葉を受けながら、深くペスタロッチに信頼してピアノと僅の手道具を持ち、獨り悄然として父母の家を出で、ペスタロッチに嫁いだのであります。さうして二人の結婚式は一千七百六十九年の九月三十日を以て、ゲビスドルフの會堂で數名の友人列席の下にいと森嚴に舉行されました。時にペスタロッチは二十二歳、アンナは三十歳でした。斯うして二人は新しい新家庭の生活を初めましたが、最初二人の結婚式に、満であつたアンナの父母も漸く満足の意を表するやうになり、二人は此の上もない幸福を感じるやうになりました。さうして結婚の翌年、即ち一千七百七十年には兩人の間に早くも一子ジャコブが生まれましたので、彼等の幸福は例へやうもない程でありました。彼は一千七百七十一年には所有地に住宅を建築し其の居所をノイホフと命名しました。ノイホフと云ふのは新園の意です。こゝら附説の資料として、拙著から次の數節を擧げて置きます。

第六課 ベスタロツチ

ノイホフの孤兒院

ベスタロツチはノイホフに於て貧民の教育に従ふこと、なりました。

しかし、彼が教育に志したのは、この時突然に決心をしたものではありませんでした。彼は、農業に従事してゐた頃から、自分が心の修養を怠つてゐることに就て深い煩悶を續けてゐたのでした。

人間の生活は決して物質のみによつて支配されてはならない、心の修養、精神の修養が何よりも大切である——が、自分は精神の修養を怠つてゐた、これでは到底、完全な人間とは言ふことが出来ない、——と彼は常々かな煩悶してゐたのでありました。

殊に、その頃彼にはジャコブといふ一人の子供がりました。

彼はジャコブの愛らしい姿を見るにつけて、自分の精神修養の足りないことをしみじみと感じるのでした。

「あ、自分は父としてこの子を正しく教育する義務がある。若し此の子を立派に教育することが出来なかつたら、私はこの子を授けて下さつた神様に對して申譯がない……」

斯うしてベスタロツチは日夜、心の修養を怠りませんでした。

その頃の或日、彼は日記に斯う書きつけました。

「あ、神よ、私はこれまで無用のことにばかり心を注いで、精神の修養には心を用ひませんでした。私は神様を忘れて祈禱を捧ぐることさへしませんでした。しかし神様、あなたは私と私の一家に幸福をお與へ下さいました。お、神様、どうか私に新たな氣力と活潑な熱誠とをお與へ下さい……」

あ、吾が愛兒よ、ジャコブよ。私はお前を思ふ度に恐ろしい心に責められる。若し私がお前を誤つて教育したならば、神の前でお前は私を責めることが出来るのだ。何故といつてお前を正しく育てあげることが私の義務だからである。若し私が教育を誤つたならば、私はお前に合せる顔がない。お前は私を海の底に沈めてもよいのである。神よ！どうぞ私が私の愛兒を正しく教育してゆくことが出来ますやうに……」

ベスタロツチが純眞てきうして正直な心は、この日記の一節を見ても想像されるであります。

彼はジャコブを最初の頃は、當時有名であつたフランスのルツソーの主義によつて教育しました。しかし、その主義にもいろいろの缺點があることを發見して、遂に彼に自分獨特の新教育法を創り出しました。

彼は、この新しい教育法によつて貧民の兒童を教育したならば、必ず好い結果を得るに違ひないと考へたのであります。

第六課 ベスタロツチ

そこで、彼は自分の理想を實現するために、ノイホフの住宅を孤兒院として、貧兒達を集めて新教育を施すことになりました。それは千七百七十四年の冬のことでありました。

準備が整ふと、彼は附近の村々から貧しい家の兒童達を先づ二十人ほど集めました。

それ等の兒童達はみな、顔色は青ざめ、身には縲縷のやうな着物をつけ、頭の毛は全るで蔓のやうにのびかぶさつて居りました。中には乞食をしてゐた者さへもありました。

ベスタロツチは然し、それ等の兒童達を汚ないとも思はず、親切に労はりました。

着物を着替えさせ、温い食物を與へて、全く自分の子供のやうに可愛がりました。

彼はそれ等の兒童達に學課を授けると共に、或は農場の仕事を命じ、或ひはまた、花畑の手入れをさせたりして、學業と共に身體の健康を計つてやりました。

彼は學課を授ける時にも、農場に出た時にも常に兒童達の傍を離れずに、彼等と共に學び、彼等と共に働きました。

學業を授けるのも、決してその頃の學校のやうに、無暗に物事を教へ込むものではありませんでした。容易いことで、兒童達の日常生活に必要なことを教へました。教へ方も亦、彼自身の創り出した獨特の教育法によつて導いてゆきました。ですから、兒童達も愉快に學業を勵むことが出来たのであります。

かうして數箇月が過ぎました。

最初に青ざめて彼の許に來た兒童は健康な體となり、根性の擲れた者も子供らしく素直となり、容貌までも生々として來ました。また、それに伴つて學業も見違へるやうに進んで來ました。

ベスタロツチは喜びました。

「あ、自分の仕事も始めて成功に近づいて來た！」

彼は神に感謝しながら、猶も兒童の教育に全力を捧げて居りました。

彼の努力と成功とは、次第に世間に知れ渡つて來て、その功績を認める人がだん／＼と増して來ました。

が、此處に困つたことが起りました。

それは財政の困難でした。もともと財産のないベスタロツチのことですから、何時までも孤兒院を自分の力で經營してゆくことは出来ませんでした。

けれども、彼の事業は既に世間の人々がその功績を認めてゐるのですから、決してその儘に見棄てられはしませんでした。

人々は彼に世間の助力を求めるやうにと勧めました。殊に、エツフェメリデス新聞の主筆でイゼリンといふ人は、懸命になつて彼のために盡し、ノイホフ孤兒院の模様を詳しく新聞に書いて世間

第六課 ベスタロツチ

の同情を求めました。

處が、その新聞を見た世間の人々は、大にベスタロツチに同情して、續々と彼のために力を添へました。

彼は思ひがけない世間の同情に感激して、いよいよ勇氣を奮つて貧兒教育に力を注ぎました。が、彼が孤兒院を創めてから二年目、千七百六十六年には、非常な困難に陥らねばなりませんのでした。

ベスタロツチの唯一の相談相手で、共に助け合ひ勵まし合つてゐた夫人のアンナは病氣となり、兒童達は流行病に罹り、その上農場の作物は三度も雹の害を蒙つて殆んど收穫は無くなつて、財政上の困難はまた／＼加はつて來たのでした。

だが、ベスタロツチは決して失望はしませんでした。困難と闘つては奮闘に奮闘を續けました。そして、更に二年ほど経つと、彼は兒童の數を増していよいよ事業に精を出しました。

遂に事業を中止

が、ベスタロツチが兒童の數を増したのは益々事業の困難を加へる結果となりました。後に入つて來た兒童達の大部分は、乞食の生活に慣れたものばかりでしたから、孤兒院での規則

正しい生活を嫌つて、隙があつたら逃げ出す工夫ばかりしてゐるのでした。

それだけならばまだしも、兒童達の親の中には、彼等を煽つては逃げ出させやうとしたり、中にはベスタロツチを脅してその子を取り戻さうとしたりしました。

日曜日になると親達は大勢孤兒院に押しかけて來ました。親達はみな、ベスタロツチが貧しい人々に同情して、立派な教育を授けようとしてゐる苦心も知らずに、さまざまと無禮なことを言ひました。

「ベスタロツチさん、私の子供は既う自由に聖書位は讀うるやうになつたでせうね」

一人の親が申しました。その人の子は、まだ孤兒院に來てから、一ヶ月か二ヶ月位しか経つてゐないのでした。

「いや、まだ中々聖書を自由に讀むなんて、そんなことは出來ません」

ベスタロツチは、驚いて答へました。

「え！、まだ讀めないのですか？ では一體何のために學問をさせてゐるのですか？」

「いえ、一寸お待ち下さい。どうも貴方のやうに仰言つては困ります。學業といふものは、そんなに早く出来るものではありません。然し貴方のお子さんは、此處に來られるまでは、一字も知らなかつたではありませんか。それが僅か一ヶ月や二ヶ月で聖書が自由に讀めるやうになる筈がないで

「ありませんか」

「聖書が讀める筈がないとは何事ですか？ 讀めるやうにするのが、貴方の役目でせう？」

「讀めるやうにするのが私の仕事ですけれど、そんなに急には出來ないといふのです」

「急には出來ないと言つて、それぢや何時まで待つて居れと言ふのです。そんなに何時までもかゝるのなら、私は子供を連れて歸ります」

「まあお待ち下さい、今に立派な子供になしてあげますから、それまでお待ち下さい」

ペスタロッチは、無闇な親達の言葉を聞いても決して怒らず、よくその理由を説き聞かせました。

が、達親はそれを聞き容れようとはしませんでした。

「何を言ふのです！ 今に立派な子供にすると言つても、何時まで待つてゐれば宜いのか分らないぢやないですか？ 私の子供ですから私が連れて歸ります」

「そんなに言ふものではありません、此處では學業ばかりでなく、身體の健康のために種々と仕事も授けて、だん／＼と立派な子供になしてゆくのですから、餘り焦らないやうにして下さい」

「駄目です、こんな處に子供を預けておくことは出來ない！ 一緒に歸るから子供を連れて來て下さい！」

親達は、終ひには亂暴な言葉までも使つてペスタロッチに迫るのでした。

「兎に角、そんなことは言はないで、今暫く此處において下さい。決して悪いことは致しません」

「何度言つても同じことです。早く此處へ子供を連れて來て下さい！」

親達は何と説き聞かしても聞き容れはしませんでした。

斯んなことは何時ものことでした。

しかし、何處々々までも子供達の身の上を思ふペスタロッチは、絶対に子供達を歸すことを承知しませんでした。

すると、終ひには、親達は彼を散々に罵り、子供を煽つて逃げ出させたりするのでした。

たゞさへ孤兒院の中の規則立つた生活を嫌つてゐる子供達は、親から煽てられると、一人二人と夜の間にくつそりと逃げ出してゆく者が増えてゆきました。しかも、彼等は大抵、ペスタロッチから拵へて貰つた晴衣や、孤兒院の中の品物などを盗んで逃げ出したのです。

が、ペスタロッチにとつては、そんな事よりも、もつと困つたことが起りました。

子供の親達がペスタロッチのことや、孤兒院のことなどを散々に悪罵して、世間にふれ歩くのです。これは、彼の事業にとつては、容易ならぬ障害となりました。

親達の悪罵は次第に世間に廣まつて、遂にはペスタロッチを助けてゐた人達の耳にまで入りました。そのため彼の事業に對する世間一般の信用と同情とは急に衰へて、彼に助力を與へる人は殆んど

ど無くなつてしまひました。

だが、それでも彼は落膽はしませんでした。アンナ夫人と相助け相勵まして、あらゆる困難と闘ひ、辛苦を嘗め盡しました。

斯うしてまた二年間が過ぎました。

千七百八十年、彼の財産は全く盡きて遂にこの事業を中止しなければならなくなりました。

この時のベスタロッチは、全く惨めなものでした。永い間の困苦艱難のために身も心も疲れ果て、その上、夫人は病氣となつて家の中の仕事さへも出来ませんでした。

着物といへば僅かに身に着けた粗末なものが一枚あるだけで、どんなに汚れても着更へることさへ出来ませんでした。そればかりか、食物さへも無く今は飢ゑ凍えなければなりません。

が、幸ひなことに、一人の婦人が彼等夫妻のために盡して呉れたので、やつとこのことに飢渴を免れることが出来ました。

あゝ、ベスタロッチの最初の教育事業は斯うして失敗に終わりました。

初めてノイホフに孤兒院を開いてから五年、彼の奮闘努力も遂にその成功を見ることは出来ませんでした。が、彼の努力は決して徒勞には終りませんでした。

彼が孤兒院を開いた最初の頃は、その附近の農家の子供達は殆んど教育もなく、また一般の住民

も怠け者ばかりで、實に墮落しきつた土地でした。

それが、ベスタロッチの孤兒院が出来てからは、次第に農夫達は勤勉となり、一般の風俗は改まり、以前とは篤べ物にならぬ程の土地となりました。これは全くベスタロッチの崇高な人格に感化されたのであります。

一方また、ベスタロッチ自身もこの事業の失敗によつて、世間の有様もよく分つたばかりでなく、多くの兒童に接して、種々と實際にあつての研究を成し遂げることが出来ました。

ベスタロッチは、事業には失敗しても、貧民達について、今までに知ることの出来なかつた處を知り得たのを喜び、再び事を起す時機の來るのを待つて居りました。

著述家時代

ノイホフの孤兒院を閉ぢたベスタロッチは、暫く事業を起すことを中止して、文筆によつて自分の理想を天下に普及しやうと考へました。

書物を作つて、それによつて貧民達の有様を世に知らせ、また自分の教育上の意見を發表しようと思へたのです。

彼はノイホフの孤兒院を閉ぢると、間もなく親友イゼリンの主宰するエツフェメリデス新聞に教

育上の意見を發表しました。

これは、彼の深遠なる教育哲學を述べたもので「隱者の夕暮」と題されました。總てで百八の箴言から成り、文章は簡潔で言葉の外に深い味を藏した大文章でした。

だが、社會の大多數の人達はこの文章の眞の價値を解するだけの眼識がなく、従つて彼の意見に注意を向けるものもありませんでした。

けれども、珠玉は土の中に隠れてゐても一度は堀り出されるやうに、發表の當時世間から認められなかつた「隱者の夕暮」も後になつては、全歐洲の人々を驚かすに至りました。

彼が後に「ノイホフの哲人」と稱せられるに至つたのも、全くこの書物のためでした。

「隱者の夕暮」を書いてから暫く經つと、彼は一篇の詩を作りました。

この詩は當時のチューリツヒの官府を諷刺したものでした。その頃チューリツヒの官府は、萬事文明風を模倣して警官の服装までも、極めて華美なものでした。古風で質素なことを悦ぶベスタロツチはこれを見て苦々しいことに思ひ、その弊風を矯めようと考へて詩作を試みたのです。

ところが、この詩は非常な賞讃を受け、彼に向つて將來何處々々までも著術家として活動して呉れるやうにと勤める人さへもありませんでした。

續いて彼は一篇の小説を書きました。それは、彼の知り合ひの農夫の生活を元にしたもので、農

夫達が墮落し貧困に陥つてゐる有様を描き出し、更に彼等の生活も必ず改善することが出来るといふことを述べたものでした。

彼はこの時、貧苦の極底に落ちてゐたので、一枚の紙さへも買ふことが出来ませんでした。彼は已むを得ず出納帳の餘白を原稿紙として、この小説を書き上げました。

これが有名な「リエンハルドとゲルトロド」の第一巻であります。

この小説は間もなく獨逸のベルリンの或る書店から出版されました。處が、幸ひにも瑞西、獨逸の兩國で非常な好評を博して、新聞紙は筆を揃へて激賞しました。

殊にベルリン農會からは賞金と賞牒とを彼に贈り、やがてフランス語にも翻譯され、彼の名聲は各國に響き渡りました。

だが、ベスタロツチはそれを喜びませんでした。それは、この書物が賞讃されたのは、興味ある小説としてであつて、彼は眞實に述べよやうとした意見は殆んど何人にも解つてはゐなかつたからでした。

私の著作が世間から歓迎されるのは嬉しいことには違ひない。然し、私は小説家ではない、小説として歓迎されたとして私は嬉しいとは思はない。私は教育者として、教育上の意見を小説の形にして書いたのだ。私の意見を賞讃して呉れるのでなかつたら私にとつては喜ぶべきことではない。

彼は斯う考へて、更に第二巻、第三巻と發刊し、最後に第四巻まで出しました。だが、これ等は小説風な興味が少なかつた爲めに、僅かばかりの人にしか賞讃はされませんでした。

その後の彼は、或は新聞を發行したり、著述に耽つたりして十八年をノイホフで過しました。

「クリストファとエリザ」家庭に於ける兒童教育」その他數多の著作をしましたが、彼の生活は少しも豊かとはなりません。全く其の日その日の生計にも困るやうな貧窮な生活を續けて居りました。

しかし彼はその貧しさに打ち克つて、自分の理想と主義とのために勇ましく闘ひました。そして彼の名を後世に傳へた名著は續々と生み出されてのであります。

「當時スイスも亦フランス革命の餘波を受け、戦亂處々に起り、家を焼かれ親に離れて流離するもの多く、云々」

此の段は主としてスタンツに於ける孤兒の教化を叙してゐます。歐洲の天地を修羅の巷として、幾萬の人の鮮血を流した一千七百八十九年のフランス革命は、波瀾曲折の末、從來の

帝政を覆へして、新たに共和政體の國となしました。彼等革命黨は自國の改新のみを以て満足しない、更にスイスの内政にまでも干渉して一大革命を起させるに至りました。そして幾多の轉回曲折を経て四百餘年の歴史を有するスイス聯邦は一朝にして共和國と化し、五名の執政官が國政を統べることとなりました。

スイス聯邦中のシユウキツ・ウーリ・ウンデルワルデン三縣は昔から自由の搖籃と稱せられてゐた程で、從來自由の政治を行つて來ましたが、新しく組織された中央政府の命令に服従するのを甚だ屈辱として、飽迄も共和政府との同盟を峻拒しました。こゝに於て新政府はシヤウエンボルグ將軍の麾下に精銳なフランス軍隊まで附けて、三縣を一舉にして征服しようとして試みました。すると三縣の人民は老幼男女熱狂して立ちました、そして彼等は擧つて奮戦しましたので、流石の政府軍も苦戦しましたが寡は衆に敵しませんでした、彼等反政府軍は遂に敗北してしまつたのであります。政府軍は人民の抵抗が意外に頑強なのを憤つて、到る處に火を放ち、且つ殺戮を擅にしましたので其の慘状は目も當てられない程でありました。老衰者百十一人と孤兒百六十九人、孤兒ではないが其の家族の痛ましい没落の爲に棲むに家のないものが二百三十七人と云ふ有様を、當局者も見ると忍びないで、スタンツに孤兒院を

設立してベスタロツチをして是が監督者たらしめようとなりました。彼は喜んで其の命に服しました、そして是迄の計畫を捨て、其の理想をスタンツに於て行はうと決心し、アローロを後にして十二月五日を以て任地へ到達しました。こゝら附説の資として拙著讀本物語の中から次の數節を擧げて置きます。

變の權化

西曆千七百八十九年、フランスに大革命が起りました。

フランスの天地は修羅の巷と化し、幾萬の人は遂に命を落し、帝政は倒れて新たに共和政體の國となりました。

然るに、フランスの革命黨は自國の改革だけでは満足せず、スイスの政治にまで干渉して革命を起させました。その結果、スイス聯邦は覆つて共和國となりました。

ベスタロツチは初めこの革命に反對の意見を持つて居りましたが、新政府が國政に熱心で、殊に教育に力を注ぐのを見て、彼は共和政體となつたことを喜んで居りました。

すると、突然スイス國內に大變な騒ぎが起りました。

スイス聯邦の中シュウキツ、ウーリ、ウンテルワルデンの三縣が聯合して、新政府に反對したのです。

これを見た新政府は大に憤り、直ちにシャウエンボルグ將軍の卒ゐる軍隊に、精銳なフランス軍までも加へて、三縣に攻め寄せて來ました。

三縣の人民は一齊に武器を執つて起ちました。

「吾等は自由のために闘ふのだ！」

「三縣は昔から自由の國と稱せられてゐたのだ。吾等の自由を奪ふ新政府の軍隊を一揉みに揉潰せ！」

人民達は老人も子供も、女までも戦線に立ちました。

「自由のために捨てる命だ、進め〜！」

と、遮二無二突撃し進撃しました。流石の政府軍もそのため、幾度か苦戦に陥りましたが、衆寡適せず遂に民軍は散々に打ち破られました。

政府軍は漸くすることに民軍を撃ち退けることが出來ましたが、自分等が難戦に陥つた腹癒せに、至る處に火を放つて民家を焼き、逃げ惑ふ男女を捕へては無慘な殺戮を恣にしました。

殊に惨めなのはウンテルワルデンの首府スタンツで、家は焼かれ、市民は殺されて、その惨状は目もあてられぬほどでした。

そのため孤兒となつた者や、痛ましい境遇に陥つた子供が數百人の多數に上りました。

これには流石の新政府も、凝つとしてゐることは出来ませんでした。

政府では直ぐさまスタンツの町に孤兒院を設立して、それ等の兒童達を養ふこととしました。

そして、ベスタロツチにその孤兒院の監督者となることを命じました。

彼はこの命令を聞いて喜びました。

「吾が理想を實現する時は來た、教育に熱心な政府の助けによつて、吾が事業を成功せしめなければならぬ」

彼は喜び勇んでスタンツに行きました。それは千七百九十八年十二月のことでした。が、戦争のためにスタンツの町は焼き拂はれ、今は孤兒院に適當な一軒の家さへも残つては居りませんでした。ベスタロツチは憐れな兒童達を見るにつけても、一日も早く適當な家を見出さねばならぬと思つて町中を探し歩きました。

そして、やつと古い尼寺を探し出して其處に兒童を收容することにしましたが、この寺は久しく人が住んでゐなかつたので、壁は破れ床は腐れ、塵埃は堆高く積つて到底住ふことさへ出来ません

でした。

けれども、町には憐れな孤兒達が、寒風に吹き洒されて泣き叫んで居りました。

十二月末の寒風は埃をあげて吹き荒び、住むに家なく、身につける着物もない子供達は餌と寒さに顛へながら聲をあげて泣いてゐました。

ベスタロツチの胸は曇りました。

「お、可哀さうに……一日も早く、暖い室に休ませてやりたい。着物を與へなければならぬ……」

彼は思はずも眼には涙を浮べて、大急ぎで尼寺の修繕に取りかかりました。

しかし、憐れな子供達を修繕が済むまで待たせておくことは出来ません。

いや、彼には一日も其の儘にしてはおけなかつたのです。

彼はすぐに七十人ほどの家を持たない孤兒を尼寺に收容しました。

しかし、狭い尼寺のことで到底七十人が宿泊することは出来なかつたので、その中の二十人は他の場所へ夜だけ泊らせなくてはなりませんでした。

收容された七十人の兒童、彼等の状態は全く惨めなものでした。

身には縋縋々々の着物を纏ひ、蚤や虱は氣味悪いほどに湧いて居りました。そして、顔や身にはみんな腫物が出来てゐて、見るのも氣持が悪いほどでした。

身體が汚いだけではありませんでした。心までも汚く穢れて居りました。乞食をしたり、盗みをしたりして、正しい心を有つた者は一人も居りませんでした。

だが、ペスタロッチは彼等が汚なければ汚ない程、その身の上に同情をしました。また、心が曲つて居れば居るほど、彼等を正しく導かねばならぬと考へました。

全く、彼は愛の女神のやうに美しく優しい心を有つて居りました。

收容した児童達には、すぐに垢づかぬ着物を與へ、病氣の者には親切に手當をしてやりました。しかし、何しろ戦争の後ではあり、殊にまた急いで児童を收容したので、孤兒院の中には教育を施す設備といつては殆んど何もありませんでした。

それだけではなく、ペスタロッチの外には誰一人として手助けする人もありませんでした。

彼は自分一人で児童の監督もすれば、會計係の役もせねばならず、小使の仕事も、掃除の下女の役までも勤めなければなりませんでした。

彼の苦心と困難は一通りではありませんでした。しかし、その苦心と困難に打ち克たせるものがありました。それは、彼の愛の心でした。

愛の心、彼の全身は憐れな児童達を思ふ心に燃えてゐたのです。

「神よ、憐れな児童達に恵みを垂れさせ給へ！」

彼はかう祈らぬ日とはありませんでした。

ペスタロッチは熱誠をこめて児童達を導きました。

しかし、もともと我儘勝手に育つて来た児童のことで、容易には彼の教へに従ひませんでした。けれども、ペスタロッチは決して其のために失望をするやうな人ではありませんでした。

熱烈な愛の心は、ひたすらに彼等の上に注がれました。

晝は彼等に學業を授け、また身體を鍛練させ、食事から着物の世話までも心を盡しました。夜は夜で、彼等が寢床に入つてからまでも、さまざまと有益な教訓談を聞かせました。

また、外に宿泊する児童達に對しては、彼は必ず送り迎へを怠りませんでした。

毎夜、就寢の時間が來ると、

「さあ、既う寢む時間が來た、お歸りなさい。」

彼は、児童達を宿泊所まで送つて行つて、彼等が安らかな眠りに落ちるのを見て孤兒院へ歸つて來ました。

朝になると、彼は誰よりも早く起きて着物や食事の世話をして、宿泊所の児童達を迎へにゆきました。

彼は、朝から晩まで暫くも児童達の傍を離れたことはありませんでした。

第六課 ベスタロツチ

そのため、ベスタロツチは夜眠る暇さへもないほどでありました。然し、彼は自分の身體がどうならうとも、そんなことは少しも氣にはしませんでした。たゞ兒童達を正しく教育することに、自分の身を犠牲にして盡して居りました。

かうした彼の熱誠と愛の心は、次第に兒童達の心を動かして、遂には彼等も正しい、美しい心に變り、ベスタロツチを「お父さん、お父さん」と呼んで、眞實の父親のやうに慕ふやうになりました。

彼は自分を慕ふ兒童達を見て、どれほどか喜んだことせう。喜びの心は更に熱誠を生んで、彼は益々兒童達のために盡しました。

愛の勝利

野は廣々と續いて、樹々の葉は緑に燃え、花は彼方此方に咲き亂れて居りました。

戦亂の慘禍を受けたスタンツにも、美しい春はめぐつて來たのでした。

美しい春の野——其處に數十人の兒童に取り巻かれて、熱心に話しつゞけてゐる一人の慈父がありました。

それは言はずと知れたベスタロツチでした。彼の頭髮は蓬のやうに亂れて額に蔽ひかかり、汚れ

た髯は長くむしやくしやと生えて、醜い顔容をしてゐました。

それに着物は百姓の野良着のやうに粗末で、ズボンは不恰好に歪み、足にはだぶ／＼の破れ靴をはき、まるで乞食か何かのやうに見えました。

けれど、その醜い顔、粗末な服装の中にも何處とない優しさが溢えられ、その眼は平和と愛に満ちて輝いて居りました。

「さあ、向ふに見える林を御覽」ベスタロツチは遠い林を指して云ひました。

「ながい冬の間、枯れたやうになつてゐたあの林も、春の恵みを受けてあんなに美しい葉を出して喜んでゐます。さあ、みんな一緒に楽しく遊びませう」

彼は自分も子供のやうになつて、一緒に遊びました。無邪氣に遊び戯れる彼の眼は慈愛に燃え、愛情に輝いて居りました。

「お座り、この草の上にお座り……今から、お話をして聞かせませう」

彼は兒童等と一緒に青い草の上に腰を下して話しはじめました。

「ある處に一人の馭者がありました。馭者は生れつき優しい男で、何時も馬を可愛がつて居りました。

ところがある時のこと、急な用事で重い荷物を車に積んでゆかねばなりません。馭者は困

りました。重い荷物を運ばせるだけでさへ可哀さうなのに、その上、急いでゆかねばならなかつたのです。

けれども、用事は非常に急だつたので、仕方なく馬に鞭をあてて駆けさせました。

馭者は車の上から、

『あ、心にもなく馬を不親切に取扱はねばならぬ。ほんとに悲しいことだ。許してくれ。』

と心の底から呟きました。

實際、馭者は心では涙を流して馬に鞭を當ててみたのでした。

ところが、その後も急ぎの用事で馬に鞭をあてて駆けさせねばならぬことが、幾度も幾度もありました。

馭者はその度毎に、前の言葉を繰り返しかへしました。

『あ、心にもなく馬を不親切に取扱はねばならぬ。ほんとに悲しいことだ。許してくれ』

が、幾度も幾度もそれを繰り返しかへして居るうちに、終ひには習慣になつて『お早う』とか『今晚は』とかいふのと同じに、何でもなしに言ふやうになりました。別に馬を可哀さうとも思はないのに、口先ばかりで言ふやうになつたのでした。

そのうちに、この言葉は國中の馭者仲間の諺のやうになつてしまつて、牛や馬を虐待する者まで

が、無闇矢鱈に遁口上とするやうになりました。

『あ、心にもなく馬を不親切に取扱はねばならぬ。ほんとに悲しいことだ。許してくれ。』

かう言つては、罪もない牛や馬を酷く扱ふやうになりました。

ペスタロッツチは話が済むと自分の周囲の兒童達を見まはしました。

彼は然し、兒童達に道徳を無理に教へ込まうとして、お話の後で彼等を訓戒するやうなことはありませんでした。が、彼の慈愛に充ち溢れた心は、ひとりでに兒童達の心に響いて彼等は何時からとなく、自分でも知らぬ間に美しい、正しい心を有つやうになつてゆきました。

或る時のことでした。

スタンツのすぐ隣の町に、大火事が起つて、澤山の家が焼けました。

ペスタロッツチはその時、兒童達を集めて申しました。

『町は焼けてしまひました。衣服も食物もなくて泣き叫んでゐる憐れな子供達は多分百人以上もゐるでせう。ほんとうに可哀さうなことです。どうです、皆さんは政府に願つてその中の二十人程を此處へ呼び寄せて、一緒に仲よく暮す心はありませんか』

ペスタロッツチがかう尋ねると、以前には慈愛の心などは少しも有たなかつた兒童達も、今は彼の感化によつて、優しい心の持主となつてゐましたから、

「お父さん、是非さうして下さい！」

「すぐに可哀さうな子供達を呼んで下さい！」

と、口を揃へて答へるのでした。

彼は、児童等の答へを聞いて喜びました。可哀さうな人達を救はうとする児童等の美しい心を知つて、彼の胸は喜びに顫へてゐました。

「だが皆さん」ペスタロッチは暫くして言葉を續けました。「皆さんはよく考へて決心しなければなりません。今ここに居る皆さんだけを養つてゆくのに金も足りないのです、それにこの上二十人も増したら、いよ／＼費用は足らなくなるばかりです。政府から費用を増して呉れたら結構だが、若し増して呉れなかつた時には、皆さんは一層奮發して働き、その上彼等に衣服や食物を與へてやらねばならぬ。いや、苦しかすると三度の食事也十分には食べることが出来ぬかも知れない、そんなことになつても、皆さんは隣町の子供達を呼ばうとしますか。よく考へてごらん下さい。」

然し、児童達は口を揃へて、

「お父さん、私達はどんな困難も厭ひはいたしません。どうぞ可哀さうな子供達を呼んで下さい。」

「私達は子供達の來るのを待つてゐます。衣服や食物が無くなつても構ひません。どうぞ呼び寄せして下さい。」

かう言つて、児童達は自分等の困難は少しも氣にせず、憐れな人達を救ふことを誓ひました。

ペスタロッチは児童達が優しく、憐れみ深い心になつたのを見て、涙を浮べて喜びました。

また或る時のことでした。

何時ものやうにペスタロッチは孤兒院の庭に出て、児童達といつしよに遊び戯れて居りました。

児童達は彼の周圍に集つて來て、

「お父さん！」

「お父さん！」

と言つて、ペスタロッチの頸にかぢりついて來ました。

彼は、児童達を一人一人抱きあげて、

「斯うしてお父さんの前では無邪氣に遊びながら、私の居ない處では、悪いことをするやうな子供があつたら、皆さんはその子供をよい人と思ひますか。」

とたづねました。

「悪い子供です。」

「人がゐても居なくても、悪いことをしてはなりません。」

児童達は答へました。

「さうです、誰もその心掛けが大切です。」

ベスタロツチは満足さうに答へました。

彼はしかし、孤兒院の中でも決して児童を束縛するやうな規則などは設けませんでした。

そればかりか最初の頃には、書物や學用品さへも與へずに、自由に児童の心が成長してゆくやうにと努めました。

ですから、児童達もベスタロツチと一緒に暮すことを何よりも楽しみにして、毎日毎日、愉快な日を送つてゐました。

殊に、親や兄弟もない孤兒達は、ベスタロツチの暖い心に接して、初めてほんとうに愛情といふものを知つて、幸福な日々を送ることが出来ました。

けれども、彼は決して児童達に氣儘をさせたわけではありません。たゞ自然にしたがつて、子供の心を愛し慈んで育てていつたのです。

若い樹が、春の暖い光を受けて伸びてゆくやうな、生々とした児童の心を傷つけないやうに、愛し育てていつたのです。

だが、ベスタロツチの此の自由な教育のほんたうの精神を理解して呉れる人は餘り多くはありませんでした。

孤兒院を參觀に來た人達の眼には、彼の新教育も不規律だとしか見えませんでした、世間の人達は、昔からの規則づくめの教育を見馴れてゐましたから、驚いて申しました。

「この孤兒院には全るで規律がない。亂雑で不規律で、教育らしい教育は少しも行はれてはゐない。」斯うして、世間の人達はベスタロツチの眞精神を認めないばかりか、反對に旺んに彼を批難し始めました。

「ベスタロツチなどは全るで教育なんか出来る男ではない。スタンツの孤兒院には規律もなければ設備もない。あれでは児童達はだんく悪くなるばかりだ。」

かう言つては批難の聲を放ちました。
ベスタロツチはそれを聞いて残念に思ひました。

けれども、彼は決してそれ等の批難に對して辯解はしませんでした。彼には自信がありました。信念がありました。自分の教育法は誰が何と罵らうとも、最も正しいものであると信じてゐましたから、彼は批難の聲には耳をも傾けずに、たゞひたすらに自己の信念に向つて進みました。

だが、世間の批難だけではなく、彼には更に大なる壓迫がありました。
當時ウンテルワルデンの人民は新政府のために屈服せしめられたことを怨み、政府の仕事といへば何事によらず曲解して、隙さへあれば反對の氣勢をあげようとしてゐました。

第六課 ベスタロツチ

そこへ、ベスタロツチが新政府の命令で孤兒院を設けたのですから、人民達は少なからず彼を憎みました。それに、土地の人は大方舊教を奉じてゐたのに彼は新教を信じてゐました。だから、人民のベスタロツチに對する憎悪は募つてゆくばかりでありました。

「ベスタロツチといふあの乞食のやうな男は政府の間諜かも知れない。」

「さう言へば、あの男はどうも間諜にでもなりさうな顔容だ。屹度我々の様子を探つて居るのに違ひない。」

「さうだ、第一あの男が兒童達に親切なおかしい。兒童達を可愛がつて吾々が政府に反對するのを防がうとするのかも知れない」

「確かにそれに違ひない。さうでなかつたらとてもあんなに兒童達を可愛がることは出来る筈がないからな。」

「全くだ、あの男の様子を見ても一癖も二癖もありさうぢやないか。あんな男は早く此の土地から追ひ出したが宜い！」

人民達はベスタロツチの神のやうに美しい愛の心も知らずに様々と罵り、果ては面と向つて彼を責めたてました。

が、ベスタロツチは毅然として動きませんでした。如何に人民の反對が猛烈となつても、彼は自

分の理想に向つて着々と進んでゆきました。

あらゆる反對、不信用、憎悪の渦巻の中にあつて、ベスタロツチは憐れな子供達のために全身の力を傾け盡しました。

苦心に苦心を重ね、困難に困難を重ねて貧兒の教育に一身を捧げるベスタロツチの姿は神々しいばかりに尊く見えました。

愛の権化、愛の神——ベスタロツチの愛は終に最後の勝利を得ました。

勝利——それは、人民達が屈服したのではありません。彼の苦心の効果が現れて來たのです。

愛の勝利——ベスタロツチの愛の心は遂に身も心も健全な子供を拵へあげることが出來たのです。

或る年の春のこと、彼は八十人の孤兒を連れてルーセルンに政府の大官を訪れました。

政府の人々も、見違へるばかりに健全に育ち、のびくした愛すべき少年となつた孤兒達を見て驚きました。これも全くベスタロツチの力であるといふので、政府の人々は心をこめて彼を歡待しました。

斯うして、彼が苦心に苦心を重ねたスタンツの孤兒院は、ベスタロツチの名と共に次第に世間に響き渡つてゆきました。

美しき涙

ペスタロッチの愛、貧兒に對する熱烈な愛の心は、神の御心のやうに美しいものでした。

彼がスタンツに孤兒院を設ける少し前のこと、政府では彼の人格と力柄とを信じて、新政府の顯要の職に就けようとしたことがありました。その時、彼はただ一言、――

「私は小學教師となることを望む者であります。」

と言ひ放つて、一身の出世などは考へようときへませんでした。

この熱誠、この燃えるやうな愛の心があつたればこそ、スタンツの貧兒達を立派に教育することが出来たのであります。

處が、此の時、突然に大變なことが起りました。それは、隣國オーストリアで戦亂が起きたといふことです。

そして、オーストリアから追はれたフランス兵はスタンツに逃げ込んで來たのです。然も、フランス兵の中には多數の負傷兵や病人がありましたので、それ等の兵士達を病院に入れなくてはなりませんでした。

が、スタンツには澤山の兵士を入れる程の病院がありませんでした。そこで、致し方なく市長は

孤兒院を臨時に病院とすることにしました。

そのため、八十人ほどもゐた孤兒の中、六十人は其處を出て、思ひくの土地へ去つてゆかねばならぬことになりました。

ペスタロッチは悲しみました。今日まで永い間同じ家にゐて吾が子のやうに愛してゐた子供達と別れるのは、彼にとつては耐え難いことでした。

しかし、どうすることも出来ません。――

千七百九十九年の六月八日、それはペスタロッチにとつては忘れることの出来ぬ日でありました。その日、六十人の孤兒達は住み馴れた家を去つてゆかねばならなかつたのです。

ペスタロッチの胸は張りさけるばかりでした。

彼は其の日、去つてゆく孤兒達の前に、二組の衣服と何程か宛の金とを差し出して、

「これをお別れの印にあげよう、今日まで一緒に暮してゐて別れるのはほんとに胸を裂かれるやうに苦しい。しかし此れも仕方がない、此處を出て行つても、私の諷へたことを忘れずに、立派な人にならねばなりませんぞ」

ペスタロッチの眼には、熱い涙が止め度もなく流れ落ちました。

「お父さん、ありがとうございます」

第六課 ペスタロッチ

「お父さん、左様なら……」

児童達も親のやうに親しんでゐたペスタロッチとの不意な別れを惜んで、同じやうに眼には涙を湛えてお別れの言葉を述べるのでした。

「お、左様なら……體を大切にしますのですよ。今まで教へたことを忘れてはなりませんぞ。左様なら、左様なら……」

去つてゆく子供達にペスタロッチは呼びかけては申しました。

「お父さん、左様なら……」

「お父さんもお體をお大事に……」

児童達も、後をふり向いては、名残を惜んで去つてゆくのでした。

六十人の児童達の去つた後の孤兒院は、急に淋しくなりました。

昨日まで賑かに聞えてゐた子供達の話聲も、もう今は聞かれなくなりました。

ペスタロッチの胸は暗れることはありませんでした。来る日も来る日も、彼の心は暗く閉ざされて居りました。

そのため彼の身體はひどく弱りました。永い間の勞苦と疲れと、児童達に別れた失望とのためたうとう、彼は病の床につきました。そして、も早や残つた孤兒院を教へ導くことさへも出来なくなりました。

なりました。

で、彼は孤兒院の一切の仕事を市長のツホツケに引渡して、カーニゲルといふ處に行つて病氣の療養をすることになりました。

これを聞いた政府の大官は、彼の功績に報いるために、懸々賞金を贈つて見舞の使ひを遣しました。

ところが、ペスタロッチが去つた後のスタントツの孤兒院は、も早やこれまでのやうな成績を擧げることが出来ませんでした。

ペスタロッチの後を引き受けた市長のツホツケは何の主義も意見もない男でしたから、折角今まで苦心に苦心を重ねて教育された児童達も、却つて悪い方へ傾いてゆくといふ有様でした。

やがて、カーニゲルで病を養つてゐたペスタロッチは、幸ひに間もなく全快しましたので、彼は再びスタントツの孤兒院に行きたいと政府に願ひ出でました。

政府でも、彼の力柄と人格を知つてゐる人は是非とも再び彼を用ひたいと考へましたが、一部の人達の反對のためたうとう其の願ひは許されませんでした。

その上、政府では彼の思ひ出深いスタントツ孤兒院を閉ぢてしまひました。

ペスタロッチは悲しみました。だが、今は早やどうすることも出来ませんでした。

第六課 ペスタロッチ

かうしてスタンツでの彼の事業は終りを告げました。
ノイホフでの孤兒院は中途で挫折し、今またスタンツでの事業も政府のために續ける事が出来なくなつた事を思ふと、彼は幾度も天を仰いで嘆息しました。
が、彼は決して失望落膽して志を屈する人ではありませんでした。彼の愛の心は、次の仕事に向つて更に燃えつゞけてゐるのであります。

「ベスタロツチの、ブルグドルフに至るや、自ら請ひて其の地の貧民學校の補助教師となりしが、同僚の忌む所となり、云々」

此の段は其の晩年です。至誠の人ベスタロツチは、其の全我的努力と衷心の愛を捧つて經營したスタンツ孤兒院が閉塞されたので、非常に失望しました。併し理想の實現に邁進してゐた彼の心には、事業なしには一日も空費することを許しませんでした。そこで彼はブルグドルフ 赴いて、その公立小學校に奉職しようと試みました。是れからの數年はベスタロツチに取つては實に轉軛不遇の數年で、彼が一千八百二十七年、八十二歳を以て歿するに至るまでは、誠に涙ぐましいばかりの苦悶の生活を續けたのであります。こゝら附説の資として、拙著讀本物語から次の數節を引用して置きます。

小學教師となる

スタンツ孤兒院が閉鎖されると、ベスタロツチはブルグドルフ市に行つて、其處の公立小學校に奉職しようと考へました。

「私をどうかこの町の小學校に採用して下さい。」

彼は市の役人に頼みました。

「備つても宜いには宜いが、一體報酬はどの位欲しいのです。」

役人はベスタロツチの熱心な頼みを聞いてからたづねました。

「報酬ですか？」ベスタロツチは一寸驚いたやうに言つて「いや、私は報酬は要りません。俸給は無くして結構です」

「え？ 俸給無しで宜いといふのですか？」

役人は驚いて問ひかへしました。

「さうです、勤めさせて頂くだけで結構です。」

ベスタロツチは答へました。

が、役人の方ではすつかり驚きました。俸給無しで勤めよう等と言ふ人は今まで一人もなかつた

からです。

如何に児童を愛する心に燃えてゐる人でも、無報酬で勤めようとするなんてどうも變だ、こんな人に勤めて貰ふのは餘ほど考へ物だ——役人はかう思ひました。

「折角ですがお断りいたします。無報酬で勤めて頂く譯には参りません。」

役人は斯う言つて、彼が何と云つても聞き容れては呉れませんでした。

市の役人達はベスタロッチの心を知らなかつたのです。彼は報酬を得ようがために児童達を教育するものではありませんでした。

たとへ自分はどれほどに貧しい暮らしをしようとも、その日の生計に困るやうなことがあつても彼は児童達を教へ導かずには居られなかつたのです。いや、彼は無報酬で働いてこそ、はじめて眞實に児童達を教育することが出来ると考へてゐたのです。

だが、市の役人達は彼の美しい心も知らずに、その奉職を許しませんでした。そればかりではなく、人々は彼をさまざまと罵りはじめました。

世間の人達は、彼が以前に「リエンハルドとゲルトロード」を書いて歓迎されて以來、未だ一度も事業に成功しないのを見て、

「ベスタロッチといふ男は實際の役に立つ男ではない。」

「二三ヶ月位はよく働いても、すぐに怠けてしまふ男だ。その證據には何時も事業に失敗ばかりしてゐるではないか！」

「三十歳の頃に立派な小説を書いただけで、五十歳の今では児童達を教へることさへ出来ないだらうよ。」

などと言つては、口々に彼を冷罵しました。

しかし、彼の手腕と人格とをほんたうに認めて呉れる人が全く無いではありませんでした。

ブルグドルフの知事をはじめ二三の人々は、彼の教育上の主義と力倆とを認めて、さまざまと彼のために力を盡して呉れました。

その盡力と斡旋とによつて、彼は間もなく同市下町の或る小學校に奉職することが出来ました。ブルグドルフ市はスイスの首府ベルンの東北數哩の處にありました。町の家々はエムメ河の畔の丘の上と下とに建ち並び、丘の頂には古城があつて、數多の狭い街路が階段のやうに山腹を繞つて連つて居りました。

この丘の上の方の町を山の手と呼んで、富裕な人達が住み、丘の麓の方を下町といつて貧しい人達が住んで居りました。

ベスタロッチが奉職したのは、この下町の小學校でありました。

學校と言つても名ばかりで、校長のデーズリーといふ人は靴屋で、暇さへあれば靴を拵らへて居りました。

ベスタロツチはこの學校で心をこめて、貧しい子供達を教へ導いて居りましたが、彼は此處でもスタンツの孤兒院の時と同じやうに、決して兒童達を束縛することはありませんでした。

彼は自分獨特の教育法によつて、兒童達を導きましたが、校長をはじめ兒童の親達は其れを見て少からず驚かされ、終ひにはベスタロツチを責めて彼を追ひ出さうと計りました。

新しい主義といふものは何處へ行つても、初めのうちは人々から嫌はれるものです。ベスタロツチの新教育は、ここでもまた排斥されて、彼は一年足らずで下町の小學校を退かねばなりませんした。

しかし、彼の主義方法を信じてゐる知事は、すぐに今度は山の手の小學校に奉職させました。

此處でも、彼の新教育は人々から嫌はれましたが、兒童達の成績は日増しに進んで、翌年の試験には彼の教へを受けた兒童は抜群の成績を得ることが出来ました。

人々はこの時になつて、初めて彼の教育法の正しいことを知りました。市の役人達も、彼に心からの感謝の言葉を述べました。

彼の授業に熱心なことには、誰あつて驚かぬ者はありませんでした。

朝の八時に授業が初まつてから、十時まで懸命になつて教へ、彼の額からは汗が滲み出るまでに

疲れてゐるのに、猶ほ授業を續けて十一時まで休みなしに教室にとどまつて居りました。

その頃のこと、プロシア、オーストリアの二國とフランスとの戦が起りました。そのためスイスの東部地方では農作物が出来ず、大饑饉が襲ひました。

スイス諸州の人々は力を盡してその救済に努めました。

ベスタロツチも少なからず同情の心を寄せましたが、當時彼と一緒に住んでゐたフィツシユルと呼ぶ青年は、最もその救済に力を盡し、饑饉地の知人に手紙をやつて、憐れな兒童達の世話をしたいから、適當な監督者を附けて送つて呉れるやうにと申し送りました。

フィツシユルの依頼を受けた友人は、當時力柄ある教育家として知られてゐたクルージイにその監督を頼みました。

クルージイはフィツシユルがベスタロツチと一緒に住んで居ることを知つて、すぐにその頼みを承諾して、二十八人の兒童を率ゐてブルグドルフにやつて来ました。

ブルグドルフに連れて來られた兒童達は、フィツシユル等によつて幸福な日を送ることが出来るやうになりました。

が、残念なことにフィツシユルは間もなく世を去りましたので、ベスタロツチはそれ等の兒童を

自ら教育したいと考へ、クルージイと相談しました。
そして、政府に願つてブルグドルフの古城で私立の學校を創めました。
それはちやうど千八百年六月のことでした。

全歐洲に反響

ブルグドルフ古城に學校を設けると、ベスタロッチはクルージイと共に熱心に兒童達を導きました。

しかし、この學校には饑饉地の貧兒ばかりではなく、町の兒童達も一緒に學校に来てゐたので、性質や境遇、年齢などが非常に違つてゐて、教育上の困難は並大抵ではありませんでした。

教授訓練が困難であるばかりでなく、様々の必要から彼は今までとは違つて、自分を助けて呉れる適當な教師を招くことにしました。

處が、彼の此の話を聞いた教師達は、かね／＼ベスタロッチの人物を知つてゐましたから、力備のある教師達がすぐに集つて來ました。

それ等の教師の中にブツスといふ人がありました。

當時、この人はバゼルといふ町にゐましたが、彼がベスタロッチの學校に行かうとするのを知つ

た友人達は、

「ベスタロッチは狂人ではないか。あんな者の處に行くのは止したが宜い。」

「ベスタロッチの學校には、どうせ狂人のやうな教師ばかり居るだらうよ。狂人の仲間入りは止し給へ」

口を揃へてブツスの決心を續させようとした。

バゼルの町の人達は、ベスタロッチを狂人だと思つてゐたのでした。その理由は斯うでした。

或る時のことベスタロッチはバゼルの町で一人の貧しい男に逢ひました。慈悲深い彼は、その男を何とかして助けたいと思ひましたが、生憎一錢の金も持つてはゐませんでした。然し可哀さうな男を見て、その儘にしておくことは出来なかつたのです。

何か恵んでやる物はないかと、その男の様子を見ると、靴に紐がついて居りません。そこでベスタロッチは自分の履いてゐた靴の紐を解くと、

「これをあげませう。この紐をおつけなさい。」

かう言つて紐を男に與へて、自分は傍へ落ちてゐた藁を拾つて靴紐の代りにして結びました。

その後も彼は、藁で靴を結んだまゝ、何時も町を歩いて居りました。

で、バゼルの人達は、

「靴紐の代りに藁で結んでゐる、狂人だ、狂人だ！」

と言ふやうになつたのであります。

ブツスがベスタロッチの學校に行かうとした時にも、友人はこの話を持ち出しました。

「ベスタロッチが藁の紐の靴で歩いてゐたのは誰知らぬ者もないではないか。あんな男の處にゆくのは君のために宜くないから止し給へ！」

然し、ブツスは以前に「リエンハルドとゲルトロド」を読んで深くベスタロッチを信じてゐたので、友人達から何と言はれようとも構はず、喜んでブルグドルフに向ひました。

ブツスはまだ一度もベスタロッチに逢つたことがなかつたので、一體どんな人だらうかと考へながら彼の學校に着きますと、其處へ一人の老人が走り出て來ました。

老人の頭の髪は蓬のやうに亂れ、洋服は灰色に褪せ、靴は汚れて全るで野良着のままの田舎爺か何かのやうでした。

老人はブツスの前に走り寄つて來ると、

「あなたがブツスさんですか？」

問ひかけられてブツスは驚きました。どうして斯んな汚らしい爺さんが、自分の來ることを知つてゐるのだらうと思ひました。

「さうです、私がブツスです。」

「あ、やつぱりブツスさんでしたか。さあどうぞ此方にお入り下さい。」

老人は先きに立つて彼を導きました。

ブツスはこの爺さんは一體何をする人だらう、この學校の小使かも知れない。しかし小使にしても餘んまり身装が汚いが……と考へながら、

「あなたは誰方ですか？」

と問ひかけました。

「いや、これは失禮しました。遂に自分の名を申し上げるのを忘れました。私がベスタロッチです。」

「え？ あの、貴方がベスタロッチ先生ですか。」

ブツスは驚かすには居られませんでした。この汚らしい爺さんが、永い間敬慕してゐたベスタロッチ先生なのか、と思はず對手の顔に見入りました。

その粗末な様子に驚いたブツスも、だん／＼話してゐるうちに、ベスタロッチの心情の美しいことが分つて來て、心の底から彼を尊敬するやうになりました。

斯うしてブツスを初め、數人の立派な教師が彼の學校に集りました。

ベスタロッチは言ふまでもなく、それ等の教師達も熱誠をこめて兒童達を訓育しました。

第六課 ペスタロッチ

そのため兒童達の心は研かれ、學問も日と共に進んで、僅か半年ばかりで、ブルグドルフの學校の名はスイス全國に響き渡り、政府も出来る限りの力を添へて學校の發展を助けました。

が、此處でもペスタロッチは決して兒童達を束縛せず、自由にその心を生長させるやうにと努めました。

この學校を參觀した或る人は、

「あゝ、これは學校ではなくて家庭である。」

と言つて感嘆しました。

全く、彼の學校は家庭と何の變りもありませんでした。生徒達はペスタロッチをほんたうの父親のやうに慕ひ、彼はまた生徒達をほんたうの吾が子のやうに愛し慈しみました。

ペスタロッチの名は次第に高まつてゆきました。前には彼を罵つてゐた人達までも、今では讃めたゞえるやうになりました。

生徒の数も刻々に加はつて行つて、その翌年の秋には入學を斷はらねばならぬ程の隆盛を見ることが出来ました。

その年、ペスタロッチは「ゲルトロードは如何にその子を教ふるか」といふ著書を出版しました。

すると、世間は初めて彼の主義の優れてゐることを知つて、スイスは勿論のこと、ドイツやフラ

ンス等から、研究のために續々と彼の學校を訪ねて來ました。

今ではペスタロッチの名は全歐洲に廣まり、永い間不遇な生活を送つてゐた彼にもやうやく得意の時代が廻つて來ました。

「ペスタロッチの一生は、奮闘努力の歴史なり。而して其の逸事の傳ふべきもの亦尠からず、云々」

此の段は彼が逸話の二三を擧げたもので、之れに依つて彼が性格の一端を想像せしめようと云ふのであります。病氣を忘れてフランス公使を案内したのには、彼が如何に熱烈であつたかを想像させ、ロシア皇帝に謁して教育意見を説いたのには、彼が如何に自説を信するに固かつたかを想像させ、乞食に靴を脱いで與へたのには、如何に愛と同情の念に燃えてゐたかを想像させませう。こゝら附説の資として拙著讀本物語から次の數節を引用して置きませう。

その頃の話

或る時のことでした。

ペスタロッチはリウマチスといふ病に罹つて、身動きも出来ないほどになつてゐました。

第六課 ペスタロッチ

醫者や教師達は非常に心配して、彼の枕邊に付き添うて居りました。すると、或る日のこと、フランス公使のネー將軍が訪ねて來ました。

ベスタロツチは病床でそれを聞くと、

「公使がおいになつたのか。それでは直ぐに私がお逢ひするから應接室にお通し申して下さい。」
かう言ひながら、彼は病苦を忍んで起きあがらうとしました。

「いけません、先生それはいけません。お體に障ると大變です。」

周囲の人達は彼を押しとどめました。醫者も、體を動かさぬやうに、靜かにするやうにとしきりに注意しました。

「いや大丈夫です、折角公使が來られたのに逢はぬといふのは失禮です。」

「御病氣のためにお逢ひにならぬのですから、決して失禮ではありません。」

「いや、大丈夫です。早く、私の着物を持つて來て下さい。」

ベスタロツチは醫者や教師達が何と言つても聞き容れはしませんでした。

仕方がないので、彼の着物を持つて來ると、ベスタロツチは苦痛を忍んで起きあがり、動かぬ手足を無理にも動かして着物を着換えました。

が、寢臺を下りると歩くことが出來ません。彼は周囲の人達に扶けられて公使の待つてゐる室に

入つてゆきました。

周囲の人達は、こんな無理なことをして若し病氣が重くなつたら大變だがと案じて居りますと、

彼は、

「公使閣下でございますか、よくこそお出で下さいました。」

と、病人とは思はれぬほどに元氣よく申しました。

そればかりか、身體を支へてゐた人達の手を離して、元氣よく椅子に腰をかけ、熱心に自己の學説を辯じ初めました。

周囲の人達はその様子に驚いて、彼を凝視めたまま立ちつくして居りました。

ベスタロツチはそんなことには少しも頓着なく、今は病氣も忘れ果てたやうに身體を自由に動かし、手を振り眼を度つて、滔々と教育上の意見を述べ續けました。

今の先まで身動きすら出來なかつた病人が、自由に體を動かして健康な人と何の變りもなく話してゐるのを見て、誰よりも驚いたのは醫者でした。

これはどうも不思議だと思つてゐるうちに、やがて公使との會見を終りました。

すると、ベスタロツチは元氣よく椅子から立ちあがつて、玄關まで獨りで見送つてゆきました。公使が歸つていつた後で、醫者や周囲の人達が、

「如何ですか、御病氣は……」
とたづねますと、彼は元氣よく、

「いやもうすっかり癒りました。この通り何ともありません。」

ベスタロツチは答へながら、足どりも確かに自分の室に歸つてゆきました。

熱誠の人ベスタロツチ、彼はその熱誠によつて病氣から打ち勝つことが出来たのでした。

また或る時――

ブルグドルフの町にベスタロツチの友人でフェルレンブルグといふ人が實業學校を經營して居りました。

或る日のこと、その學校の生徒が二三人で田圃の中を歩いてみると、一人の汚らしい服裝をした男が倒れて居りました。

「おや、人が倒れて居る。どうしたのだらう。」

生徒達は倒れた男の傍に走り寄つてゆきました。男はもう息も絶え絶えになつてゐるらしく身動きさへもできませんでした。

「この男は一體どこの誰だらう。随分汚い着物を着てゐるが、屹度何處かの山の中から出て來たのかも知れない。山男か何かだらう。」

「いや山男にしてはどうも變だ。第一ハンケチの中にこんなに石を包んで持つてゐるのがおかしいぢやないか」

「おや、ポケットにも深山石が入つてゐる。」

生徒達は暫く男の傍に立つてゐましたが、やがて――

「兎に角先生の處に連れてゆかうぢやないか。この儘にしておいては死んでしまふよ。」

かう言つて生徒達は半死半生の男を抱き起して、フェルレンブルグの家へ連れてゆきました。

「先生、こんな變な男が田圃の中に倒れてゐました。」

聲を聞いてフェルレンブルグが出て來て見ると驚きました。

「お、ベスタロツチ君ぢやないか？」

その聲に男は眼を見開きました。

「お、君はフェルレンブルグ君、どうして此處に連れて來て呉れました。僕は田圃の中で倒れてしまつてゐたのに……」

「生徒達が連れて來て呉れたのです。」

フェルレンブルグは斯う言つて、彼を室に導き入れて手厚く介抱しました。

田圃の中に倒れてゐたのはベスタロツチでした。彼はその日、礦物採集に出掛け、ハンケチやボ

第六課 ベスタロツチ

ケツトに鑛物をいっぱいに入れて歸途につきましたが、知らぬ間に路を迷つて、疲労のため田圃の中に倒れてゐたのでした。

或る時

ベスタロツチはいつものやうに鑛物採集に出掛けて、ハンケチに深山の石を包んで、夕方近くなつてブルクドルフの町へ歸つて來ました。

一日の疲れで、すっかり足を痛めて跋を引きながら町中を歩いて居りますと、急に後から呼び止める者がありました。

「おい、一寸待て！」

ベスタロツチがふり向くと一人の巡査が立つて居ります。

「何か御用ですか？」

彼が巡査に近寄つてゆくと、

「どうも怪しい奴だ。一緒に裁判所まで來い！」

ベスタロツチは何が何やら譯が分りませんでした。しかし、巡査からの命令ですから仕方なく裁判所に連れてゆかれました。

ところが、恰度その時、裁判官は外出をしていましたので、彼は看守と一緒に疲れた體を休める

ことも出來ず、不安な心でその歸りを待たなければなりませんでした。

「貴様は泥棒でもしたのか！」

看守はベスタロツチに向つて横柄にたづねました。

「どうしまして、私は何も悪いことは致しません。」

「悪いことをしないのに何故こんな所に連れて來られたのだ。屹度貴様は嘘を言つて居るのに違ひない。泥棒をしたんだな！」

「いえ、何で私がそんなことを致しませう。たゞ警官から連れて來られたばかりです。」

「まだ嘘を言つてる、この泥棒爺！」

看守はベスタロツチを叱りつけました。

やがて裁判官は外出先から歸つて來ました。

看守は裁判官の前へ出て、

「お留守の間に悪者が一人連れられて來てゐます。」

「さうか、では直ぐに調べるから此處へ連れて來たが宜い。」

看守はベスタロツチを待たしておいた室に來ると、

「おい、泥棒爺！ お調べがあるんだ、俺と一緒に來い！」

第六課 ベスタロツチ

吐鳴りつけてベスタロッチを裁判官の前に引きたてました。

みると、その裁判官はベスタロッチとは以前からの親しい間柄の人でした。

「あ、あなたはベスタロッチ先生！ どうしてこんな處へおいでになりました？」

裁判官は驚いてたづねました。

「警官から連れて來られただけで、何のためだか私にも分りません。」

「さうでしたか、それはどうも御迷惑でございました。何とも御詫びの申し様もありません。」

と、裁判官は自分が過ちでもしたやうに、丁寧に頭を下げて詫言を述べました。

驚いたのは看守です。今まで泥棒だと思つて散々に叱り飛ばしてゐたのに、裁判官は取調べをす

るところか、頭を下げて詫言を言つてゐるのです。看守は眼をばち／＼させて、呆然と二人の傍に

立つて居りました。

「看守！ お前は何て馬鹿者だ、どんな事で此處に來た人だか分りもしない中に、悪者だ等と言つ

て失禮な奴だ！」

ベスタロッチを叱つてゐた看守は、今度は逆に裁判官から叱り飛ばされました。

裁判官はそれから心を盡してベスタロッチを歡待して、夜になつて別れました。

最初に彼を裁判所へ連れていつた巡査は、ベスタロッチの身装が餘り粗末なので、屹度何か悪い

ことをした男に逢ひないと考へたのでありました。

ナポレオンの感嘆

一千八百二年、政治上の争から國內に騒亂が起り、その勢は次第に強くなつて、政府もそれを鎮定することが出来ませんでした。

そのためスイス政府は困り果てた揚句、遂にフランスに仲裁を頼みました。

時のフランス大統領はかの有名なナポレオン一世でした。ナポレオンはスイス政府の依頼を聞く

と、早速承諾して仲裁の勞をとりました。

彼は先づスイス國內で相争つてゐる各黨派の間の軋轢を緩和して、平和を回復するために巴里で

會議を開くことにしました。

ベスタロッチもこの騒亂を憂へて、一冊の書物を出しました。

この書物には一日も早く國內の擾亂を鎮めるために、各黨派は速やかに講和しなければならぬ

ことを論じてありました。

これを讀んで彼の意見に賛成をする人が非常に多く、遂に選ばれてベスタロッチは巴里會議の委

員に擧げられました。

第六課 ベスタロツチ

その年の十二月、ベスタロツチは會議列席のため、フランスの首府巴里へ行きました。

會議の席上で、彼は政治上の議論を闘はすと共に、この機會を利用してフランスに自分の教育説を廣めようと考へ、委員達に向つて大に自分の學説を説きました。

然し、フランス側の委員の中には、一人として教育に理解のある人があなかつたので、彼は遂に自ら大統領ナポレオンに向つて、自分の説を聞いて呉れるやうにと願ひ出しました。

當時、ナポレオンは國事に忙しく、到底落ちついて彼の意見に耳を傾けてゐる餘裕がありませんでしたので、上院議員モングに命じて自分の代理としてベスタロツチに逢はせました。

ベスタロツチはモングに向つて、滔々と自分の教育説を説きました。モングも彼の意見に深く感嘆しました。

その後、嘗て屢々彼の學校を訪ねて來たことのある公使のネー將軍も、ナポレオンに向つて、口を極めてベスタロツチの教育説を賞讃して、彼の新教育法をフランスにも採用すべきことを熱心に進言したのであります。

其のためナポレオンは、以前にブルグドルフ學校の教師だつたネーフをフランスに招いて、新たに學校を設立しました。そして、彼は自らその學校を訪ねて實際の模様を視察し、ベスタロツチの新教育の如何に勝れたものであるかを知つて深く感嘆しました。

かうしてブルグドルフ學校の名は全歐洲に傳はりましたが、巴里會議の結果はベスタロツチを失望させずにはおきませんでした。

巴里會議の結果として、千八百三年二月遂にスイス新政府は倒れて、再び以前の聯邦政治に還りました。すなはち、ベスタロツチの事業を助けてゐた政府が倒れてしまつたのです。

そのためブルグドルフ學校は政府の助力を受けることが出来なかつたばかりか、遂に古城の使用も禁ぜられ、ベルンに近いミュンヘンビュツクゼーといふ町の古い寺に移轉を命ぜられました。

しかも、その寺さへ一年間だけの使用を許しただけで、期間が過ぎれば他の場所に移轉しなければなりません。

あ、彼はまたしても事業の挫折を嘆かなければなりません。

だが、既に彼の新教育の價値は全歐洲の各國で認められてゐるのです。たとへ政府が助力を與へなくとも、決して滅びる筈はありません。

果して、一年間の期間が過ぎて、ミュンヘンビュツクゼーを去ることになると、スイスの各地からは争つて自分の町に來て呉れるやうにと申し出て來ました。

ベスタロツチはそれ等の申し出を聞いて非常に喜びました。

以前では校舎を借りるのも中々容易ではなかつたのに、今では斯うして各地からの申し出を受け

第六課 ベスタロツチ

るやうになつたのです。彼の喜びは例へやうありませんでした。彼はいろ／＼と土地の模様を考へた結果、ノイフチャナル湖畔の古城イフェルダンに移轉することに決めました。それが千八百五年のことで、彼は既に六十歳の老齢となつてゐました。

全歐洲國民の賞讃

雪は白々と野を蔽ひ町を埋めて、身を切るやうな寒風が吹きつゞけて居りました。空には、雲の切れ目に寶石のやうな星が輝いて、夜明け近い東の空は微かに白く光つてゐました。寒い／＼冬の朝——まだ夜も明けやらぬ頃、イフェルダン古城の學校では、百人餘りの生徒達が、ざぶりざぶりと冷水を浴びては運動場に走り出て来て、先生達と一緒になつて勇敢な雪合戦をやつて居ります。

「突撃ッ！」

先生の命令と共に、一隊は大聲あげて、敵の方に雪の弾丸を投げつけ投げつけて突き進みました。

「進め、進め！」

敵方の方でも一齊に押し寄せて来て、敗けず劣らず奮戦をつゞけました。

見れば帽子などをかぶつた生徒は一人も居りません。みな、帽子もなければ手袋も用ひず、寒さ

も知らぬやうに勇しく活潑に雪合戦を續けてゐます。

やがて、校舎の方で六時を報ずる時計の音が聞えると、今まで敵味方に分れて戦つてゐた生徒達は、ぱつたりと合戦をやめて整列し、それ／＼の室に入つてゆきました。

室に入つた生徒達は、それから一時間ばかりは、今までの騒ぎに引きかへて、物音一つ立てずに課業の豫習に耽るのであります。

それが済むと、先生も生徒もみんな一緒に、廣い室に集つて校長の講話に耳を傾けました。

校長、それはいふまでもなくベスタロツチでした。彼は聖書、聖歌、又は道徳上の諸問題から題目を選んで、熱心に講話をつゞけるのであります。

イフェルダン古城の學校は、かうして身體を鍛練し、心を磨き、ベスタロツチの新説に基いてまことに自由な、そして愛に満ちた、家庭のやうな學校でありました。

生徒の數も日を追ふて増加し、その名聲は各國に擴がつて、ブルグドルフ以上に盛況を呈しました。

この頃、ナポレオン一世は頻りに四隣の國々を侵略し、武威を全歐洲に轟かしましたが、中でも獨逸はエナの一戦に大敗して再び起つことが出来ぬほどの痛手を蒙りました。

此の時、獨逸皇帝ウキルヘルム三世は自國の悲運を見て、

第六課 ベスタロツチ

「朕はフランスのために領地と勢力と名譽とを失つてしまつた。今や我が國は滅亡に瀕してゐる。然し、吾等は外で失つたものを内で補はなければならない。されば朕が唯一つの願ひは國民教育に最大の注意を拂ふことである。」

と、悲痛な叫びをあげました。

皇帝のみならず皇后も同様に心を教育に傾け、國民教育の最も重大であることを説きました。

そのため國內の學者や識者は、一齊に國民教育を隆盛にする必要を説き、中でもかの有名な哲學者ファイヒテは首府伯林に於て、「獨逸國民に告ぐ」と題して熱烈なる演説を試み、人々の血潮を湧き立たせました。

ファイヒテは先づ、

「神はたゞ己を助ける者のみを助けるのである。吾等獨逸國民はこの國家の難局に際して、自ら奮起する覺悟をしなければならぬ！」

と叫んで人々を警告し、續いて、

「國民の進歩發展は實に教育によるの外はない！ 國民教育は實に國家の礎となるものである！ それならば如何なる教育法を採らねばならぬであらうか？ これまでに行はれてゐた教育法では到底獨逸を救ふことは出来ない。實に、今日の獨逸帝國を救ふものはかのペスタロッチの教育法であ

る！」

と、叫びました。ファイヒテは更に語を續けて、

「人々はたゞ教育の隆盛といふことのみを考へてゐる。然し、これまでのやうな教育が如何に隆盛になつても、獨逸帝國を救ふことは出来ない。獨逸帝國を救ふものはたゞペスタロッチの新教育あるのみである。國民は彼の新説を實行して國家を救はなければならない！」

と重ねてペスタロッチを賞讃し熱叫を續けるのであります。

ファイヒテばかりでなく、皇后のルイザもまたペスタロッチの主義を賞讃し、彼の新教育を獨逸全國に布き廣めようと考へました。

そこで、皇帝ウキルヘルム三世は國務大臣に命じて、ペスタロッチへ丁寧な書簡を送らせました。

「吾が獨逸の教育を改良するために、親しく貴下の學校に研究生を送りたいと思ひます。就いては貴下の新教育を學ぶのには、如何なる青年を遣はしたら宜しいでありますか。年齢、品性、智識等について御意見を聞かしていただければ、余は貴下の望み通りの青年を遣はしたいと考へます」
こんな手紙でした。

ペスタロッチはこの手紙によつて、獨逸全國に自分の教育法が布き擲げられることを知つて、大

に喜び、早速、大臣に宛て、返事を送りました。

その結果、十七人の青年がイフェルダン學校に派遣され、三年の間熱心に新教育の研究に耽りました。

かうして、彼の新教育は獨逸全國に行はれることになりましたが、それと共にデンマーク、オランダ兩國政府も留學生を派遣し、續いては歐洲各國の教育家がイフェルダンに集つて来て、留學生だけでも四十人の多數に達しました。

また、歐洲各國の皇族、將軍、學者、實業家等が續々として彼の學校を參觀に来て、皆一様に感嘆の聲を洩さぬ人はありませんでした。

當時、ベスタロツチの名は全歐洲に轟き渡り、學校は日一日と隆盛に赴きました。

が、——ベスタロツチは決して自慢らしい言葉を洩したことはありませんでした。

「學校がこのやうに隆盛になつたのは決して私の力ではありません。みな、私を助けて呉れる教師達のお蔭です。私はたゞこの學校を創めただけのことです。」

と、謙遜の徳を忘れませんでした。

ベスタロツチは、その頃、も早や六十を越した老人でした。然し、元氣は少しも衰へず、毎日夜半の二時の鐘と共に床を離れ、寸刻の暇もなく校務に携はりました。

ベスタロツチばかりでなく、他の教師達も懸命になつて兒童の訓育に盡しました。が、ベスタロツチを初め教師達の生活の質素なことは全く驚くばかりで、老人の外はみな自分の室さへも持たず、晝となく夜となく生徒達と共に暮して居りました。

このやうな精勵と、心からの愛情とによつて訓育に努めましたから、イフェルダン學校は、常に春のやうな暖かな空氣に充たされて居りました。

ノイホフに歸る

イフェルダン學校の名は、かうして愈々歐洲各國に廣まつてゆきましたが、名聲が揚るにつけてベスタロツチの心は曇つて來ました。

彼は心の中で、

「この學校も今が隆盛の絶頂かも知れない、間もなく衰運に向ふやうな氣持がする。」

と斯う考へ續けるやうになりました。

彼がそのことを教師達に話しても、彼等は、

「何故この學校が衰へるのです。こんなに隆盛ではありませんか。歐洲各國からは續々と留學生が集つて來るし、皇族の方々までも參觀にお出でになつてゐるではありませんか。」

斯う言つてベスタロッチの注意を理由のないことだと思つて、ちつとも氣にしてゐないやうでした。

しかし、ベスタロッチの心配には大きな理由がありました。

第一には學校の名が高まると共に、諸國から集つて來た多數の生徒は、それぞれ生國が違ひ、豫備教育が異り、境遇が違つてゐましたから、到底思ふやうに彼の教育法を實施することが出来ませんでした。それ等の境遇や風俗習慣、言語教育等の同一でない生徒を訓育してゐると、自然に彼の愛情的訓練の美風は失はれて來る傾があつたのです。

それにまた、教師達の間意見の衝突があつた爲めに、學校の事業を協力一致して進めることが出来なくなつてゐました。

ベスタロッチは此れ等の理由からして、早く大改革をしなければならぬと考へて居りましたが他の教師達は一向にそれ等の點に氣づいては居りませんでした。

或る年のこと、彼は新年の式場で全校の教師達に向つて、

「私達は將來大なる困難に遭遇するであります。私は既早や老齡のことであるから、何時世を去るかも知れないが、諸君は飽くまでも學校に残つて、その發展に力を盡していただきたい。幸ひにしてこの學校は名聲をあげました。しかし、その名聲はやがて學校を衰へさせるものであることを

忘れてはならないと思ひます。教育といふ仕事は名譽を得るための仕事ではありません。世間から受ける名聲に欺かれたら到底まことの發展を遂げることは出来ません。」

と、悲痛な演説をいたしました。

だがまだ、教師達はベスタロッチの心の中を知ることが出来ませんでした。

處がベスタロッチの警告は、年と共に事實となつて現れて來ました。教師達は互に意見の衝突をしては争ひ、遂には學校を退いてゆく者も次第にその數を増してゆきました。

が、何といつても歐洲各國に響いたイフェルダン學校のことですから、後から後からと立派な教師が來ましたので、依然盛況を維持することが出来たのでした。

千八百十三年ナポレオン一世がロシアと戦つて敗れると、ロシア、オーストリア、ドイツ等の聯合軍を組織して、フランスを討つためにスイスへ集つて來て、バーゼルに本營をおきました。

この本營には各國の皇帝もゐられましたが、これ等帝王はベスタロッチの熱誠と純眞とに感ぜられて、非常な好遇を與へられ、殊にロシア皇帝は名譽ある勳章までも授けられました。

やがてナポレオンは戦敗れてフランスを追はれ、歐洲の平和は克復しました。

平和になると共に、イフェルダンには戦争前にも増して各地から參觀者や研究者などが集つて來ました。その中にはオーストリアの皇族などもありました。

かうした盛況に伴つてベスタロツチは、參觀者達の應接に忙しく、以前のやうに校務を執ることが出来なくなりました。

それと共に、彼が以前から心配をしてゐた衰運の兆は次第に現れ、学校の財政はだん／＼と紊れて來ました。そればかりか、外國からの留學生達のために、これまでの美しい校風は次第に失はれてゆきました。

ベスタロツチはこの有様を見て少なからず心を痛め、何とかして以前の學校となしたいと思つて、いろ／＼と苦心に苦心を重ねました。

學校がさうした衰運に向つてゐた時、ベスタロツチには悲しい日が來ました。それは永い間、彼と共に困苦を共にしたアンナ夫人が世を去つたことでした。

アンナ夫人は永年の間ベスタロツチを扶け且つ慰めてゐたのに、遂に彼よりも先に世を去つたのでありました。夫人を失つたベスタロツチは、悲嘆に暮れて暗い一日一日を送つてゐました。

そして毎夜夫人の墓に詣つて、時には夜明け頃まで墓前に泣きつづけてゐたこともあり、斯うして悲みの中に、一方また學校の經營も思ふやうにはゆきませんでした。彼が改革を命じたシユミツドといふ人の遣り方がよくなかつた爲めに、あれ程にまで一時はその名聲をあげたイフェルダン學校も次第に衰へて行くのでした。

しかし、ベスタロツチはその間にあつても、或ひは書物の出版をしたり、孤兒院を設けたりして出来る限りの力を盡して居りました。

が、千八百二十五年、遂に學校を閉ぢなければならぬことになりました。

ベスタロツチはまたしても事業の挫折を嘆かなければなりませんでした。

彼はその年の三月二日、シユミツドと數人の弟子とを連れて永年住み馴れたイフェルダンの古城を後にして淋しくノイホフに歸つてゆきました。ベスタロツチはこの時、既に八十歳の老翁でありました。

彼が二十餘年の間全力を注いだイフェルダン學校も、あはれ終末はかやうな淋しいものでありました。

久遠の光

ベスタロツチはイフェルダンから歸つて來てからも、決して自分の事業に對する熱誠と精力とを失ふことはありませんでした。

彼はノイホフに歸ると筆をとつて「白鳥の歌」「子の生涯」「リエンハルドとゲルトロルド」第五卷、等の書物を著しました。

第六課 ベスタロツチ

それと共に、ノイホフに貧民學校設立の計畫を樹てました。が、彼はその貧民學校の建築中、その竣工を待ちきれずに、近隣の村の小學校へ行つて日々數時間の授業を試みて自ら慰めて居りました。

ノイホフに歸つて來た翌年の夏、彼はボイゲンといふ處の孤兒院を訪ねました。

この孤兒院はベスタロツチの主義によつて教育してゐましたから、彼の來訪を大に喜び、兒童達に歓迎の歌を唱はせ、名譽ある椀の冠を彼に捧げました。

ベスタロツチは喜びと感謝の餘り、涙を流して申しました。

「私はこの冠を受ける價值のない者であります。どうぞ私にこれを受けさせないで下さい。」と、固く辭退しました。

彼は何處までも謙抑の徳を忘れぬ人でありました。

その後、彼は「予が運命」といふ論文を發表しました。

この論文は、以前にイフェルダン學校にゐたニーデレルといふ教師の説を非難したものでありました。

處がニーデレルはこの書を見て大に憤激し、自分の説の正しいことを力を極めて説きました。すると此の時、ニーデレルの友人のビーバーといふ者は一冊の書物を著して、ベスタロツチの人格か

ら學說に至るまで一々論駁して、口を極めて彼を罵つたのであります。

ベスタロツチは憤りました。彼はその恥辱を雪ぐために答辯書を書かうとしてゐますと、チューリツヒの或る新聞はビーバーに味方をして、

「ビーバーの攻撃に對して一言の答辯もしない處を見ると、ベスタロツチといふ男は杖を見たばかりで逃げる犬のやうな人間だ。」

と彼を罵りました。

ベスタロツチはこの記事を読んで火のやうに憤りました。そのため、前から健康を損つてゐた彼の體は急に衰へが見えて來ました。

だが、彼は醫師に向つて、

「私の死期ももう近いてゐます。しかし、この恥辱を雪ぐためには、どうしても今から六週間だけ生きてゐなければなりません。」

と叫んで、醫師の止めるのも聞き容れずに、病苦も忘れたかのやうに答辯書を書きはじめました。

しかし、既早や彼は病のために十分に思ふ通りのことを書くことが出来ませんでした。そのうちに、病は次第に重くなつてゆきましたので、たうとう醫師の言葉に従つて、ブルツグといふ近所の町に移つて養生をすることになりました。

この時は早や、彼は自分の死の迫つてゐるのを知つて、ニーデレルやビーバーをも許し、答辯書をも發表しない決心を定めてゐたのでした。

ブルツグの町に移つてから二日目のこと、彼は枕邊に集つてゐる弟子達に向つて申しました。
「可憐しい兒等よ、お前達は私の事業を続けることは出来ないかも知れない、それは已むを得ないことだ。然し、隣人のために善事をする事は出来るだらう。また、貧民教育のために盡力をする事も出来るだらう。私はもう直きにお前達と別れて永久にこの世を去らうとしてゐる。私は私の敵を許した。私がこれから永久の平和に入らうとするやうに、彼等も平和の夢を見ることが出来るだらう。神様はやがて私をこの世から導き去られるであらう。私はそれを深く神様に感謝する。お、私の兒等よ、ノイホフで静かに住つて幸福な生活を送れよ。」

彼は、最後まで貧しき兒童等の身の上を忘れることが出来ませんでした。敵を許し、自分を忘れて、ひたすらに貧兒の身を思ひ、子弟への訓戒を與へたのでありました。

ベスタロツチはこの訓戒を與へると間もなく、眠るやうに天國へ還つてゆきました。千八百二十七年二月十七日、時に年八十二。

あ、ベスタロツチ！彼の一生はまことに波瀾に富み、また苦闘に満ちた生涯でありました。だが、彼の胸に燃えた愛の焰は貧兒の父、愛の權化として、久遠不滅の光を青史にとどめたのであります。

遺骸はノイホフの近村ビルに葬られました。

「ベスタロツチの偉大なるは、其の學術にもあらず其の事業にもあらずして、實に其の精神にあり、云々」

此の段は全篇の總括で、彼が愛情と信念とを以て、終始一貫、心身を捧けて教育に盡したことを述べて、全篇の結尾としてゐます。

「チューリヒ市街頭、行人旅客をして、其像下に低徊俯仰せしむるもの、云々」は冒頭の「山水の美を以て鳴る、スイスのチューリヒ市街頭に粗服をまとへる、云々」と相呼應して一篇をしつくりと引締めてゐます。

ノイホフに於ては貧民の救助者たり、「リエンハルトとゲルトロルド」に於て人民の説教者たり、スタンツに於ては孤兒の父たり、ブルグドルフ、ミュンヘンブックゼーに於ては新國民學校の建設者たり、イフェルダンに於ては人道の教育者たり、専ら他人の爲を謀り、己れの私を顧みざりき。希くば天の祝福彼の上にあらんことを。

は其の銅像に臺下に刻した有名なる碑銘なのであります。

第七課 川 柳

卷二に俳句を出し、こゝに川柳を出してゐます。是れで川柳の如何なるものかを、ざつと知らせやうと云ふのです、川柳も國風の一つです。

川柳は徳川時代の末期に生れた文學で、滑稽洒落を詠出した一種の詩形です。前句附きの一轉したもので、人世の弱點を指し世態の缺陷を突くのを旨として、特に着想の奇拔を尊びました。其の形式は俳句と同じく五七五の十七字からなつてゐるのが普通ですが、中には七七五又は五七七などの句からなつてゐるものもあります。俳句とは全然其の趣を異にして切字季などの約束は一切ありません。前句附は元俳諧の附句から出た一種の文學的遊戲で、點者から前句を出して多くの人に幾句にても隨意に附句をさせるものでした。初めは多く京阪地方に行はれましたが、貞享元祿の頃から江戸にも盛に行はれ、寶曆の頃から前句附の附句は一句立てとして作られる新傾向を生ずるに至り、四時庵紀逸の選六玉川・燕都枝折の如きは當時の附合の中から面白い句ばかりを選び出してゐました。其の頃前句附の點者に柄井川柳と云ふ人があつて、前句附の點者として群を抜き、流行日々に盛んになりましたが、夙に其の

機を察して附句の一句立を唱へ、前句附は附句ばかりで十分面白く傳へられるものだと唱へ出して、明和二年に初めて俳風柳樽初篇を出して、前句附の中から句意の獨立したもので巧みに人世の弱點を捉へ皮肉な諷刺を試みたものを選んで載せました。柳樽の中の句には一切作者の名を書いてゐませんが、其の中には無論川柳の作も編入されてゐるのであります。それから年毎に一冊宛刊行し、其の風調市井の間に大に行はれました。又當時別に柳多留拾遺・末摘花など同様の小冊子も出版されました。川柳は元の名を其の儘に之を前句と稱して、別に新しい名を擇びませんでした。川柳の點じた句であるからして、世に之を川柳點と言ひ略して川柳ともいひ、又其の體の句をも川柳と言ひならはすやうになりました。寛政二年に川柳が歿した後、點者互に相軋轢して隨所に萬句合を興行し統一する所がありませんでした。和笛老人が斯道絶滅を憂へて柳樽二十五篇から二十九篇迄を編次し、尋いで花落庵一口・門柳などが又其の後を受けて四十六篇に及びました。其の後二代川柳・三代川柳相繼いで四年柳樽を續刊しましたが、年を経るに従つて漸く左道に入つてしまつたのを、文政七年に四代川柳が其の後を繼いで點者たるに及んで、早くもこゝに着眼して川柳の本領は人世の眞理を活寫し、寸言寸鐵を以て人の臆を抉り、或は人の願を解くことを説き、又前句を廢して、

初から一句で句意の獨立した滑稽を詠出することゝして、之を俳風狂句と改め稱しました。こゝに於て斯道が又世に盛んになり之を川柳中興の祖とします。五代川柳に至つて偶々天保の改革に會ひ、風俗に關するものは一小冊子でも嚴に處罰されることになりましたから、川柳も自から大に戒めて柳風新式を定め、其の風調は特に心學を旨とし教訓人を善に導かんことを専らとし、忽ち興味索然たるものと化し去りました。其の後改革の新政は廢れましたが、狂句川柳は再び舊勢に復し難く、其の風調年を追ふて左道に入り卑陋に傾き、僅に其餘喘を保つに過ぎませんでした。降つて明治三十四五年の頃に至り、阪井久良岐・井上劔花坊・岡田三面子などが出て舊體の復興に努め、又新觀察法に依つて新事物を詠出して茲に新生面を啓きましたが、其の風調輕洒にして人情の委曲を悉し、世態の變化を穿つに妙を得てゐましたので、狂句川柳は再び其の流行を極めんとする傾向を呈するに至りました。

川柳の始祖柄井川柳は、通稱八右衛門、名は正通、別に綠亭・無名庵などゝ號し、江戸淺草阿部川町の名主です。寶曆から明和に掛けて、前句附の點者中最も流行した人で、月々萬句合の刷物を出して居りました。其の刷物の體裁が伊勢曆に類してゐるところから世に之を曆刷又は曆板の前句附とも言ひました。川柳は夙に前句附の附句を單行せしめんことを唱へ、

明和二年に初めて一句で句意の分り易いものを撰んで、俳風柳樽初篇を出しました。ところが其の風調大に市井に行はれ世に之を川柳點と言ひました。初め柳樽の外に川傍柳・柳宮など同種の書を出版しましたが、獨り柳樽ばかりが世に流行して今日に至るまで其の名を擅にするに至つたのであります。寛政二年の九月二十三日に、年七十二を以て歿しました。淺草榮久町龍寶寺に葬りました。「風やあとで芽をふけ川柳」は其の辭世の句なのであります。本課に出てゐる川柳もみんな此の柳樽の中から撰び出してあります。

武藏坊とかく支度に手間がとれ

辨慶が七つ道具と云ふ厄介な物を背負つてゐるところを諷したものです。斯うして一面に物持が支度に隙取る世態を諷しようと思ふのであります。柳樽初篇に出てゐる川柳です。

義貞の勢はあさを踏みつぶし

義貞の至誠神に通じて、稻村ヶ崎十八町は俄に干潟となりました。寄手の大軍はどしく

進撃します。鎌倉方の周章狼狽は言ふまでもありません。が、それよりも尙ほ一層面くらつたものは、其の汐の引いた處を棲家にしてゐたあさり貝であつたらうと云ふ、川柳氏獨特の見付どころが如何にも奇抜です。

尊氏がうづもなく逃けて行き

尊氏が九州落を諷したもので、「とはうづもなく」の一語がよく利けてゐます。

道問へば一度に動く出植笠

恰度田植頃で、田の中には男や女や澤山の人が頻に苗を植ゑてゐる。通りかゝつた旅人が道を問ふと、植ゑてゐた人達がみんな一緒に顔を上げて、問はれた道を指差したと云ふのであります。「一度に動く」に田舎人の純朴さが能く現はれてゐます。

寝て居ても團扇の動く親心

母親が赤坊に添乳をして寝かし付けてゐるうちに、自分もついうとくと寝てしまふ。しかし子の爲に蠅を追つてゐた團扇の手は、やつぱり無意識に動いてゐると云ふのです。如何にも情の籠つた句なのです。

長話とんぼのとまる槍のさき

・ 供を連れた武士が途中で人と嘶をしてゐる。供の奴は槍を持ったまゝ後の方に踞んでゐる。長く槍が動かないので、赤蜻蛉が長い槍の先へ一寸とまると云ふのです。蕪村の「日は斜關屋の槍にとんぼ哉」と同巧異曲です。

取次に出る顔のないすゝはらいひ

煤拂で、家内總掛りで働いてゐる眞最中、立關で「御免なさい」と訪なう聲がする、皆が顔を見合せると、誰も彼も煤だらけで、顔が眞黒だと云ふのです。

黒犬をちやうちんにする雪の道

雪の夜道の有様で、黒い犬を提灯にしたと云ふのです。犬を提灯にすると云ふところに、一寸可笑味があります。

雨宿りの額の文字をよく覚え

雨が降出したので、あたふたと附近のお社へ走り込む、何時迄待つてゐても雨は中々止みさうもない、所在がないので其の邊に懸けてあるお社の額や貼札などを眺めてゐる中に、到頭其の額に書いてある文字までも覚えてしまつたと云ふのです。能くある圖で、雨宿りの有様が見るやうです。

犬を見て猫は脊中へ腹をたて

猫と犬とが喧嘩してゐる有様を見て詠んだ句で、「猫は脊中へ腹をたて」が能く利けてゐます。犬を見てフウツ／＼と脊中を突立てゝ怒つてゐる猫の有様が見るやうです。

いゝ着物着ると内でもかしこまり

大人と見ても面白いが、やはり小供を詠んだ句とした方が面白いと思ひます。いつも臍白ばかりしてゐる子供が、晴着を着せられると、何時になくかしこまつてゐるといふのです。子供の常習をうまく句にしたところに言ふに言へない味があります。

はいご賣まけると屋根へ掛けて見せ

小商人の氣持が能く出てゐます。

はしご賣「はしご……はしご……はしごを買つて呉れませんか。」

客「はしごは幾ら……？」

はしご賣「お安く××に致しませう。」

客「そりやあ高いよ。」

はしご賣「お高いどころではありません、大負けなのです、しかし口開けですから、××

に負けて置ませう。」

客「さうか、ではまあ買つて置かう。」

はしど賣「どうも有難う存じます。たうとう負けてしまひましたよ、此の梯一つあればど

れくらの便利でありませう、一寸屋根へ登らうたつて、わけありませんや、

ちやうど此の屋根には手頃でさあ。」

知つた人ばかり強ひる子の給仕

子供の氣持が能く出て居ます。能くある事で、ズラリと竝んでゐるお客さんの中で、知つた人の所へ許り給仕に出て、見知らない人の前は素通りする。子供の遣りさうなところを旨く捉へたところに此の句の面白味があります。

いい所へ来たと脊高使はれる、

脊丈の低い人が、棚の上を見上げて、「あゝ、困つたなあ」と濡してゐるところへ、ちやう

ど遣つて来た脊丈の高い男、……「オ、好い所へ来た、あれを取つて呉れ」……これも能くある圖です。

人を汲出して井戸がへ、まひなり

ヤアレ引いた……ヤアレ引いた……ガラ／＼ざぶり、ヤアレ引いた、ヤアレ引いた、ガラ／＼ざぶり……井戸の中から合圖をみると、井戸側にゐる人が頻に綱を引く、其のうちにスツカリ井戸かへが出来てしまふと、井戸の中で働いてゐた男が桶の中へはいつて上つて来る、井戸かへの殿は井戸の中にはいつてゐた男です。「人を汲出して」が能く利けてゐます。補充文には矢野文雄氏の「川柳點」を擧げておきませう。

川柳點

今年こそ大晦日には早く仕事をしまひ、ゆつくりと年を取るべしと、何れの家も大晦日には其の心掛をなせども、何が一年の終の日とて、折角に外向の用を済ませば、家内の用向、元日の支度に、とう／＼夜に入りて、大騒のうちに舊年、新年の境目なる十二時の時計は鳴つて、舊年の終

第七課 川 柳

の事を爲しつゝ、はや既に新年に入るの類は、何れの家も珍しからぬと見え、古き川柳にも、
据風呂に下女が入るうち春になり

蓋し、家内總じまひの殿として、下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐること見えたり。昔
も今も變らぬものは此等の有様なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

むべ山のなかに嵐の年始客

これも實際有りさうなることなり。又曰く

歌がるた人と云ふ字に手が五つ

此等も昔の句ながら、今も同様、カルタの句の頭字の人と云へるには、五つどころか。一時に十の
手も出づべし。又曰く、

一日の御慶炬燵へ取りよせる

且那樣歸宅の後、夜分に入り、「どれく新年の名刺を持って來よ」と言ふのは、何れの家も似たるも
のなるべし。又曰く、

上るなと言はぬばかりの帳を出し

これは、今の若き人には分らぬやも知れず。今ならば左の如く言ふを可とす。

上るなと言はぬばかりの箱を出し

これは、名刺入れの箱と知るべし。又曰く、

嫁の出るまではまだるい歌がるた

佳興に入る頃は、若き嫁さん迄一座に飛入る。カルタの花の盛なるべし。又曰く、

櫓子はんじに同居駒下駄と福壽草

これも町家の狭き處には、往々見掛くる實景なり。

凡そ川柳は、突如として來り、初より其の題を言はぬところに妙味あり。

芭蕉は飛込み道風は飛上り

若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべし。其の出し抜なるところ面白し。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

の如き有名なる句も、其の突如として出づる處に妙あり。

釣りなどもしてみる馬鹿な軍學者

常に文王が來るとは限らず。太公望氣取りの軍學者も困りものなり。

其の暗さ隼太櫻に突當り

まさかに暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあるまじけれども、何かなしに可笑し。

第七課 川 柳

第八課 噴 油

右の諸句は、川柳として品のよき方なり。若し其の秀逸と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆尾籠千萬にて、士君子の間に語り難きもののみ。其の愈々尾籠なるほど、其の特色益々著し。若し川柳をして尾籠千萬の境より脱せしめば、蓋し詩歌中の珍ならん。

第八課 噴 油

原文は「ひとみの旅」の中の「越後の油井戸」の一節です。筆者は杉村楚人冠氏で、大正二年五月東京朝日新聞に掲載されたものなのです。

「ひとみの旅」は大正二年の十月に、丙午出版社から發行された「大正文庫」の第八篇で、楚人冠氏が東京朝日新聞に掲載した過去の紀行を集めたものです。「ひとみの旅」の解題は同書の巻頭に掲げられた序文の中に、

片々たる小冊子ではあるが、之でも一應の主張はある。

此の書に收むる所の諸篇は、盡く東京朝日新聞に掲載したもので、少しでも現代に接觸し人間に交渉する所あるものゝみを取つてある。山水の景がどうの、風月の樂はこうの

と云ふ様なことは一切書かない。書けないからでもあるが、書かないと云ふ意地もある。

他が花見の旅、月見の旅など云ふに對して、此を人見の旅と名づけた。我ながらまづい名だと思つてゐる。

とあるのを見て、成程と合點が行きませう。「ひとみの旅」は「人見の旅」です。どこまでも楚人冠らしい奇抜さが先づ讀者の感興を唆りませう。左に教材に關係ある「越後の油井戸」の數節を引用して置きませう。

越後の油井戸

一、石油とダイヤ

今更ロータリー式でもあるまい。ロータリーなど異國の言葉を使ふから事頗る面倒に及ぶが、之を輪轉機と碎けてかゝれば、我が朝日新聞は抑ロータリーの元祖である。印刷

機と掘井機との相違こそあれ、日本の新聞社で初めて、マリノニ式輪轉機を輸入したのは我社だ。夫を掘井機に限つた言葉でもあるかのやうに、一言目にはロータリー、ロータリーはちと小癩にさはる。今更事新しげにロータリー式でもあるまい。

其の井戸掘のロータリー式にしても間違つた所はあるが、兎に角、昨年の夏既に書いた。書いた當時からロータリー式の前途に關して、必ずしも無暗に心を許して樂觀もする譯に行かぬ由を云ひ添へておいたが、僕の此の考へも尙かはらぬ。

昔、南アフリカはキムバレーの邊に金剛石鑛坑の開けた時、金剛石の出るのは黄土ヤロクレーと唱ふる土地の中に限つてゐた。所で此の黄土が段々なくなつて、あはや南阿の金剛石探掘事業も之で一段落かと危ぶまれてゐたところに、焉ぞ知らん黄土の下に又別に、ブリユクレー青土と唱ふる土地の層が始つて、此處からは更に一層澤山な一層質のいゝ金剛石が採れて來ることになつた。此に於てか、鑛石界の人氣大に持ち直して、斯う無限の財寶を掘り當てた以上何處迄儲かるかも知れぬと喜んだが、探掘の量が増すに隨つて、自から植下の必要が起る。之をしまいとて、トラストやうのものを作るやら、輸出量を制限するやら、さんざ慾ばつた相談ばかりしてゐる中、大得意とする米國に恐慌が起つてさつぱり買行が減る。これが

やつと回復する頃には、探掘の量が思つた程にも増加せず、大抵一定の量に止まつてゐることが知れた。英領の南阿が、夫でやゝしよけ返つてゐる折も折、ついお隣の獨逸領西南アフリカからは盛んに金剛石がとれて來た。英領の方でいくらやきもきしたとて、如何ともすることも出來ないのである。

之を越後の石油に譬へるのは、當らずと雖も遠くはない。何分目に見えぬ地底のものを掘り出すことゝて似た所が大分ある。從來淺層だけ掘つて、ほどで油が盡きたと思つてゐた所へ、更にロータリー式の深層掘で勢ひを復した所は、黄土層から青土層に移つた金剛石の探掘と趣が似てゐる。之に氣を得て左ながら無盡藏の財源を得たやうに一部の人々が樂觀してゐる所も似て居れば、之を好個の材料として株屋共が大儲けするつもりで失敗つた邊も何やら似てゐる。値下問題も彼と同じ様に起れば、外國側の競走も相手が獨逸でない許り、既に早くから問題となつてゐる。斯う何もかも似た次手に産額の停滯迄も南阿の金剛石と似て來たら、夫こそ大變である。

縁喜でもないと怒ること勿れ。相手が元來地の中の目に見えぬ處にあるものである。近頃巴里の實驗心理學會で、ヴィレ教授の試験した、デヴィニング・ロットでも用ふなら、

格別、さもない限りは常るも當らぬも此推量に過ぎぬ。ロータリーの威力がそれほどえら
いものなら、何處を掘つても深掘さへすれば油が出さうなものだが、今日日産二百石の三
百石のといふ景氣のいゝ井戸を掘り當てたのは、刈羽郡の西山油田だけである。新津の如
きに至つては、さしものロータリー式も其の効を奏せず、次第に産額を減じて、目下大分
悲境に陥つてゐる。之れが、何よりの證據である。

つまり、誰にも分らぬといふに歸する。

二、石油と石炭

試みに石油の當業者から、石炭と石油とを比べさせると、石炭を採掘するには、穴を掘
るにしても、掘つた穴から採り出すにしても、比較にもならぬ程の大勢の人間がかゝつて
此等が晝夜を分たぬ暗の中で命がけで働く。折ふし火でも起れば、人も死ぬ炭も焼いてし
まふ、掘り出した炭はといふと、之を何處へ運ぶにしても大變な人手がかゝる。石油に至
つては井戸を掘るにも、汲み出すにも人手が寥々三五人ですむ。汲み出したものを送り出
すには、地下の鐵管を通つて何里の先へでも人手を藉らずに送らせられる。石炭より見る
と、其の安々と儲かること勿體ないやうだと云ふ。

反對に之を石炭側から云はせると、石炭なら、シャフトを入れて見て大抵何處が鑛脈とい
ふ見當がつく、一たび之を掘り當てると、長さ幅は勿論のこと、大凡そ何程の深さとい
ふことも分る。石油井戸に至つては、之が全く分らぬ。油の能く出る井戸の傍が宜からう
とて、其の直ぐ隣へひたくと近づけても出ぬことがあるし、さうかと思ふと、丸で油の
出ぬ井戸四五本に取り囲まれた真中へ掘つても、立派に出て來ることもある。人夫の數が
石炭より少いといふが、其の代り高價な器械もある、石炭は掘出した儘直ぐ物の用に立つ
が、石油井戸から汲み出した原油と來ては、さうは行かない。遠く之を製油所へ送らねば
ならず、製油所では一々面倒な蒸餾や洗滌もしなければならぬ。炭坑には火災があるとい
ふが、石油井戸にも矢張り時々火災がある。兩者を比べては、石炭の方が遙に手堅くて、
石油の方はリスクが多いと云ふ。

要するに分らぬのである。内藤久寛氏の談によると、米國邊では石油の所在を地表から
鑑定する器械を頼りに賣りつけに來るさうだが、そんな器械でも出來ぬ以上は、丸で暗雲
に掘つて、暗雲に掘り當てるに過ぎぬ。春來石油株の暴騰から急に思ひついて、大分越後
迄調査に來た者もあるさうだが、結局分らずして皆歸り去つた。分らぬのが至當で、分る

といふのはウソである。

斯う云つてしまへば、丸で石油に對して適歸すべき所を知らぬ譯になるが、其處には又自ら其處がある。「日本石油」にしても「寶田」にしても、其處等中にある限りの小會社を併合した大會社で、之が有する鑛區とて、一箇所や二箇所で無い。一方で油が出ぬとて、他の方で出る。尼瀨が衰へたとて、東山が起り、新津でロータリーが利かぬとて、西山には利く。斯くして善悪さまざまな鑛區の景氣を總合して來れば、自から「寶田」には「寶田」「日油」には「日油」の平均利益が見られる。之を基にして見るなら、必ずしも適歸する所を知らぬでもない。又しても例に引くが、南阿の金剛石鑛坑がセシル・ローヴの手で大合同を行つた時、矢張夫であつた。

僕のガラにない話だが、念の爲めに本年初からの石油株の相場を検するに、二月一日の先物は「日油」の方で八十五圓九十五錢揃み「寶田」は七十六圓四十五錢揃みで、此の位が先づ前々からの通り相場で續いた。春以來暴騰して五月五日其の最高に達した時は「日油」百三十九圓四十五錢「寶田」百二十三圓となつた、其の後これが追々下つて、去る二十三日は「日油」百七圓五十錢「寶田」九十八圓となつてゐる。利廻りの上から云へば、

二月一日の時「日油」九分三厘「寶田」七分九厘に當り、五月五日は五分七厘と五分六厘強とに當る。二十三日に至つては兩方とも七分内外である。兩會社の今日迄の配當を基として、各鑛區の平均産額なるものに眼を着くるなら、二月頃の七八十圓相場も格外れに安いと共に、五月初めの百三四十圓もべらぼうな相場と素人には見える。西山のロータリーで原油の供給が殖えもしたし、近來發動機の流行で石油の需要も加はつたに相違ないが、トラストで價を維持するでもあるまいし、外油の競争がないではなし、春來の株の暴騰は隨にちとあわて過ぎてゐる。——と云ふこと位のことは云へさうなものだ。

聞いた風の理窟も大抵此處等で切上げて、いでや實地に油井戸の見物にでも出かけやう。

三、油井噴騰

一行の列車が西山停車場へ着くと大勢の出迎への中になつかしや小松徳太郎君の顔が見える。にこくと僕の方を向いて笑つてゐる。小松君は「寶田」の鑿井技師で、去年も一昨年さいも新津で逢つて、油井の案内も頼めば鑿井の講釋も聞いた。時には一つになつて飲んだこともある。去年から此の西山へ轉地したのたさうだ。油田は停車場から三四丁、一同は勢揃ひして出かけた。行く／＼小松君の語るを聞けば此處の「寶田」の四號井といふの

は、ロータリー式の最も成功したもので、丁度熱海の大湯のやうに、一日に十四五回、時を定めて石油が自然に噴騰する。平生は油の逃げんことを恐れて、口を塞いで横の方へ油を吐き出すやうにしてあるが、今日は珍客への御馳走にとて口を開けておいてある。いつも二時か二時半頃に噴出するのが、今日に限つて折よく時が後れてまだ噴出せぬ所を見ると、丁度先方へ着く頃に噴き出すかも知れぬとのことであつた。

時計を見ると、三時少しまはつてゐる。憶へば、去んぬる明治二十六年六月二十六日の午後三時、東山は加津保澤の油井が突如爆發して油を噴き上げ、地に溢るゝこと方五十間に及び、一晝夜に汲み取るところ一千樽にして尙油の置場に困つたと云ふ話があつて以來石油自噴のことは諸方で時々傳へられたが、未だ親しく目のあたり見たことはない。何だか樂しみな様な、心配な様な氣がして、微かに胸の打ちさわぐを覺えた。

忽ち「それ出た！」と誰やらの呼ばゝる聲が聞えた、丁度寶田鑛區の方から案内されて、例のロータリー式の井戸櫓を建てるところ、夫れから井戸を掘るところ、掘り了つていよいよ汲み出すところなど順々に見てゐる時であつた。すはよとばかり人々の指さす方を見やれば、何處にも油に塗んで黒くなつた第四號井の櫓が、腹を割いた小山の赤土を背景に

して、轟然と立つてゐる、其の下の方から赤犬の大きなのが見る間に之が段々高くなつて、赤ちやけた大蝸が頭を伸べ脚をもがいて、よろ／＼と飛び上りかけては落ち、又飛び上がりかけては落つるやうな風になつて來た。夫れが、落つる毎に、今度上る時は一尺、二尺一間、二間と高くなつて行く、油が今し噴騰しかけた所である。一同は一語なく、何なることかと眼を瞠つて見てゐる。油は段々に落ちては高まり、落ちては高まる。其處に立ち働いてゐた人夫は、手に／＼菰を被り笠をかざして、右往左往に逃げ惑ふ、一天俄にかき曇つて、沛然として驟雨の將に至らんとする時、先づほたり／＼と大粒の雨が先驅となつて落ちて來た時の光景を思はせる。

且つ落ち且つ下る間に赤犬の頭が蝸の脚のやうになり、更に上つては、古い草双紙の畫などにある波の花のやうに粒々が小さく分れて、色は代赭から茶褐色に代つて、次第と黄色に薄まつて行く。頓て一ゆりゆつてふつと立つよと見れば、やゝ垂れ氣味であつた頭を發矢と立て直して、十五間の井戸櫓を、黃龍の天に冲するが如く、物の見事につきぬける。夫が又一ゆりゆれば、如何にぞや、油は色白うぼけて、櫓の上六七間の高さに立ち騰り、末は雲の如く霧の如く、風のまに／＼搖曳して、餘瀝さら／＼と下なる板屋の屋根を打つ。